

---

# 武士道・is・Dead

佐武 卉之佑

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

武士道・i s・D e a d

### 【Zコード】

N4472E

### 【作者名】

佐武 辰之佑

### 【あらすじ】

主人公のカエルは車の中で目を覚ます。隣にはコトカという女の子がいる。しかしカエルには全く記憶がない。「コンピューターの中という不思議な世界でカエルは少しづつ記憶を取り戻し、自分自身を探してゆく。「井の中の蛙大海を知らず、されど蛙は天の高さを知っている」

「ここによ、眠ってしまえば」

女が心の声のりが聞こえる。

「眠ればここによ。あなたの見ている闇が全部溶けてなくなつてしまつまでね」

女が僕の瞼にそつと手を触れるのを感じる。僕の見ている闇は白っぽく歪む。女の手からは不思議な安らぎが感じられる。女の手の指がゆつくりと僕の瞼を撫でるとそれに合わせて僕の見ている闇にはさまざま色が浮かび上がる。

「ここによ、すべて忘れて眠つてしまえば。結局あなたはここに床つてくるんだから」

耳を濟ませてみても女がどこにいるのか正確な位置が掴めない。それは頭上から聞こえてくるような気がするし、あるいは下から聞こえてくるのかもしれない。

「一本の糸を辿つてくればここ。あなたはきっとここへ帰つてこられるはずよ

その声は僕を落ち着かせてくれる。ふつくらとしたリズムを僕は感じる。そのまま僕は眠ってしまう。

気がつくと僕は部屋の中で絨毯に横たわっている。部屋の窓からは明るい太陽の日差しが部屋の中を貫くようにして注がれている。光の帯の中で小さな埃が舞い上がってキラキラと光を反射させていく。部屋の中には古ぼけたタンスや、テーブルが置かれて僕は色あせた赤色の絨毯に寝転んでいる。僕は胸に小さなロゴが入った真新しいティーシャツを着て、短パンを履いている。随分汗を搔いたみたいで背中がぐつしょりと濡れているのがわかる。

起き上がりつて辺りの様子を窺つてみる。部屋の中は静まりかえつていて物音ひとつしない。少なくとも僕以外に誰かがいる気配は感じられない。ドアを開け、部屋の外を覗き込むようにして見回す。ドアを開けたときに発した音が場違いのように大きく耳に響いてくる。その音が家中に響き渡つたように思えるけど、その音を耳にした人は誰もないようだ。家中はまるで何かに蓋をされたように物音ひとつしない。ドアの向こうの階段を下りるとそこには玄関らしき扉が見える。大きさの違う女性用や男性用の幾つもの靴がつま先を合わせてきちんと並んでいる。僕は自分の足に合ったキャラクター・デザイン入りの小さな靴を履いて玄関の扉を開ける。

扉を開けた瞬間にもあつとした熱気が玄関に入ってきて、その向こうには新鮮な太陽に照らし出された明るい視界が広がっている。僕は玄関を出て、道路を歩き始める。人々はみんな僕よりも背が高

く、そして表情ひとつ変えないまま歩き去つてゆく。

しばらく歩いてゆくと公園が日に入る。公園はそれほど大きいものではないけど、ブランコや滑り台が置いてあって、公園を取り巻くようにして立っている木々が光を浴びてくつきりとした影を地面に投げかけている。その中心では僕と同じぐらいの背格好をした7、8人の男の子たちがサッカーをしている。まだ小学生の低学年あたりだろう。僕は公園の端つこの日陰の中にあるベンチに腰を下ろして男の子たちを眺める。暑い太陽は時間を止めようかとするように力強く辺りに照りつけ、生ぬるい風がときどき砂を巻き上げて男の子たちを襲う。でも男の子たちはそんなことに全く気がつかないみたいにボールを必死に追いかけまわっている。どうやらジャングルジムとその反対にある木の間をゴールに見立ててゲームをしているみたいだ。

一人だけ体の大きい男の子がいてその子が中心的にボールを扱っている。他の小さな男の子が反応できないぐらいに見事なフェイントをして、他の子がぶつかつてくると手で押し返していくといと前に進んでゆく。その体の大きな子がショートをするとその子の半分ぐらいしか体の大きさのない痩せ細つた男の子のふとももに勢いよくボールがぶつかる。ボールの当たった男の子はしゃがみ込んで泣き出してしまう。

「バークー。それぐらいちゃんと取れよな」と体の大きい子が言う。それから泣いている男の子のほうに近づいていて足の脛あたりを軽くキックする。泣いている男の子はキックされた後に肩を大きく震わせてさりに激しく泣き出す。

体の大きな男の子はキヨロキヨロと辺りを見回して僕のところで視線を止める。Tシャツの裾で顔の汗を拭きながらその男の子は僕

のところへやつてくる。よく見ると男の子の肘や膝のところには転んだときについたらしい砂がついている。一番濃く砂がついている左ひざの脇の辺りには血が滲んでいるみたいだ。

「おい、おまえもやらねえか?」と男の子が言つ。

僕は首を振る。

「どこから来たんだ?」と男の子が言い、僕はまた首を振る。

「おまえ、喋れないのか?」

僕は黙つている。男の子はしばらく僕と見つめ合つたままだつたけど、足元の石を拾つて僕に投げつけるような振りをしてから仲間のところへ戻つてゆく。

しばらく男の子たちがサッカーをしているのを見ているとだんだんと日が暮れてくる。空全体がゆつくりと燃え上がってゆくような暑い季節の夕暮れだ。だんだんとボールが闇の中で見えにくくなり、さつきまで濃い影を落としていた木々たちは氣味の悪いダンスを風の中へ踊り始める。

さつきの体の大きな男の子が僕のほうにやつてきて「そろそろ帰つたほうがいいぞ」と言つてから公園の外に消えてゆく。それに気がついた仲間たちも一斉に公園の外に向かつて駆け出し、最後に残された脛を蹴られて泣いていた子がボールを拾つていなくなると公園の中は一層闇が深くなつたような気がする。

がらんとした公園の中にキイキイという音が響くのを耳にする。すでに暗くなつて見えにくいけど誰かが「ラン!」をしているのがぼ

んやりと見える。小さな影はジャンプするようにブランコから飛び降りると僕のところへ近づいてくる。ブランコは揺れたままでその影が揺れるのに合わせて金属が擦りあつような音が規則的に繰りかえされやがて小さくなつてゆく。

「まだ帰らないの？」と女の子が言つ。絵本に出てくるお姫様のようにフリルの着いたピンク色のワンピースを着ている。僕は首を振る。女の子は道路に設置された街頭の人口的な白い光の中に夢の一 部のように立つて僕を見ている。

「お家の人気が心配するんじゃないの？」

僕は首を振る。

女の子は僕のところへ近寄つてきて暗がりでも顔が見えるくらいの位置にまでくる。僕は何かを考えようとするけど、僕の考えはまだ言葉とこつもの形作ることはできない。僕の考えはふらふらと頭の中を迷つてからその回転の中で消えてしまう。

「良かつたら私の家に来る？」と女の子は言つ。

僕はしばらく迷つてから頷く。

「じゃあ、行こうよ。私の家すぐそこなのよ

僕はベンチから立ち上がりつて女の子について行く。女の子の家は本当に公園から田と鼻の先という感じで公園を抜けてすぐの家の門を潜ると女の子はためらうことなくベルを押す。玄関には明かりがひとつ灯つていて、よく手入れされた庭の花々が門から玄関へと伸びている。

「ハーハー」と女人の人の声が扉の向こうで聞こえる。

女の子が「ママー」と言つと扉が開く。

女の子は僅かに空いた扉の向こうにすると入つてしまい、扉が自動的に閉まるとき僕は玄関の外に取り残されたような感じになる。どうしようかと思つているとまた僅かに扉が開き、そこから女の子が顔を出す。

「いらっしゃいよ」と女の子が言つ。

その隙間から扉を潜ると、僕の知らない他人の生活の匂いが玄関の匂いと一緒に鼻に届く。女の子の母親らしき女性が一段高いところから僕を見下ろしている。玄関には僕の家と同じように幾つかの靴がきちんと並べられていて、どこかの草原で髪の長い女が笛を吹いている油絵が飾つてある。そして僕の背丈よりも一倍ぐらい大きな鏡が壁に取り付けられている。

「いらっしゃい。こんなに遅くなつて家の人は心配しないの？」と母親が言つ。僕は首を振る。

「私の新しいお友達。ねえ、ママ、今日泊めてあげてもいいでしょ？」と女の子は言つ。

「それはかまわないけど、家の人が心配するんじゃないから?」  
「から来たの?」

僕は首を振る。女の子の母親は長い髪を肩ぐらいでふんわりとカールさせてとても優しそうな笑顔を浮かべている。今まで会った人

の中で一番優しそうな人だと思つ。

「困ったわね。お家の電話番号とか住所はわからないの？」

僕は首を振る。

「ねえ、ママ、いいでしょー。」の子と遊びたいの」と女の子が言う。

「とにかく家に入りなさい。そんなに汚れて、もう」と母親が言つ。僕と女の子と母親は3人でお風呂に入り汚れを落とす。それからキッチンに行つてカレーライスを女の子と一緒に食べる。キッチンはリビングと一体になつていてそこにはL字型のソファーアーが置かれ、テレビのスイッチが入つたままになつていて。

「本日市内の一軒家で30代とみられる女性の死体が発見された」と眼鏡をかけたニュースキャスターがテレビの中からリビングに話しかけている。

「家の冷蔵庫からは女性の子供と思われる8歳ぐらいの少年の死体が発見され、警察は原因の究明を急いでいます」とキャスターは語つてゐる。

それから僕と女の子は女の子の部屋に行く。女の子の部屋はとても綺麗に整頓されていて、小さな机が壁際にあり、棚の中にはぎつしづとぬいぐるみが詰め込まれてゐる。女の子はすでにパジャマを着せられてゐるけど、僕は同じようにティーシャツと短パンのままだ。

女の子はぬいぐるみをひとつずつ取り出すとぬいぐるみについて

の説明を始める。この子とあの子は仲が良くないから一緒にしてはいけないとか、この子とこの子は離れたがらないとか、そんなふうに。

「この子はね」と女の子は言つてクマのぬいぐるみを取り出す。「ヒロちゃんって名前なの。ヒロちゃん、挨拶しなさい」女の子はクマのぬいぐるみの首のところを持って僕にお辞儀をさせる。そのぬいぐるみは、ずいぶんと女の子が大切に扱っているらしく、クマのおのマフーが少し黒ずんでいる。腹のところが少し黒ずんでいる。

僕は「こんばんは」と言つ。

女の子がクマの代わっこ「こんばんは」と言つ。

「この子はね、遠い星の王子様なんだけど、なかなかお姫様に会うことできなーい。家のパパとママみたいにね。それでヒーボシってこうんだけど、相手のオリ姫がなかなか来てくれないの」

「大変なんだね」と僕はいながらクマを撫でてあげる。

母親がやつてきて僕と女の子の布団を用意してくれた。母親は、ばらばらに散らばったぬいぐるみを元にあつた場所に戻して「早く寝なさいね」と言つ。僕と女の子が布団に入ったのを確認してから部屋を出ると同時に電気を消してやく。

女の子は部屋の中が暗くなつて母親の去つてゆく足音が聞こえなくなると布団からみ出すよつてして手を伸ばし、僕の手を握る。「私たちきつとこお友達になれるわよ。私のこと忘れないでね」と女の子は言つ。女の子は手を強く握るわけではないけどそこには

しっかりとしたやわらかいぬくもりがある。その手の中から僕はしっかりと彼女と繋がっていることを感じることができた。僕はこのままこの家で女の子と一緒に暮らしていただらどんなにいいだろうと思つ。

僕はそこできつちやく女の子の名前を聞いていないことに思い当たる。僕は女の子の名前を聞かなくてはいけない。そしてその名前を覚えていなくてはいけない。でも女の子はすでに寝息を立てていて、その繰りかえされる音を壊してはいけないと思つ。そこでは静かに波がうねりを描き、僕を包み込むように耳元で木霊する。女の子の手はすでにだらんとしていてそこにほどどのような力もこもつていな。やわらかな温もりは永遠に途絶えてしまつたよつて思えてきて僕はもう一度女の子の手を握り締めてみる。

「たばたと僕の周りを歩き回る気配で目が覚める。女の子の母親がしきりに僕に何かを言つていて

「いいかげんにしてちょうだい！ 一体何様のつもりなの」と母親が僕に言う。「この子はどうやうつもりなのかしら

母親はとても怒った顔をしている。僕は明るくなつた女の子の部屋にひとりで眠つてゐる。昨日の優しいおばさんほどこにいつてしまつたのだろうと思つ。いつの間に朝になつたのかわからない。ほんの数十分前に眠つたばかりなのだと母親に言わなくてはいけない。きっと時計が狂つてしまつたんだと。

「ちょっと、あなたこっちに来なさい」と僕は母親に手を引かれてリビングにまで連れて来られる。僕はまだすごく眠い。それに女の

子はどこに行ってしまったのだろう？公園に遊びにいったのかかもしれない。僕も行かなくては、あの女の子と手を繋がなくてはと思う。それでも僕はあまりに眠いのでリビングのソファーの上に寝転がってしまう。母親がケータイを持つて何か操作しているのが見える。

僕はどこかに隠れなくてはと思う。そして玄関にあつた鏡のことを思い出す。あの大きく向こう側を映し出すその奥には全く別の世界が広がっている。僕にはそれがはつきりとわかる。その向こうには僕の知らない何かが潜んでいる。その世界の空氣や匂い、そして風を感じることができる。それは何かワクワクさせるものでもあり、淡い予感のようなものもある。でも僕にはどうやってそこに行けばいいのかわからない。

僕は女の子のところにいかなくてはいけない、そう思いながら僕はまた夢に引き戻されるかのように目を閉じてしまう。

雲のように浮かんでは青白い月明かりと共に消えてゆく僕の思考とこう風の吹く場所。そこには何もかもがあるけど、そこにはもう何も残されていない。人々が暮らした息遣いは擦れ切れ、懐かしい春の匂いが辺りには満ちている。僕の耳は鳥たちが会話をするのを聞く。そこには波のうねりがあり、渦のしぶきがある。

僕の影がそこでは躍っている。真っ暗な場所に一箇所だけスポットライトを当てたその場所で、僕の影は優雅に踊っている。そして悲しく笑いながら。ダンスフロアには大量の血が流された後がうつすらと闇の中に浮かびあがっている。

それでも影の踊りはとても見事だ。まるで大地と空を洗い清めて

いるように腕の振り方や腰のリズムの取り方を見ているとそこには影なりの哲学のようなものさえ感じられる。僕はただ田を奪われ頭の中を空っぽにして影の踊りを見ている。もつ踊りを見ているということさえ僕は覚えていない。その踊りはあまりにも完結的で、いつの間にか世界が萎んで踊りの中に入つていった。そして僕は影と共に踊り、と共に呼吸していた。

影は踊り続ける。一体音楽はどこにいったのだろうと僕は思つ。音楽がなければ踊りは踊れないはずだ。それでも影はその無音の暗闇のなかで僕には聞こえない特殊な音を聞いていたみたいにいつまでも踊り続けている。僕の頭はどんどんと混乱してゆく。一瞬何かが閃きかけるけど、それはつかみどころのない夢のように意識を集中すればだんだんとその僅かなささやきは遠ざかつてゆく。

何かが何かにぶつかる。ドカンと何か大きなもの同士がぶつかる音がする。何かとてつもなく大きなものだったことがその音からわかる。大きな爆発音の後には金属が擦れあう音や硬いものが弾けるような音、それに細かいものが崩れ落ちてゆく音が重なり合いしばらく続く。それらの音が鳴り止んだ後には耳が痛くなるような静寂が僕を包む。

ふと気がつくと僕の影がまた躍つているのに気がつき始める。あ、そうか、そういうえば影の踊りを見ていたんだな、と僕は我に帰る。

「LIFE ALWAYS HAS TWO SIDES」

僕はこの言葉を思い出す。どこかで誰かがそつと囁いていた。

「LIFE ALWAYS HAS TWO SIDES」

僕はもう一度その言葉を繰り返す。そしてその文章が意味するものが正しいのか間違っているのか考えてみる。おそらくその通りなのだろうと僕は思う。誰かが僕にそう言つたんだから。そして闇の中でもそれが光続けていたということなのだから。

2

「ピッ」

パソコンの電源を入れたときの音がする。それがまるで何かの鐘の音のように僕の意識を呼び覚ます。

NOW LONGING · ·

僕の中で何かが眠り続けている。とても静かに、とても完璧に。何物もそれを揺り動かすことはできないといつぐらににしつかりとそれは眠っている。

何かの音がだんだん遠くから近づいてくるのが聞こえる。その音は遠くのほうで聞こえるか聞こえないかぐらいの小さな音だ。僕の元にその音が忍び寄ってくる。まるで遠くで換気扇が回っているような音だ。誰かが次元のはざまの向こう側で子守唄を歌っているように聞こえる。音に付随して何かが意味を持たせようとしている。意味そのものが頭をゆっくりと持ち上げるみたいにさりげなく僕の神経を舐め上げる。眠っている僕の何かに擦りついて僕を覚醒へと連れていこうとする。氷のような冷たい手を伸ばして身体を撫でているようだ。辺りはとても静かなにその音が僕の中にあら何かを捕まえようとしている。あるいは持ち上げて突き上げようとしている。それは大事なものなんだ、と自分に言い聞かせる。それを奪い取られるわけにはいかない。

音？と僕は思つ。僕はもう目覚めているのだろうか？

そうして僕は目を開ける。

最初に見たのは自分の手首だ。手首に何かが巻きついている。それは一本の糸で編みこまれたブレスレットのやつなんだ。それを自分の左手首につけている。

そういえば何かをしていたような気がする。破れた布か何かを縫い合わせていたような気がする。針と糸を使って何かを直していた。でもそれは夢だったかもしない。ここにいる僕とは全く関係がないような気がする。

頭がまだはつきりと覚めていない。夏の強烈な日差しの当たる車の中で居眠りをしているみたいに何もかもがぼんやりとして世界の境界線が危うくなっている。

そう、車の中にいるんだ、と思う。僕は自分が車の中にいることに気づく。車の運転席に座つて自分の手首を眺めている。

それでもまだ意識ははつきりしない。なんだか自分がとんでもなく遠くからここへ帰つてきたような気がする。どのくらい遠かつたのか考えるだけで気が遠くなりそつなくらい遠くだ。身体を動かそうとするたまると身体が動くのを嫌がつてているみたいに重く感じる。意識はまだぐるぐるとものすごい勢いでどこかを回つてている。大きくて丸いものが頭の中で回つている。

もう一度自分の手首についているブレスレットを見つめる。そしてそこに含まれている意味について考えてみる。なぜ自分がそんなものをつけているのか記憶を探つてみる。でも記憶を探ろうとするところには全く手合ひたえというものがない。まるで空っぽの箱の中で何度も手を握り締めているような感じがする。握り締めれば握り締めるほど記憶というものが遠ざかってゆくような気がする。全く同じことも繋がらない。世界は真っ白なまま僕の頭で広がっている。どこを見回しても地平線しか見当たらぬ。

いや、これは夢のはずだ、と僕は思つ。何かがおかしい。何かが

間違つてこると僕は思つ。そんなはずはない。なにかをしていて、そしてここへ戻ってきたんだ。僕はそこを糸口にドアをノックし次の扉が開くのを待つた。でもノックしても返事は返つてこない。

なにをしていて、どこにいたのかがわからない。その向こうの扉は開かないまま錆び付いて固まつてしまつている。

落ち着いて考えよう。

僕はしばらく落ち着くよつに歩がける。まだ意識はぐらぐらと波のように揺れてこる。まだどちらの世界に落つてしかるのか決めかねているみたいに。

現実的にならなくてはいけない。

そうだ、地平線だ。地平線しか見えない。

僕はなんとか車の外の視界に気がつき、そこに地平線があることを確認する。見える範囲では草木一本もない砂漠が延々と続いている。

まだ僕の意識は僕の脳みその10メートルぐらう上空で回転しているような気がする。どうしてこんなに意識が朦朧としているのだろう。僕は一体どこからやつてきてここには一体どなんだろう?それにもそも今まで何をやつていたんだろう?

考えることといえば自分への問いかけだけで肝心の答えが返つてこない。まるで記憶そのものがどこかに抜け落ちたような感じさえする。

そうか、そうかもしない。僕には記憶といつものが全くないの  
だ。

そう僕は考える。それは正しいよと思える。

でもそこにはものすごい矛盾が隠されていることに気がつく。僕  
が記憶をもっていないとしたら、僕は一体何者なんだろう?なんだ  
か自分が魂を吹き込まれる前の人形になつたような気分になる。

一体ここで何をやつているのだろう?それに何だか音楽が聞こえ  
る。僕はそう思う。耳を済ませてそれが音楽であることを確認する。  
その曲名を頭の中から記憶を頼りにして伝つてゆく。そこに風のよ  
うに流れる一本のラインを読み取りながら自分の記憶と適合するも  
のを探し出してゆく。

意識がまだうまく定まらないためかそれが何の曲なのか全然わか  
らない。「コードの向こうに隠れたコードが繋がつていて、その向こ  
うにまた別のコードが隠されている。何重にも何重にもいろんなブ  
ロックがかかっている。まるで合わせ鏡の中心にいるみたいにコー  
ドは延々と繋がつてゆく。鏡に映されたメタファーがその反対にあ  
る鏡に映つた別のメタファーを巻き込んでいく。そしてその二つは  
激しい渦を巻いて僕を取り囮んでいる。

僕はその渦の中心を捕まえようとする。僕は必死で記憶をさかのぼ  
らせゆく。まるでさつ一度眠りの中に戻つてしまひながら、深い、  
その中心へと墮ちてゆく。

僕はその渦を少しずつ読み取つてゆく。海のど真ん中に出来た大き  
な渦にこれから浮き輪をもつて泳いでゆくみたいにその渦の中に巻  
き込まれてゆく。

そして音楽の中に雨の音が混じっていることに気がつく。音楽の向い側に雨の音を聞き取る。それは空から降つてきたものが車のボンネットに当たり、車の車体を伝い、そして大地へと降り注ぎ、海へと帰つてゆく。そういうサイクルの音がする。

そしてその音楽がチック・コリアの「リターン・トゥー・フォーエバー」であることに気がつく。

それでもここまで来ることにかなりの労力を消費していた。まだ身体だつて動かない。なんだかひどく酔つ払つているようにも思える。なんだか何か大きなものを身体から吐き出したばかりでひどく疲れているような気がする。まるで身体から卵か何かを吐き出した後のようだ。

僕はもう一度意識を取り戻し田の前に広がる景色を眺めてみる。たしかにそこには地平線がある。でも地平線のように見えて地平線じゃないものがある。僕は田を凝らして、その世界の半分の違いを認識する。そしてそれを理解する。

海だ。

砂漠が広がる地平線だけだと思っていたものは左側が半分海なのだ。車の反対側は切り立つた断崖になつていて、それを朝焼けの始まつたばかりの地平線と水平線しか見えない車の中で見ている。

どうして一体こんなものが田の前にあるのだ？と思つ。いいは一体どこなんだ、と再び思つ。

全くわけがわからない。

僕はどうして今、こんな、ところ、といふことを、いふの、だらう。

と思<sup>フ</sup>がデジタルみたいに切れ切れになつていつた。

これは一体どこなんだ？

田の前に広がる雄大な景色を眺めながらそう思う。僕はなぜこんなところにいるのだろう?と。

ふと運転席の横を見てみるとそこには女がいる。

女か、と僕は思う。

「どうしてこんなところに女が寝てこるんだろ?」「どうして僕の横に女がいる必要があるのだろう?僕はそう考えてみる。でも記憶の触手は空箱に手を突っ込んだみたいに、どことも繋がっていない。

マツタク、ワケガ、ワカラナイ、

と僕は思う。

チック・コリアの「リターン・トゥー・フォーエバー」は曲の中盤ぐらいに差し掛かり、ドラムやベース、ボーカル、電子ピアノの生み出す様々な音の渦の中心にまるで一本の糸のように流れのメロ

ディーを耳にする。

車の外の景色はまだ太陽が昇る前らしく空には星が輝いているのが見える。空と海とは同じような濃い紺色でその一つを隔てるものはない。断崖から見下ろす波は激しく僕をどこかへ押し流そうとする。やがて空と海の間に僅かなざわめきのようなものを感じ始める。波の音が静かにその一つを引き剥がそうとしている。霞が生まれ、そこから少しづつくつとした水平線が現れ、空は空へと帰つてゆく。

水平線は霞んだ白から透明なオレンジに変わつてきて夜の間に溜まつた闇を残さず飲み込んでしまう。水面はシルクのように光を吸い込み、星たちは役目を終えたかのように現れてくるそのオレンジに身を預けて光の中に消えてゆく。

カモメたちが断崖で一日の始まりの光で体を清めようとするように並んでそれを見ついている。辺り一面がオレンジに染め上げられてもまだ太陽は現れない。まるで闇を吸い込んで消滅してしまつたんじやないかと思うほど太陽はなかなか姿を現さない。

しかしその間は時間が止まつてしまつたかのように美しく儂いひと時だ。一瞬だけ僕たちを夢の中から解放し、目覚めさせてくれる。しかし太陽が現れると目の網膜に光の影を残し、それを合図に一日が始まる。

「目が覚めたべが？」

と僕の隣に座っている女が話しかけてくる。僕はの方を見る。

女はかなり目が悪いのか大きな牛乳瓶の底みたいな眼鏡をかけていて、小太りで気持ち悪いにきびが顔中に張り付いている。色白で、長くぼさぼさした髪が顔を少し隠すように垂れ下がっている。着ている服も外見同様にあまりパツとしない。どう好意的にみても美人とは言いがたいタイプだ。

「ねえ、あんた、目が覚めたべか？」と僕に話しかけてくる。なんだか声もざらざらしていて聞いているだけで落ち着かなくなる。

「ねえ、あんたたら、目が覚めたべかって聞いてるじゃないの?  
？」

とにかくうるさい、と僕は思つ。なんで僕に話しかけてくるんだ。僕はまだかなり眠いんだ。それに自分の身に何が起こっているのか全然わからない。

「ねえ、聞いているべか?」女がまたそう言つ。

僕はなんとか首を振る。でも首を振つたところで僕が喋りたくないことを表現しているわけではないし、女にとつて僕は言葉を聞き取つているということになる。

「なんだあ？あんたあ？具合でも悪いのげえ？」

女はまた話かけてくる。

「なんとか、言つたらどうだあ？私、わかんねえつス」

「ちょっと待たれよ。拙者、今、おぬしと話したい気分ではないのじや」と僕は言つ。そう言いながら、自分で自分の言つた言葉の響きが僕の思考と全然噛み合つてこないことに気が付く。

「あんたあ、どうしたつスか？そんな変な喋りがたしでえ。頭でもおかしくなつちまつたべか？やつぱりどこか具合が悪いんじやないのお？」

「待たれよ」と申しておるではないか。拙者、今、それどころではないので「じやれる」

「あんたあ、やつぱり頭おかしくなつたんでねえか？」

女はそう言つて車の中に響き渡るぐらいうのすごい声でが「ガハハハツハハハハハツハハハハア」と笑つ。なんて醜い笑い方をするんだろうと僕は思つ。

「何がそんなにおもしろいこのでじやれるか？」と僕は言つ。

女はそれを聞くとせりて大声で笑つ。

「あんたあ、って、けつ」のゴーモアのセンスあるんじやないの？  
私、知らなかつただあ

「拙者は[冗談で]こんなことを言つておるのぢゃないやうだ、一体何がどうなつておるのぢや？」

「もう冗談はこれべりこでいいべや。こい加減にまともに笑つてべか？」女はそう言つて僕のほうに手を伸ばそうとしてくる。僕に障つもつひしこ。

「しばし、しばし、待たれよ」と必死になつて僕は言つ。『おぬしはこんなとこりで一体何をしておるのぢや？』それになぜ拙者とおぬしが一緒にこんな車の中にこもるのぢや？全くわけがわからぬ

僕がそう言つと女は少し眉をひそめる。

「あんただ、自分が何言つてるかわかつてゐるべか？ホントに頭おかしくなつたんでねえの？」

「それにだいだいおぬしは一体誰であるか？拙者は今まで何をしておつたのぢや？」

「あんただ、いい加減にしないと私も怒るつスよ。もうこの前みたいに喧嘩なんかしたくないつス。私たちちつとこままで来たんだか

「う

「しばし、しばし、待たれよ」と僕は必死になつて言つ。それにしても僕はどうしてこんな古臭い言葉遣いなんだひつと自分で思つ。「失礼かと存するが、しかと聞かれよ。拙者は本当にわながわからぬ。一体ここはどこのぢや？どうして拙者は「こんな」とをしておるのぢや？何ひとつ覚えておらるのぢや？」

女は眉をそり下げる。それでしばらく考え込む。僕の耳には「リターン・トゥー・フォーエバー」が曲の後半にさしかかっているのが聞こえてくる。ここは一体どこで、僕は一体何をしているのだろう？それにこの女は誰だ？僕のことを知っているみたいだけど僕には全く記憶がない。まだここは夢の中なのだろうか？僕は今までどこで眠っていたんだろう？

僕は記憶を探ろうとする。でもそこには全く何もない。僕の頭の回転はどこにも辿り着かないし、どこにもぶつからない。どこか空中でクルクルと回っているだけだ。

「あんた、もしかしたら記憶喪失とか言つんじゃないでしょ？そんなことは起つて欲しくないっス。冗談ではすまされねえがら」と女が言う。

「拙者には、わけがわからぬと申してあるだけじゃ。それより、ともかく、おぬしは一体誰なのじや？」

「ねえ、それが、記憶喪失つて言つんじやないの？私はコトカだす。私のことも覚えてないべか？」

「コトカ？おぬしはコトカと申すのか？全く記憶ござりんな。漢字ではどう書くのじや？」

「日本の楽器の琴に、うたの歌で、琴歌でしょ？ホントに覚えてないべか？3月3日。耳の日産まれのお姫様つて私のこと呼んでたでしょ？私あなたが記憶喪失になんてなつたらこの世界でもう生きてゆけないっスよ。私のこと覚えてるべな？」

「覚えておらぬと申しておるであらうー」と僕は少し怒ってしまう。「おぬしみたいなブサイクな女がそのような顔をしても一文にもならぬ、冗談は顔だけにしろ！おぬしは鳥山アキラ大先生のドクター・スランプ・アラレちゃんか？一体どうなつておるのじゅと聞いておるであらうー」と続けて僕は言つてしまつ。

僕は自分で言つてしまつて後悔する。もう少し落ち着いて話すべきなのだ。

コトカは海の方角を向いてしばらく黙つている。しばらくするとカーステレオの音楽が止まり、車内には静かな雨の音が木霊し始める。

「申し訳ござらん」と、とにかく僕は謝つた。「めんな、と言いたかつたけどそんなことは今のところどうでもいい。とにかく話を進めなくてはいけない。僕はここで一体何をしているのだろう？僕は一体誰なんだ？とにかくそれを突き止めなくてはいけない。

「音楽終わつたべ？何か音楽かけてぐんねえが？」とコトカは海のほうを見たままそう言つ。

「でもどうやって音楽をかけねばいいのじゅ？」僕がそう言つとコトカは10秒ぐらいじっと黙つてから運転席と助手席の間に埋もれているケータイを僕に手渡す。

ケータイだ！と僕は思つ。そう思つた瞬間にすくなくホッとした気分になる。このなかには僕の記憶の手がかりとなるものがぎっしりと詰まつていてるに違いない。これを手がかりに僕は自分の記憶を取りもどすことができるだろ？

ケータイの待ち受け画面には一枚の絵が映っている。でもその絵は僕の記憶と一致しない。どこかの草原で髪の長い女が笛を吹いている油絵のような画像がケータイの待ち受け画面になっている。これは本当に僕のケータイなのだろうか?とにかく僕はケータイをいろいろと操作してみる。でも操作すればするほど僕はますます混乱してゆく。ケータイはまるで新品かもしくは初期化されたみたいに何も情報が入っていないからだ。

「ここには何も記憶がないみたいじゃが、これは本当に拙者のケータイであるか?」と僕は言つ。

「嘘! そつたらことあるわけないでねえの、ちょっとこっちに貸してみ」とコトカは僕の手からケータイをひつたくる。それからしばらく操作してみる。

「あなたが、やつたんでしょう? あなたが初期化したんじゃないの? 私あなたのケータイなんて絶対に触らないもん。あなたしかいないでしょ。また最初からなんて冗談じゃないわよ。どれだけ苦労したか覚えてないでしょ? これが何回続けば気が済むの? あなたはだいたいねえ、どうしていつもそうなのよ。どうしていつもこうなつちやうわけ? いい加減こうやう下らなことは辞めたらどうなの?」

コトカの言葉が急に少しまともになった。何が起つていいのかまだ全然わからないけど少しほ喋りやすくなつたような気がする。

「なんだよ、これはオレ様の責任なのかよ! なんでそうなるんだ。別にオレ様の責任でもいいよ、そんなことは。とにかく何がどうなつているんだつて聞いてんだよ」と僕は言つ。僕の言葉も少しまともになる。

「あなたね、これは忘れたとかでは済まされない問題よ。これはものすごく深刻なトラブルなのよ。そのことわかつてゐるの？本当にわかつてゐるの？ねえ、カエル、怒つてゐる場合じやないのよ？」

「おまえなんだよ、その口の利き方は、お前自分が何言つてのかわかつてんのか？それにカエルってなんだよ？おまえ、この豚ヤロウ、お前のパンツ脱の匂いつきでブルセラに売つちまつわ！」

「カエルつて、あなたの名前でしょ？やつぱりあなた、記憶がないんでしょ？」

「何だよ、オレ様がそんな名前なわけないだろ、気持ち悪い。それにおまえのそのひでえ田舎なまりの言葉なんとかならぬのか？お前、自分のオマンコに凍つたキュウリでも突つ込んで身体の脂肪搔き出していく。それビデオで取つてまたブルセラに売つてやる」

「あなた、本当にわからないのね？そつじやないと私までわけがわからなくなつちやつもん」そこでコトカはため息を付く。

「だからせう言つてるじやないか、何がどうなつてんだ。趣味の悪いネックレスなんかして、それにガキみたいなキャラクターのイヤリングなんか付けやがつて、いい加減自分の歳考えたらどうだ？」

「まずい、と僕は思う。自分でもわけがわからないままどんどん喋つてしまつてゐる。もうかなり状況を立て直すことは難しいぐらいにまでまずいパターンだ。今は一人きりで車の中にいるのだ。そしてこの女の子しか僕の記憶の手がかりはない。まだ自分の置かれた状況が全然わからないのにこの状況は非常にまずい、と僕は思う。

「いや、決して、オレ様の言つたことつて……なんていうか……」

「…………違つんだよね」と僕はとにかく状況を立て直そうと試みる。「とにかくオレ様の言いたいことは、そうじゃないんだ。へい、ヨウ、とにかく音楽でも聞いづぜ。これはちょっと……なんていふかを……言いにくけど……とにかく違つんだよね」

「言いながら僕はカーステレオのスイッチを入れようとする。でも車の中にはどこにもカーステレオは見当たらない。むつきまでの音楽はどうぞ操作していたのだろう。

「へ、いうかわ、どうやって音楽聞くんだい？ ファンキー・モンキー・ベイベー？ おまえのことどう呼んでいいかい？ ファンキー・モンキー・ベイベー？」

「あなたのそいつ下らない、冗談は変わらないのね」そしてヒトカタは自分のケータイをポケットから取り出すと操作し始める。

「私の持つてゐる曲つて、3曲しかないけど……」

「いいよ、いいよ、ファンキー・モンキー・ベイベー。なんでもいいから音楽をかけてくれ」

「とつあえず、その呼び方はやめてよね」

「トカがそいつと車の中のスピーカーから音楽が流れ始める。ドラムとギターの音がまずバチンと沈黙を破り、それからベースの音が続く。それから誰かの歌声、誰だ？と僕は思う。それに英語の歌だ。最初は男の声なのか女の声なのかもはつきりとしない。でもその音楽は渦となつて僕を取り囮む。僕の何かを揺さぶり、そしてどこかへ連れていこうとしている。そこには限りない安らぎと、そして僕の失つた世界がある。僕はその失われた世界の音を聞く。

誰だ？この歌は？と僕は再び思つ。僕とコトカは静かに音楽に耳を済ませる。

そのままひたすらに次の曲になつてしまつ。でも歌つているのは同じ歌手で、どうやらジャズであるらしい。僕は今までにジャズなんか聞いたことはない。でもわからない。そんな気がするだけで記憶が埋もれていくだけなのかもしれない。

僕がそう考えていると、いつの間にか嵐のような強烈な曲の持ち上がりがやつてくる。僕は言葉を失い、ただその音に耳を澄ます。僕はもづこかに飛ばされていったような気がする。僕は自分の身が引きちぎれるような嵐の真ん中にいることをそこで知る。僕は上空に巻き上げられてもう戻つてくることはできない。僕は失われた世界の悲しみの声を聞く。

これは二ーナ・シモンの「マイ・マン・ゴーン・ナウ」だ、と僕は曲名に気がつく。そしてこれの前にかかっていた曲は同じく二ーナ・シモンの「ターン・ミー・オン」だ。

それから次にまるでクラップ/ヨーリジックのような全く聞き覚えのない曲がかかる。メロディラインはどこかで聞いたことのあるような気がするけどはっきりとはわからない。でもそこには歌詞が含まれている。

音楽が鳴り止んだら

一瞬にして世界が沈黙に包まれた鐘の音を聞いたら

すぐに足を動かすんだ

その鐘の音は

光と闇が一匹の巨大な怪物となつて

おまえの何かを食いつぶす

メデューサの餌食になるまえに踊りだせ

ダンス ダンス

踊りだしたら

おまえの足はもう止まらない

天国と地獄の境界線を

踊り狂うことになるだろう

天国に足を踏み出せば

お前は地獄に行き

地獄に足を踏み出せば

おまえは天国に行く

DNAの螺旋を上り続けるんだ

ダンス ダンス

音楽が鳴り止むとまた静寂が車のところにやってきてさつきから変わらない雨の音がまた静かに鳴り始める。その途端にコトカは煙草をポケットから取り出して、ライターで火を点け、煙草を吸い始める。

「おい、てめえ、こんな狭いところで煙草なんか吸つてんじゃねえ、それに全然似合わないからやめろ」と僕は言つ。

「何よ！ あなただつて煙草吸つでしょ？」

「オレ、オレ様が？ バカ言つてんじゃねーよ、オレ様が煙草なんか吸うわけないだろ。臭いし、身体にも悪い、美容にも良くない。って言つてもおまえはもう美容がどうのこうのってレベルは遙か昔に終わつてしまつたみたいだからな」

しまつた！ と僕はまた思つ。どうしていつ血分で自分の首を絞めるようなことを言つのだろう。

「それだけ私がかわいいってこと？」とコトカは音楽を聴いて気分

が良くなつたのか少し冗談めいたことを言つ。

「そりかもな」と僕は答える。「この、豚ヤロウ」

「ねえ、カエル、たぶん最悪のパターンだと思うけど、あなたはまた記憶をなくしてしまつたみたいね?」とコトカは煙草を車内の灰皿にトントンと叩きながら言つ。

「なん、あ、なん、ななな、なんだよそれ?オレ様は何度も記憶をなくしているのか?それに本当にオレ様の名前はカエルって言つのか?」

「自分のケータイ見てみれば?パスポートが入つているから」とコトカは言つ。

パスポート?と僕は思つ。何で僕がパスポートなんか持つているんだ?ここは外国か?僕は外国に来ていて、どこかで記憶をなくしてしまつたのだろうか?それになんで僕がパスポートなんか持つているんだ?しかもケータイの中には?ケータイにそんな機能があつただろうか?

とにかく僕はケータイを操作してパスポートと表示された文字をクリックしてみる。

名前 石川 カエル

住所 0号室

といひ画面が出てくる。

「なんじゃ、こりゃ？これがオレ様のパスポート？」と僕は言つ。  
「全く、わけが、わからない。マック、ドウナシテ、イルンダ？」  
「もう、また最初からあなたにこの世界のことを説明する気にはな  
れないわね。簡単なことだけは教えてあげるけど、あとは面倒くさ  
いから自分で調べてね。私たちがこりやうことになつた以上、もつ  
私も勝手にさせてもらひから」

「ちょ、ちょ、チヨ、ちょっと待つてくれよ。一体ここはどうなつ  
ているんだ？これはどうゆうことなんだ？全く話の筋が見えてこな  
いんだけど。あ、このオレ様を置き去りにしようとしたってそれは問  
屋があるさねええ、からならああああ、この売春婦」

「もうあなたのそつゆう冗談は聞き飽きたわ。そのうちこまたエロ  
ビデオのネタが出てくるんでしょ？そつゆう下品なのはもう聞き飽  
きた」とコトカは言つ。

「コトカがそつ語った瞬間に僕はエロビデオのことを思い出す。

いかにもアダルトビデオらしい古臭い画像で、ラブホテルの一室  
らしい部屋にベッドだけが置かれた部屋で男と女が交わっている。  
古めかしいラブホテルで壁、天井全面に鏡が取り付けられている。  
女の顔は画面から外れていて下半身だけが画面に映っている。そし  
て男のほうはもうこれが我慢の限界だ、という顔をキープしながら

長い間マシンガンのように腰を揺すっている。ギシギシとリズムに合わせてベッドが揺れる独特の音が僕の耳に入ってくる。男はこんなにがんばったんだから、もう死んでもいいよみたいな感じで立ち上がると女の顔のほうに向かってゆく。

「なんだよ、オレはエロビデオの話なんかしてねえだろ？下品なのはおまえのほうじやないか、この豚、ブクブクで、コロコロの豚や口ウガ

「違う、どうしてこうなってしまったんだ。話が全然前に進まないじやないか。

「違ひ、ワリイ、そういう意味で言つてるんじゃないんだ

「じゃあ、どうゆう意味なの？」ヒクト力は言ひ。

「とにかくここにいる僕は僕じゃない。僕とは全く別の人間だという」とさ

「とにかくここにいる僕は僕じゃない。僕とは全く別の人間だという」とさ

僕が言った言葉を正確にコト力は真似をした。しかも僕と同時にまるで前もって僕が何を言つたかを知っていたかのよう。

「つまり

「なんてこうか

「なんていうか」

「違うんだ」

「違うんだ」

「って言うんでしょ？毎回同じ、全くこれと同じ」とを毎回あなたは私に言うのよ。そしてあなたは何もかも初めからやり直さなくてはいけないわけ。もういい加減にしてほしいわね」とコトカが言う。僕はなんだか狐につままれたような気分になる。

「ちよつと待つてくれって言つてんじゃねえかー」この、ぶぶぶぶぶ

豚ヤロウ。と僕は思つ。なんとか今回は持ちこたえた。それは言つてはいけない。また話がややこしくなる。

とにかく落ち着こう、と僕は思う。それにしても僕はどうしてこうすぐには頭に血が上ってしまうのだろう。もう少し我慢といつものできないのだろうか？まるで何も考えないで喋っているみたいじゃないか。

「違つ、とにかく、悪いと思うよ。いきなり初対面、違う、オレ様にとつては初対面なわけじやん? バカ言ってんじやねーよ。このぶつぶつうつ、違う、こうじやない。もう少し落ち着いて話ができるのか?」このぶたたたたたあ

「私は落ち着いてるわよ、そつちが取り乱しているんでしょ？」

「なんだとー」の、ぶぶ豚ヤロウが、同じことの繰り返しじゃねえか？もつもざりなんだよ、おまえみたいな豚」

「もう、わかつたからとにかく部屋に戻らない？」

「部屋？部屋ってなんだ、おめー、泊まるところがあるのならなんで早く言わないんだ、このヤロウ。皮むいて丸焼きにしちまつぞ」

「もう、わかつたから、さつさと部屋に戻りましょ？いいでしょ？」  
とヒトカは確かに落ち着いてそう言つ。

僕は頷く。とにかく話が少しは前に進んだ。とにかく泊まる場所があるのだ。僕の家なのか、どこかホテルの部屋なのかはわからぬ。でもとにかく一人になつていろいろと考えてみたい。そうすれば僕が何者なのかもう少しさは思い出せるはずだ。

「オーケー。ファンキー・モンキー・ベイベー。とにかく部屋に行こひじやないか？少し話しをするのにも疲れた。もういい、もう今のところオレ様が誰だつていい、君が誰だつてかまわない。とにかくファンキー・モンキー・ベイベーとはそこでお別れ、といつ」とになる」

「何言つてんの？私たち一緒に部屋に住んでるのよ」

「この豚豚豚豚、ぶた、ブタ、豚豚がああああああああ、てめえ、そんなどあるわけねえだろおおおおおー！」

「だつてそうなんだもん」とヒトカは言つ。

もうダメだ、と僕は思つ。これはものすごいことになつてきた。

僕が記憶を失っている間に何かとんでもないことに巻き込まれたのだろうか？ダメだ、とにかく今は考えるときではない、と僕は思う。とにかくこのコトカのことを一回信じるしか道は残されていないみたいだ。誰も周りにいないし、僕はこんな町から遠く離れたところにいる。まだ全然わけがわからぬけど、とにかくこのコトカという女の子の言うとおり部屋に戻ろう。それ以外に今のところ僕の選べる選択肢というのはなさそうだ。とつあえず今は早く一人になって落ち着きたいのだ。

「オーケー、確かコトカちゃん、つて名前だったよね？ファンキー・モンキー・ベイバー？」

「その呼び方はやめてつて言つていいでしょ？」

「オーケー、何回も悪いとは思つ。コトカちゃん、とにかくオレ様は部屋に行きたい。早速だけ出発だ。ゴー、ゴー、行こうじゃないか、楽しいドライブの始まりだ。さあ、行こう、どんどん行こう。もう帰つてこれなくなるまで行こう！」

「つてカエルが車を運転してきたんでしょ？あなたが運転すればいいんじゃない？」

「この豚ヤロウがあーしつこいんだよーいい加減！そんなこと知らねーって言つてんじゃねえか！」

どうしていつもこうなるんだ。僕は車なんて運転したことないけどとにかく前に進まなくてはいけないのだ。何がなんだか全然わからない。とにかく進もう、と僕は思う。「オーケー、とにかく、このオレ様が車を運転しよう。やつたことはないけど、とにかくオ

レ様は部屋に行きたい。この状況をなんとかしなくてはいけない。

オーケー?セミリー夕?」

「セニヨーラでもなんでもいいけど私にはコトカッていう名前がちゃんあるの。わかつたらそろそろ行かない?」

なんなんだ、その口の利き方は?と僕は思う。どうして僕ばかりがこうゆう目にあうのだろう?僕がせっかく気分を変えようと冗談を言っているのにビックリしてそこに気がつかないのだろう?まあいい、そんなことはどうでもいい。とにかく車を動かすのだ。

「オーケー、じゃあどうやって車を動かすのかオレ様に教えろ」

「何？その口の聞き方？それが人にものを頼む言い方かしら？私がおとなしくしていると思つて調子に乗らないでよね」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおの豚、豚豚豚、豚、豚や  
口ウがあーそれはオレ様のセリフだああああああああああ。たと  
え死にかけた虫でもおまえのオマン」半径5キロ以内は近づかない  
ぞ！」

「もうわかつたから行くのか、行かないのかどっちかにしてくれない?」

僕は興奮して呼吸が荒くなつてゐる。毎回のことだけビ、本当にどうしていけるんだ?

LIFE ALWAYS HAS TWO SIDES

「えつ？今なんて言いやがつた？この“ふふふ”・・・・・・・・・・か

わいい子豚ちゃん?「

「LIFE ALWAYS HAS TWO SIDESって言ったのよ、カエルの口癖でしょ?」

「知らない。覚えていない。悪いけど

「まあいいわ。運転の仕方は教えてあげる。それに見ての通り誰もいないんだからそんなに危なくないでしょ。まさか隣の断崖に突っ込むなんてことはないでしょし、道は一本しかないんだから」

僕は頷いてとにかく先に進むことに決める。その先がどこに繋がっているのか、このときの僕は全く予期していない。でも結局僕は進むしかなかつたのだ。たとえそれがどのような場所に僕を連れて行くのか前もってわかつていたとしても。

「そしたらね」とコトカは話始める。「その運転席のところに手形のスペースがあるでしょ?そこに手を置いて」

僕は言われたとおりに自分の手を運転席の窓んだ手形のスペース

に重ねる。

「やして進めーって思つてみて」

僕は言われたとおりに車が進むことを考える。

わづゅんと急に車が前に進む。

「キヨシ」

僕がびっくりしたので車に急ブレーキがかかる。僕は車の激しい振動を身体に感じる。

「なんだよ、この車? びつなってんだ?」

「これはあなたの思考に合わせて進むようになつてこるの。カエルが進めて思うと車は進むし、止まれと想つと止まるの。びつ? なかなかわ」これでしょ?」

「とこづつも・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

なんだか僕はものす"ことこのに来てしまつたんだな、と思つ。思考で動く車? これは一体この時代なんだ? エンジンもなし、排気音もしない。びつやつてこの車は動いているのだ? と僕は思う。

「何度も申し訳ないけど、このは一体どこのなんだ? びつやつオレ様は本当にカエルらしいな。全くわけがわからん。君はコトカちゃん、だつたよね。念のため?」

「そう、私はコトカであなたはカエル、私たちはパートナーなの？」

「もう話すのには疲れた。とりあえず君が（お前みたいな）ブサイクが、と僕は心の中で思う（オレ様のパートナーだろうとビコかの宇宙人あらうと）でもいい。部屋までは遠いのか？」

「ああ？ そればどうかしら？」 そう言つてコトカは笑う。

「なあ、オレ様は疲れたって言つてるじゃないか？話し合いは最低限度にしたいんだ。部屋まではどのくらいだ？何分ぐらいだ？もしくは何十分か？」

「だから、それは私にはわからないって言つてるじゃない。人の話  
聞いてるの？」

「おおおお、お、オレ様はもう疲れたって言つてるじゃないか？もうホントに怒る気力も残つてないんだ。とにかく進みながら話そう、つて言つてもオレ様は疲れているからあまり話したくないんだけど・・・・・・」

「勝手にすれば」とコトカは言つ。

なんなんだ？ふざけやがつて、とにかく車を進めよつと僕は思つ。一度手形から手を離して両手を擦つてみる。少し落ち着かなくてはいけない。僕が何者なのかはひとまず横に置いておくことにする。僕は車のフロントガラスに神経を集中し、それから手形に手を載せる。そして少しづつ車を動かしてゆく。周りには何も障害物はない。隣の絶壁にさえ落ちなければこのままずつと進んでゆけばいいのだ。町の近くまでいけばあとはなんとかなるだろつ、と僕は思つ。

でも僕の思考とは反対に車は海の方に向かってゆく。 オイ、 オイ、 オイ、 と僕は思つ。

「ねえ、 何やつてんの？ セツナジやないわよ」とヒトカガ言へ。

「わかつてゐ、 わかつてゐつて」 僕はセツナジハナビ、 車はセツナヒマツナビ、 海の方に向かってゆく。

「ねえ！ カエル！ 何やつての？ つて言つてゐじやない？ セツナヒマツナビ、 私はまだ死にたくないんだけど」

「わかつてゐ、 わかつてゐ」と僕は繰り返す。

「あなたそればっかりで全然向きが変わつてないじやない？ ほり、 もつ落ちちゃうじやないの！」

「わかつてゐ、 わかつてゐ」

「「」のカエル！ あなた『わかつてゐ』しか言えないとじやないの？ 全然わかつてないじやない！ 車の向きを変えるの、 「」のままじや崖に落ちちゃうでしょ？」

「「」のクソ豚がああああ、 わかつてゐつて言つてんじやねえか！」

車は止まる。

「ねえ、 あなた本当は海に落ちるのが怖いんじやない？ そういう意識があるとそつちに流れを行つちゃうわよ。 スケートとかスキーとかでもダメ、 ダメ、 つて思つてゐとそつちに行つちゃうことつてあるじやない？ それと同じよ」

僕は大きくため息をつく。どうしてこうなるんだ、どうして僕はこんな目にあつていいんだ？大体この女は一体何様のつもりなんだ？そしたら自分で運転すればいいじゃないか、と僕は思う。

「オーケー、ただの冗談だよ」と僕は言つ。「オレ様のチキンレー  
スにどこまで耐えられるか試してみただけだ」

「嘘がミミエじゃない、さつきものす」に顔してたわよ。犬みた  
いにオシッコもらしそうなね」

「」のおおおおお、つてオレ様は本当に疲れているんだ。本当に本当に疲れているんだ。とにかく行こう、セリヨリータ、いや、コト力ちゃん。オレ様が過去に何か悪いことをしたんだつたら謝るよ。誤つて済む問題なら謝るよ。とにかくオレ様は疲れた、ということが言いたいんだ。オレ様は早く部屋に行つて休みたい

「それはカエルが記憶をなくしたからこんなことになつてるんじゃないの? 大体それはあなたの責任じゃない? 何? 私に責任をなすりつけようとして? そもそも問題は、カエルが記憶をなくしたつてことぢやない? どうしていつもいつも私のせいにするのよ? それにね・・・・・・・・」

あ――――――、始まった、と僕は思つ。もうダメだ。もう耐えられない、と僕は思つ。そして運転席の手形に意識を集中させる。

するとものすごい勢いで車がスピンし、海と並行してカミカゼのように車は動き始める。僕とコトカは飛行機が飛ぶときのようなものすごい重力を感じる。

「イエー、進んだじゃねえかー、こいつはスゲエゼー」と僕は言う。

「もう、いきなり発進させないでよね。びっくりしたじゃない」そ  
うコト力は言つ。

とにかく車は進み始めたのだ。どこかわからないけど物事は前に進んだ。方向性さえ決まつてしまえばあとはそのまま進んでいればいいのだ。それにこのものすごいスピードで進む車ならあつという間に部屋に着いてしまうだろう。そこまで行けばあとはなんとかなるだろうと僕は思う。僕の記憶の手がかりになるものがそこにはあるだろうし、とにかく一人になつて考えてみたい。もう少し落ち着きを取り戻さなくてはいけない。

海からはもうずいぶん水平線から離れた太陽が輝いている。どこかの海のかわからぬけど、海は穏やかに大きな波を重ねるようになだらかに打ち付けている。透明に澄んだブルーの海はこんなときでも僕の心にはとても美しく映る。それは何かを愛撫し、そして慰めてくれているようだ。反対側を見ても果てしない砂漠しかない。草木一本も見当たらないし、生物がいるような気配すらない。フロントガラスには激しい雨がぶち当たっている。

雲ひとつないのに？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？

なんじやこりや？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？

僕はフロントガラスをよく見る、とそこには雨ではないものがぶち当たっていることがわかる。

「オイ、コトカ。これって雨じゃないよな？」

「ああ、これね。これは砂よ。星の砂って言つの」

車はだんだんとスピードが落ちてゆく。そしてやつくりと止まる。

「なんで？砂が降つてくるんだ？」とさりげなく真っ直ぐに言つて、ストレートに言つて、これ以上ないぐらじものすじく真っ直ぐに言つて、オレ様にはわけがわからねえ。頭がイカレちまつたとしか言ひようがない。ここでは空から砂が降るのか？雲ひとつないのに？雲があるのなら百歩譲つてそういうこともあるだろ？と言つてやつてもいい。この状況ではしょうがない。オレ様も腹を決めよ。でも何で雲ひとつないのに砂が降つてくるんだよ？」

「私に何でも聞かないで。私はコンピューターじゃないのよ。自分で調べたらいいじゃない。ケータイ持つてるでしょ？」

「持つてるけど？」と僕は言つ。

「ケータイに聞けば？」

「ケータイに聞いてどうするんだよ？アホかおまえは？ブウブウで取り返しのつかないぐらじのアホか？」

「だからケータイに聞けばいいって言つてるじゃないの？」

「だからケータイに聞いてどうするんだって言つてるじゃないか？」

「もう、わかんない人ね、バカ！ケータイに話しかければいいのよ

「バカとはなんだ！バカとは？こうやって話しかければケータイが答えるのか？もしもし、ケータイさんですか？私はブウブウのブウと乗りたくない車に乗ってるカエルでござります、そう言えばいいのか？このぶぶ・・・・・・」

「イエース、ご主人様、お呼びでしようか？」

「オイ、今誰か喋つたぞ。おまええええええええ、屁！」毛やがつたな？」

「バカ！ ケータイが喋ったのよ」

「おまえなあ、冗談はその顔だけにしてくれって言つただろ、何言つてんだよ？ ケータイが喋るわけねえええ・・・・・・・・・・・・・え！ ケータイが喋つたのか？」

「だからそう言つてるじゃない」

「オレ様はな、疲れてるんだ。何回も言つてるじゃないか。もう〔冗談はこの辺にしておこうぜ。どうやらオレ様は本当に疲れて頭がイカれてしまつたらしい。ケータイが喋るわけはない！オイ、ケータイ！」

「イエース、ご主人様、お呼びでしょうか？」ケータイから電子音

の声が聞こえる。

「違ひ、これは、違ひ。これは何かの間違いだろ？ そ、うだろ？ フアンキー・モンキー・ベイビー？ セーラーリータ？ ビンタつてんだ？」

「だから最初からまたあなたにこの世界のことを説明するのはうんざりだつて言つたじやない？ とにかく、これは世界の世界。それに私はコトカつていう名前があるの」

「もう、世界つて、どういう世界だよ？ 砂が空から振つてきたり、ケータイが喋つたりする世界つてことか？ コトカ、ことか？ オイ、コンドウ、向かつて来い！」

「何よ？ そのコンドウ、向かつて来いつて？」

「バカがあああ、コンドーム買つて来い、だああああああああ、オレ様の頭はイカレちまつたああああああああああああああ。この豚、豚、ブタああああ、おまえのせいじやないのか」

「だからカルルが記憶をなくしたから、どうもつになつてゐ、つて言つてゐるじやないの！」

「オーケー、セーラー、じやなかつた、コトカちゃん。はつきり言おう。この際だから、ここだけはほつきをせむる。ここか？ これだけは言つておぐれ」

「も、も、わかつたから、何？」

「オレ様はどこかで記憶をなくしてしまつたかもしれない。それはオレ様にとつてはものす」おおおおく、大変なことだ。コトカちゃん

んには上手く伝わらないかもしれないけどオレ様はすぐパニックになつてゐる。それは認めよう。認めないと話が先に進まない。とにかくそれも、ものすごおおおおおく、このオレ様にとつては大変なことだ。しかし、それを横に置いてみても、本当は横に置きたくないぐらい深刻なトラブルなわけなんだが、横に置いておくとしてもだ！」

僕は一二度言葉を止める。そして深呼吸する。

「オレ様にはたとえ記憶が戻つてもこの世界のことはわけがわからんねえような気がする」

「そうかもね」

「人が真剣に話をしてるのに』『そうかもね』はないだろーこのブタがあああ、オレ様はな、オレ様はな、何度も、もう何度も言つてるけど、疲れているんだ。疲れるときぐらいあるさ『人間だもの』バイ・相田みつお。とにかく部屋に行くぞ。それしか道はない」僕はそう言つけど、だんだんと心配になつてくる。部屋に行つたとしても全然自分が誰かわからなかつたらどうしよう、と僕は思つ。

「だから、さつさと行こうって言つてるじゃない？」

僕はコトカの顔を見る。相変わらずブサイクだ。こんなにブサイクなんだったらもう先祖を振りかえつても何万年もブサイクの血族なのかもしれない。もうこんなブサイクとは話したくないと改めて思う。

「オーケー、コトカ。とにかく行くぞ。車動かすからな」

僕はそう言って手形に意識を集中させる。今度はゆっくりと車を発進させることができる。少しづつだけ、僕はこの世界に慣れようとしている。とにかく星の砂とやらが降りうが、ケータイが喋るうが、思考で進む車だろうが、進むしかないのだ、と僕は自分に言い聞かせる。

僕は運転に意識を集中させる。どのくらいまでこの車はスピードが出るのかはわからないけど、とにかく僕の思考が働く限り全速力で車を動かす。でもどこまで行つても風景は全く変わらない。海と砂漠が延々と続くだけだ。車の中は静まりかえつていて、車の車体に細かい砂が当たる断続的な音が木霊する。僕はどうなっているんだ？とコトカに聞きたくなる。どこまで行けば部屋に着くのだろう？そう聞いてみたくなる。でもそんなことを言い始めたらまた話がややこしくなってしまうかもしれない。とにかく部屋に着かないことには話が進まないのだ。それがどれだけの距離であろうと部屋があることは確かなのだ。とにかく走り続けよ、と僕は思つ。

コトカも一言も喋らず僕とコトカは無言のまま車が移動している風景を見ている。かなり長い時間、10分か、20分ぐらいのまま進んでみても一向に景色は変わらない。海と砂漠だ。僕はまたコトカに質問をしてみようかな、と思い始める。いや、ダメだ、との度に思い直す。とにかく、進むのだ。

でもどんなに進んでも、進んでも、何もかわらない。一体どうなつているんだ？とまた疑問が湧き上がつてくる。コトカは半分寝ているかのように表情がぼんやりとしてくる。オイ、オイ、僕に運転させておいてそれはひどいんじゃないか？と思い始める。それでも僕はじつと黙つて運転に意識を集中させる。

「オイ、てめえ、オレ様に運転させておいて寝てんじゃねーよ」と  
僕は言つ。

それでもコトカは眠つたままだ。

「オイ、このアラレちゃんヤロウ、寝てんじゃねえって言つてるじ  
やねえか。オレ様はな、運転してるんだぞ、オレ様が眠ると大変な  
ことになるんだぞ」

起きない。

「オイ、ブタ、寝てるときも強烈にブサイクの豚、起きろ！」

まだ起きない。

「ブタああああああ、起あわひて歸つてんじやねえか.-.」

「何よ？何なの？もう着いた？」

「まだ着かねえよ、一体どうなつてんだ？それに眠いんだ、疲れるんだ。何か音楽でも聞こいつぜ。このままじゃ焼き豚になるぞ！」  
か、骨さえも残らなくなつてしまつ

「ケータイ、ケータイ」と面倒くさそうにコトカは言つてまた皿を閉じて眠つてしまつ。

僕は車の運転をしながら考えをまとめるよつとある。『いじめじだ？僕は誰だ？それに何時代だ？

ひとまずそつわからなることは考えてもしかたがない。この世界では何でもケータイで動くのだろうか？ケータイはドリドリもんのポケットのよつなものなのだろうか？

「ハイ、タケコブター！」と僕はひととじとを言つて。そつ言つたつもりが、

「ハアああああああああい、タアアケココブウカウタアアーー」と僕の発した声は伸びてゆく。コトカは相変わらず眠つている。

一体どうなつているんだる？

「マッタク、ドウナッテ、イルンダアアアアアアアアアアアア」とまた声が伸びてゆく。今のところは、それは考えなことじよつ、と僕は思う。

僕はフロントガラスに注意を払いながらケータイを操作してみる。

何か手がかりがあるかもしない。それにコトカはケータイで音楽を聴くのだと言つた。ということはこの中にはまだ隠れた機能があるはずなのだ。僕はケータイを操作し始める。そしてもう一度バスポートを開いてみる。

名前 石川 カエル

住所 0号室

血族 純日本人

ときときと同じ画面が出てくる。

おそらく僕の名前はカエルというのだろう。試しに写真というとこれをクリックすると僕の顔写真が画面に映る。これは僕だ、と僕は思う。自分の顔はちゃんと覚えている。でも他のことは全く記憶にない。血族が日本なのは問題ないとしても住所が0号室とはどうゆうことなんだろう?どこかのアパートかマンションの住所なのだろうか?それにしても・・・・と僕は思つ。

この隣で寝ているコトカという女の子のことは全く覚えていない。そういうえば僕は左手首にブレスレットをしている。これは何の意味があるのだろう?コトカはブレスレットについて何か知つているのだろうか?でも趣味の悪いブレスレットだな、と僕は思う。僕はブレスレットを外して車のダッシュボードの中に入れる。

「オイ、ケータイ」と僕はケータイに話しかける。とにかくケータイでもなんでもいいから話をしないことにはわからない。

「イエース、お呼びで『ざいますか?』主人様?」とケータイが答える。

「あんたつてさ、いつもそんなにハイテンションなのか?疲れない?」

「イエース、ご主人様。そのようにプログラムされておりますので。なんなら設定を変えることもできますが……」

「面倒くさいからそのままでいい。とにかくオレ様は音楽が聞きたい。なんとかしてくれ」

「イエース、ご主人様、もうバリバリのターボ全開フルスロットル、月までおまえとランデブーで『ざいますね?』

「やつぱり設定を変える。もう少しテンションを落としたのにしてくれ。オレ様は疲れているんだ。とてもじゃないけどそんなテンションにはついていけない」

「かしこまりました」と急にケータイの声のトーンが変わる。落ち着いた聞き取りやすい話し方になる。

「音楽ですね。かしこまりました。カエル様のお持ちの音源は……  
・・・・・・今のところ教科書2冊ぶんしか『ざいますね。それでよろしければ音楽をお聞かせできますが?』

「教科書?なんだよ教科書つて?」

「ビートルズの赤版と青版でござります。これは教科書に指定されていますので、どのケータイでも初期設定から聞くことができます」

「とりあえず、それでいいや、オレ様はビートルズ聴きながら育つてきたようなもんだからな」

「かしこまりました」

ケータイがそう言うと車の中にビートルズの音楽が流れ始める。僕は少し意識がまともになつたような気がする。僕が大きく深呼吸すると運転するにもリラックスして身体の余分な力が抜けたような気がする。僕はしばらくビートルズに耳を澄まして、海と砂漠の間を進んでゆく。

「トカはまるで私は生きることに一欠けらの苦悩も持っていない、  
というようなバカみたいな顔をして運転席の隣で眠り続けている。  
どうやつたらこんなにバカみたいな顔ができるのだろうと不思議に  
思つてしまつほどだ。」

それにしても、この道は本当にどこかに繋がっているのだろうか？と思い始める。いくら進んでも、おそらくは僕が運転に慣れてくればくるほど車のスピードは上がっているはずなのに、風景はちっとも変わらない。もうビートルズのアルバムを一枚とも聴いてしまって、一回田の青版のアルバムにさしかかっているのに何も見えてこない。

「ナッシング・ゴナ・チョンジ・マイ・ワールド」と僕は音楽に合わせて口ずさむ。でも本当に歌詞の通り何も世界は変わらない。これはいい加減飽きてきた。

「オイ、ケータイ」と僕はケータイを呼び出す。

「ハイ、カエル様、どういたしましたか？」

「「」の道はどこまで続いているんだ？ いつになつたら町に着くんだ？」

「申し訳ございませんが、私どものほうではもうついつは、ちょっと・・・わかりかねます」

「まあ、そうかもしれないな」と僕は答える。カーナビでもあれば良かったのかも知れない。

「そういえばさ、カーナビってこの車に付いてないの？」

「カエル様がお望みでしたらもうつづき機能は用意できますが・・・」

「え？ なんだ？ あるじゃん、早く言つてよ。さっそくカーナビを使

おつ。オレ様の部屋まではあとどのくらいだ?」

「それはカエル様が何かを見つけないと到着しない、とカーナビ機能は申しておりますが・・・」とケータイが答える。

「何? 何だつて? オレ様が何かを見つけないと到着しない? ジャあこのままずっとと」つやつて走ってるのか? ビーにも着かないのに?」

「申し上げにくのですが、そのよつて「やつこまわ」と遠慮がちにケータイが言つ。

「ふざけんじやねえぞー」このままビートルズ、つて、ビートルズは素晴らしいが、このままビートルズ聴きながらビートルズも着かないってことは死んでしまつうこと?」

「やつゆつ考え方もいざこますね」とケータイは言つ。

「何言つてんだ、ケータイの分際で!」と僕は思つ。このままどこのにも着かない? つてことは・・・いや、あまりそういうことは考えたくない。こんな何もない真つ平な世界で死にたくはない。まさに何もないじゃないか? チョーン店の看板もない、山や川さえない、こんなところで死ぬわけにはいかない、と僕は思う。

「オイ、どこかにH M Vでもないのか? ビートルズばかり聴いていつもしかたがない

「いじ来店ありがとうございます。いかがはH M Vでいざこます」と若い女の声でケータイが喋る。もういい加減驚くのにも疲れてきた。

「とりあえずやつを車の中で聴いていたチョック・コリアの『リターン・トゥー・フォーエバー』が聞きたい」と僕は言つ。

「ありがとうございます。またのこ来店お待ちしております」とケータイが言つ。そして車内には音楽が流れ始める。僕はこの曲を聞くとなぜだかいつもリチャード・バックの「かもめのジョナサン」を思い出してしまつ。

その途端に僕の目に何かが映る。なんだ? あれは建物じゃないか? 車はものすごい勢いで建物に向かって進んでいる。今まで目印がなかつたからスピード感が麻痺していたみたいだ。あつという間に車はその建物の横に止まる。

海の絶壁の脇に建てられたその建物は大きさからして、そして雰囲気からしてラブホテルみたいに見える。でも看板もなければ入り口の案内板もない。でも見渡す限り、それしか建物らしきものは見当たらない。これはコト力に聞かないとわからない。

「オイ、コト力。今度はちゃんと一回で起きてくれ。オレ様は疲れているんだ。頼むから起きてくれ。どこかに着いたぞ」そう言つて僕はコト力の身体を揺する。

「どうしたの? あ、もう着いたみたいね。ここの、ここに住んでるの」

僕は車のドアを開けて外に出てみると、途端にドアの隙間からものすごい熱風が流れ込んでくる。

「ダメーーー! ドアを開けちゃダメよ。車のまま中に入るの。そうしないと死んじゃうわよ」

「オーケー」と僕は素直に従う。とにかくもう少しだのだと、もう少し我慢すれば落ち着いて考えることができる。部屋に帰つてじつくりと考えよう。

僕は車をゆっくりと動かしラブホテルの入り口らしきところへ入つてゆく。すでにシャッターが閉まっているガレージもある。誰か先客がいるのだろう、と僕は思つて少し安心する。少なくともこの世界に僕とコトカだけということはないみたいだ。開いているガレージに車を入れると自動的にシャッターが閉まる。

「オーケー、長かった、とんでもなく長かった。が、しかし、オレ様はついに辿り着いたみたいだな。いろいろと迷惑かけたかもしれないが、とにかく助かった」

「わかつたから部屋に行かない？ 私も疲れてんのよね？」

僕は頷く。もう何も言いたくない。後は部屋に転がり込んでしばらく眠りうつと思つ。頭がまともになつてくるのを待つてから次のことを考えればいい。

コトカは車から降りると裏の扉を開けて階段を登つてゆく。僕も自分のケータイを持つて車から降りる。「オイ、ちょっと待てよ」と開かれた扉に向かつて言う。

「カエル様、カエル様」とケータイが話しかけてくる。

「なんだ？ オレ様は今忙しいんだ。これから部屋に帰つてぐつりと眠るんだ」

「「」の車はどういたしましょ？よろしければ私どものほうで処分をさせていただきますが？リサイクル料もバカにはなりませんしね？」

「やうだな、適当にやつといてくれ」と僕は言いながら扉を潜り、階段を登る。あまりそんなことをじつくりと考えている場合じやない。階段を登つたところにコトカが立つていて僕が階段を登つてゆくとコトカは左に折れる廊下を進んでゆく。僕もコトカについてゆく。ホテルの廊下は水族館の内部のように天井と右側の壁が大きな水槽になっている。そしてコトカは廊下に一つだけあるドアの前で立ち止まる。

「「」によ、私たちの部屋」とコトカは言つ。

「オッケー、待つてましたぜ、アネゴ」と僕は言つ。

「コトカ」とコトカは言つ。

僕はそのドアを開く。

「ブタ小屋だ！このヤロウ。豚小屋みてえに散らかってるじやねえか。オレ様は綺麗好きなんだよ！もう疲れてるつて言つてるじやないか？なんで次から次へと問題が発生するんだよ？どうして何もかもがまともじやないんだ？とにかくオレ様はこんなところでは休みない。豚！お前ブタなんだから綺麗好きだろ？おまえ掃除しろ！」

「いいわよ別に、私が掃除しても。いつもカエルが掃除してたからね。たまには私がやつてあげる」

「お？なんだよそれ？オレ様もなかなか気の利いたことやつてるじやねえか」

「ねえ？ねえ？ねえ？ねえ？カエル？ブレスレットどうしたの？さつきまで付けてたでしょ？」と急にコトカは真剣な顔をして尋ねた。

「あ？あれか、趣味悪いから外しちゃった。そういうえば車の、あ！いけね、車処分するとか言ってたな。ブレスレットがどうかしたのか？」

「コトカは急にものす」く怒った顔をする。

「どうした？ブレスレットに何かあるのか？そんなものまた買えばいいじゃないか？」

「コトカはものす」く怒った顔のままドアを開けて部屋の中に入つてゆく。

「バカ！カエルなんか、死んじやえ！」そう捨てゼリフを残すとコトカはドアを閉めてしまつ。僕がドアを開けようとしても鍵がかかつている。

「おい？なんだよ？わけがわからねえつて言つてるじゃねえか」

鍵はかかつたままだ。

「オーライ、コトカ、わけがわからねえつて言つてるじゃねえか。オレ様をどうするつもりだ？オレ様は疲れてんだぞ」

返事はない。僕はドアをノックしてみる。

「クラブにでも行つてくれば？部屋、掃除しておくから」とコトカ

の声がドアの向こうから聞こえる。あまり元気がない声だ。どうしたのだろう？

「なんだよ？ クラブって何のことだ？」

「そのまま真っ直ぐ行けばいいのよ。あんたって人は一回死ないとわかんないじゃないの？」

僕は廊下を見てみる。そこには真っ直ぐな廊下が延々と続いている。外から見た感じではこんなにこの建物は大きくなかったはずだと思つほどにその廊下は延々とどこまでも続いているように見える。

ぼんやりとした水族館の内部のようなトンネルを進んでゆくとしばらくしてガラスの部分が終わり、真っ暗な闇になる。その闇の壁の中にぼんやりと扉のようなものが見える。

僕はどう考へたところでその扉を開けるしかなさそうだなと思つ。コトカが言つたのはこの方角だし、ほかに道はありそうにない。それにはずうーと一本道だったのだ。選びようがないじゃないか。

僕がクラブの重々しい扉を開いた途端に僕の耳にはものすごい音量のダンスマジックが飛び込んでくる。そしてギラギラと何色も色が混じつたような光が僕の目を刺す。僕はその中で繰り広げられていることを見たとたん心臓が止まつてしまふかと思つたぐらい驚いてしまう。

そこでは耳を割つてしまいそうなぐらいの音量でフェイスレスの「ゴッド・イズ・ア・ロ」が流れさまざまな色の光の下で人々は踊り狂い、セックスをしている。誰しもが裸で誰一人顔がない。

そして誰しもが裸のロボットのみたいに毛もなく皴ひとつない。はたしてこれが人間と呼べるようなものなかもよくわからない。まるでアニメーションの世界に飛び込んでしまったような錯覚に陥る。

そのアニメーションのようなロボットたちは実に人間らしく振舞つていて。彼らの踊りを見ていると彼らが頭の中で何を考えているのがすぐにわかつてしまいそうなほどだ。がつしりとして男のように見える人は一緒に踊っている女の子とやりたくてたまらないみたいだし、セクシーですらつとした身体をしたロボットのほうは男と合わせて踊りながらも頭の中では全く別のことを考えているように見える。がつちりと抱き合いながら踊つて人達はゲイなのかもしない。みんな気が狂つたように腰を動かし、そしてセックスをしている。

音楽の大音量にかき消されて彼らの発する音は全く聞こえないけど見ているだけで彼らの行為のなかにあらゆる音が含まれているのがわかる。あととあらゆる音がそのとてつもなく大きな宇宙の中でもいまにも破裂しそうに膨らんでいるのがわかる。それぐらいにあらゆる音がそこには含まれている。

そしてそこにはさまざま匂いが立ち込めている。まるで匂いと記憶が連動しているみたいに僕はこれがかなりおぞましい光景であることに気がつく。

そんな光景を僕は扉の近くに立つたまま呆然と眺めている。一体ここはどこなのだろうと改めて自分に聞いていて。でもそこに答えはない。僕の記憶はすべてかき消されてしまったかのように真っ白なのだ。

僕はひとまずそのカオスのような光景を潜り抜けてクラブの奥に

入っていい。とにかく僕は喉が渴いてるのでバーでビールを飲もうと思う。でも水のほうがいいだろ？ビールを飲むには喉が渴きすぎているような気がする。まずは水を一口飲んでからビールを飲もうと僕は思う。でもコカコーラという選択肢もある。疲れた時に飲むあのスカツとする感覚がたまらない。それでもやつぱり水だろ？まだ記憶がはつきりしないためか意識がグラグラと揺れているような気がする。

水といつのはすぐ大事なものなのだ。僕はそのことを確認するためにそれを口に出して言おうとする。

「耳みみみ水、って言つつものはあ、す、すす、すじおおおおおく、奥がふかあいんだあ」

僕がひとりじとを言おうとするたびに音が何かが引っ張られて伸びてゆく。それに僕の思考と連動していない。それにこの粘ついた音は一体なんだろう？

そう考へていると少しだけ白いライトが灯ったカウンターバーが目に留まる。僕はそこまで歩いてバー・テンドラーと思われる顔のない男に向かってビールをくれと言つ。

でも以外にも僕は発した声は英語だった。僕は正確に、

「キヤナイ・ハアバ・ビーアー・ブリーズ」と言つていたのだ。自分で言つておきながら僕は自分自身にひどく驚いてしまう。僕は英語が話せるのだろうか？どこで、いつ、僕は英語なんか話せるようになつたのだろう？

それでもバー・テンドラーのように見える男は僕の言つたことを理解

してくれたみたいで小さくしっかりと頷くと僕のためにビールをジョッキに注いでくれる。でもその瞬間僕は自分が全く金を持っていないことに気がつく。

しまった！と僕は思う。コトカに金のことを聞いておくべきだったことを後悔する。僕は必ずどこかに金を持っていたはずだ。こんな巨大なクラブの特別室のようなところに泊まっていて金をもつてないはずはない。

バーテンダーは僕が取り乱しているのにも気がつかずにさつわと僕の目の前のカウンターにビールを置く。

僕はなんとかボディランゲージのようなことをやつてお金がないんだということを表現しようとする。ポケットを引っ張つて中が何も入っていないことを相手の目の辺りの皮膚に見せる。そうするとバーテンダーはすべてを初めからわかつっていたかのようにまた同じように小さく頷くと奥の方に消えてしまう。

「アー・ユー・オーケー？」

と後ろから男の声で話しかけられる。僕が振り返るとそこにはちゃんと顔があり服を着ている老人がビールジョッキを片手にして立っている。すでに白くなり始めた髪は長く腰の辺りまで伸び、体中にキラキラとしたシルバーのアクセサリーを付けている。老人はよれよれのTシャツを着て、ダークグレーのラフな短パンを履いている。そのTシャツはかなりの年代物であるらしく胸にはプリントで

WAR IS BAD

FOR PEOPLE

## GOOD FOR

## BUSINESS

HIROSHIMA 1945 2007

と書かれている。でもその文字もかなり汚れていてもう少しで読めなくなるぐらい擦り切れている。

「アー・ユー・オーケー？」と老人が言う。年の割には声も太くタフなイメージだ。

「イエス・アイム・オーケー」と反射的に僕は答える。とにかく話することが大事なのだ。僕は何か言わなくてはと思う。

「問題ないぜ、マイト。あるつきりない。ノープロブレムつてやつさ。そこでさ、オレつてさ、金、いきなり金、マネー、いわゆる力ネの話で、ワリインんだけど、いや、ホント、チヨーもうしわけないなつて思うんだけどさ、オレ、このオレ様つていうのは金、カネ持つてないわけよ、わかる、そういうのつて? アンダースタンド?」と僕は英語で言う。

でも自分で言つておいてものすゞこことを年上に向かつて言つていることに気がつく。ふつうこうゆうときには敬語を使うべきなのだ。やらになぜかわからぬけど僕が何かを言おうとすると、ラップみたいになつてしまつ。でも英語には敬語というものが存在しないはずだ、と僕は思う。それならそれでいいのかな?

「でも、あんたケータイ持つてるだろ?」と老人は言つてガハガハ

と笑う。典型的な田舎の年寄りといった感じでいい人ではあるみたいだ。「ケータイ持つていいだけで金は自動的に引き落とされるじゃないか?」

そうなのか、そんな便利なシステムなんだ、と僕は思つ。とりあえず、こいつってビールが僕の目の前に運ばれてきたところは、金のことは一旦考えなくてもいいわけだ。

「いやー、マイト。全くまいつたぜ、一体何がどうなつていいのか全然わからないんだ。あなたに会えたオレ様つてラッキーだよな、もう、かなり、チヨーやばい感じだつたんだ。もう、本当にかなり参つたね。何がどうなつていいんだ?マイト?」

相変わらず僕は英語を使つていい、どこで僕は英語なんて話せるよつになつたのだろう、と再び思つ。

「いやあ、ワシもここの詳しきことはわからんのじゃ。それにしてもこの音楽はうるさいのね」と老人は言つ。確かにそう言われるとものすゞ、音量でクラブ中に音楽が木靈しているのがわかる。

「?」

なんだ?と僕は思う。改めてクラブの中を見回すとやつさまでみんな肌だけロボットみたいだつた人々はどこにもいなくなつていて。ふつうに入々はクラブの音楽の中で踊り、あるものは座つて酒を飲み、あるものは煙草を吸いながら会話をしている。裸のロボットはいなくなつていて。

マツタク

イルンダ？と僕は思う。

「なんじゃ？どこか具合でも悪いのか？」と老人は言つ。

「いや、マイト、ノー・ウォーリーズ、マイト。ちょっと眩暈がしだけだ、ちょっと飲みすぎたのかもしれない」と僕はとにかく誤魔化することにする。記憶がなくて頭がおかしい奴だと思われたら話がややこしくなる。僕はとにかくこの世界のことを誰かに聞かなくてはいけない。この老人はかなり人がよさそうだなと僕は思う。僕はビールのグラスを口元に運ぶ。クラブの中はかなり大きなスペースであるらしく、カジノのコーナーもあれば、レストラン、教会の内部のような大きなダンスフロア。大きな野球場と言つても過言ではないような広さだ。上を見上げると天井はすべてガラス張りになつていて。あのラブホテルみたいな建物の中にどうしてこんな大きな空間があるのだろうと不思議に思う。

「どうか、ところであんたはどこから来た？」

「ブツ」と僕はあやうく噴出しそうになる。

「え？マイト？何だつて？このオレ様がどこから来たかって？そんなことも知らねえのかよ。ヨウ、レッスン、マイト、チエケラウト、オレ様は日本から来たんだ。純粋なピカピカの日本人だ」

「なんじゃ？あんたは日本人か？ワシは今まで純粋な日本人には会つたことはなかつたのう」

「なんだよ？マイト？それは、ないぜ。日本人なんて世界中どこに

いつてもいる。またにうようよ、いる。どこに行つても会えるだろ  
?それに最悪日本に行けば会えるんじやないか?」

「日本なんてものはもう存在せんじやないか?それにもう国境とい  
うものさえない。あんたいつの話してあるんじや?」

「オーケー、マイト、オレは歴史の話が好きなんだ。でもいつも学  
校のテストではビリかその前ぐらいだった。でも歴史が好きなんだ」

と僕は答える。

何が、一体、どうなつて、いるんだ、と僕は再び思う。日本はも  
う存在しない?それに国といふものさえこの世界にはないのだろう  
か?

どうゆうことだ?僕は日本人じゃないか?コトカは日本人じやな  
いのだろうか?

それに・・・・・・・・ダメだ、考えてもわから  
ない。

老人は少し戸惑つたような表情で僕のことを見ている。まずい、  
ここは頭がおかしい男だと思われないように向か話しかけなくては、  
と思う。

「ヨウ、マイト、それよりもさ、オレの名前はカエルって言つんだ  
と僕はとうあえず手を差し伸べる。

「ワシはジエフじやよ。アメリカとオーストラリアの血族じや」と  
老人は笑つて僕の握手を受け取ってくれる。

それでは僕は混乱しちゃうになる。何がなんだ? とりあえず外国と考えたほうがいいのだろうか? そう思つてあたりを見回すと、辺りには白人や黒人、それにアジア、まあどんな国の人々が入り混じつていることがわかる。

「ヨウ、マイト、ここでもしかして、ものすゞくやば」といふじやないよな? お化けとか、へんな生物とかいないよな? って、いうかさ、オレ様つて昨日酒飲んでここに来ちまつてか、覚えてないんだよね」と僕は言つ。

「そりやあ、大変じやつたの? でも元々ワシらはコンピューターの中の世界に住んでおるじやろ? 結局はその中のどいか、どこにいとになるな。言わんでもわかつておるとは思つがの?」

「ハア? 何だよ? マイト? わけがわからんねえぜ、マイト。それはちょっと、ノー・プログラムってわけにはいかないぜ?」

僕は自分でもわかるはつきりとわかるぐらい驚いた顔をして老人を見る。老人はますますこの若者は頭がイカれているんだろう、といふような顔をしてくる。でも頭がイカれているのはそつちのほうじゃないか? と僕は言いたくなる。この世界がコンピューターの中だつて? それはどうゆうことだ? ジャア、どうして今僕はここに存在しているのだらう? ?

「ちょっと、待つてくれ。ストレートに言つて、わけがわからんねえ、オレ様は酒を飲みすぎたらしい。実はオレ様つてアルコール依存症とつ病なんだ。でも早く社会に適合するようにがんばつてある、つもつだ。でもときどき記憶がスポーツと抜けちまうことがある。どうしてかは医者もわからぬ、って言つてた。そこで、とにかくオ

レ様は歴史が好きなんだ。他人から歴史の話を聞いているのが一番のオレ様の病気の回復の方法だって言われてる

「なんか、あんた変わったるみたいじゃな。ワシも同じくなもんじゃ」

そう言つて、ジェフは「ガハハ」と笑う。

僕もここは合わせて笑つたほうがいいな、と思つて別におかしくもないけど大声でジェフと一緒に笑う。

「ハアー、実はワシも少し暇をしておつたところじゃよ。ちょうど話し相手がいて良かった。ワシも歴史は好きじゃし、ワシみたいな年寄りの話は誰も聞きたがらんから」

「マイト、マイト、マイト、オレ様つて、チョー、チョー、ヒマしてたところなんだ。実はさ、オレ様つて暇の達人なんだよね。一刀流免許皆伝ぐらいいの暇の達人なんだ。ジェフに会えたオレ様つて、チョー、ラッキーだよ。ジェフ、マイト、ナイス・トゥー・ミート・ユー」と言つて僕は自分のビールグラスを差し出す。

ジェフは自分のグラスを差し出し、僕のグラスと合わせる。

「チアーズ、マイト！」

僕とジェフは大きな声で言つ。

クラブの中では音楽が変わってインフェクトイッシュ・マッシュルームの「アイム・ザ・スーパー・バイザー」がかかっている。

ジョフは手に持ったビールをぐいぐいと飲み始めるとそのまま一気にグラスを空にしてしまう。

「イヨー、大統領！」と僕は言つ。

ジョフは「ゲホッ」とゲップをする。まるで口の中からどす黒い塊のようなものを吐き出したような音がする。

それでもとにかく、ここには話を聞かなくてはと思う。そういうえばさつきまであんなに身体が疲れていたような気がしていたのにビールを飲み始めたせいか気分が良くなってきている。

「アホ、ジョフさあ、あ、もう一杯ビール飲まない？もちろんオレ様のおじりだせ、マイトー！」

「ああ、もちろんだあ」とジョフは答える。

僕がカウンターのところに行くとそこにはボーアラシーカウント

した黒の制服をきた男が立っている。

僕が「トゥー・ビヤー・プリーズ！」と指でピースサインを作りながら言つと、男は新しいビールを一つ運んでくる。

僕がジョフのそばに近づくとジョフは僕の方を前にして立っている。僕はそちらに近づいて「へい、ジョフ？」と呼びかける。ジョフはこちらを振り向く。

「ああ、カエル君、悪いね」と言つてジョフは僕の運んできたビールを受け取る。

ジョフのティーシャツには「LIFE ALWAYS HAS TO  
WO-SHIDES」と書いてある。僕はどこかでこの言葉に聞き覚えがあるような気がする。でもわからないうまだ記憶が混濁している。

「そしたら、カエル君、歴史の話じやつたな？」

「ああ、ジョフ、オレ様つて歴史養分みたいなものが必要らしいんだ。いや、これは医者によれば、だよ」とにかく僕はジョフの話を聞くことにする。余計なことを言つてまた話がややこしくならないように僕はティーシャツのことは聞かないことにする。

「そしたらどのへらい前の話じや？ インカ帝国とか、メソポタミア文明とかかな？」

「いや、いや、もつともつと先だ

「なんじや、世界大戦とかか？」

「いや、ジエフ、おしいとこが突くなあ、でも、むつほんの少し先だ」

「なんじゃ？徳川幕府ぐらいかの？」

「ジエフ、それじゃあ戻つてるじゃねえか？違う、もつと先だよ」

「そしたら21世紀初期ごろあたりの話かな？」

「ビンゴー・ジエフってビンゴの天才なんじゃない？ちょいびそなあたりの話にオレ様は食えているんだ」

「そしたら精神戦争ぐらいの話になるのかのー？」

精神戦争？と僕は思う。そんな言葉は聞いたことがない。たぶんその辺の記憶がずつぱりと抜け落ちているのだね。

「ビンゴー・まさにビンゴー・これ以上ないぐらいビンゴー・やつぱりジエフってビンゴの天才みたいだね」

「そつかの？そんなに人から褒められたことは久しぶりじゃな

「オレ達つてさ、いいコンビになるぜ、きっと、オレ様は暇の達人だろ。ジエフはビンゴの天才だもんな。どう？そう思わない？」

「どうかのー？」

「絶対、大丈夫だつて、絶対すつげえー、コンビになるぜー・なんなら俺たちで漫才のコンビ組んでもいいぐらいだ。オレ達はそのぐら

い抜群の「ハヤシ」なると細づば

「ハヤシかもしれんのー」ヒジヒツがビールを飲みながら答える。

「といひでや、ジヒツヒ煙草吸うの？

「ワシか？ワシは若い頃は吸つておつたが、もつじとんな歳じやうた。もつ随分前に辞めてしまつた」

「やつぱりー。オレ様、やつぱりやうだと思つたんだよね？やつぱりジヒツヒて、チョー、イカシてるよ。めつちや『渋チン・ブルース』つて感じだもんね。実はさ、オレ様も煙草吸わないんだ！どうだ！びつくりだろ！俺たちすんげえコンビになるぜ。まさに歴史に名を残すかもな」

「ハヤシかのー？」ヒジヒツは答へる。

「あ、そのうち、オレ様の部屋、ちょっとまだ汚いんだけど、今綺麗に掃除してある豚が一匹いるんだけど、オレ様の部屋遊びに来こよー」

「ワシが？いや、それは急に押しかけるのは申し訳なーのむ

「そう固こじと重つなよー、ジヒツ、オレ様どジヒツの仲じやないか？」

「まあ、ワシもこつも一人でビール飲んでおつてもしようがない。そのうち一度ぐらこはお邪魔させてもらつかもしれんの」

「極上のおもてなし、つてやつでお迎えするぜ。なんならマジで、

ファッキン・リモー黙あぬ」ソラジンハゲハリコ壁んでやつてもいん  
だぜ?」

「いや、それは、いくらなんでも……」

「何、言ひてんだー固こ」と嘔ひなー。マジで言ひてんだぜ、オレ様  
は

「やのひかを伺こするよ。とにかくで、歴史の話はいいのかの?」

「あ、そうだった、そう、そりなんだよね。すっかり忘れてた。さ  
すがジーフ。もひコンビの息もバツチリじゃねえか?」

「やひかのー?」とジーフは少し困ったような顔をしてこる。

「まあ、ここや、そりだーもひ一発、ビール飲まない? もちろん、  
オレ様のおひりだぜ」

「まあ、ワシは別にかまわんが……」

僕は急いでカウンターに行きビールを一つ持つてくる。

「やひ、やしたら精神戦争の話じゃったな?」

「わしがビンゴの天才だな。その変の話が聞きたいんだ」

そしてジャフは話し始める。

「えーと、んー、やひじやのお、そしたら時は21世紀。ノストラ  
ダムスの予言も「ハペコーターの2000年問題も何とか乗り越え

た人類であつたが、そこからが本当の問題じゃつた。人々の精神がどんどん病み始めたんじやな。あまりにも情報化社会されすぎたために多くの若者が自分を見失つてしまつた。社会のなかにはあまりにも多くの作られた選択がゴミのように舞つていた。でも若者はそのどれも選べなくなつていつたんじや。あまりに情報のスピードが速くなりすぎて全く自分の頭で物事を考へるということが出来なくなつていつたんじやな。あるひとつ情報のことを考へている間に次の情報が長い廊下にズラツと列を作つて待つてある。これではなかなかひとつのことを見つけることを落ち着いてじっくりと考へることはできん。いや、まさに考へている暇がない、といつたほうがいいのかもしけんの。次第に人々はあらゆる物質に対しても心を開けなくなつていつた。例えば、インターネットとかテレビとか、ゲーム、漫画、あらゆる物質の中にしか人の心というものは存在しなくなつてしまつた。

そして地球というのはますます住みにくくなつていつた。異常気象や環境破壊、未知なるウイルス。そういうものによつてな。とにかくでもそれは止められないことだつた。それは宇宙の流れを止めようとするようなものじやつたのかもしれない。とにかく地球はどんどんと人が住むには過酷なところになつていつたんじや。そして各先進国で同じような精神病がはやり始めた。引きこもりや、集団自殺、それに異常ともいえるような犯罪。朝のニュースから新しい死のスタイルが報じられ、世界の終わりを告げる事件が多発。地球はもう終わりに向かつていた。このまま行けばそう遠くない年月で地球は全く人々が住めなくなるだろうと誰しもが感じ始めていた。そこへ一人の天才科学者が作つたコンピーターが発売された

「天才科学者?」と僕は言つ。

「彼が作つたコンピューターは『ブラック・サン』という名前じや

つた。そしてそれはまさにその名の通り黒い太陽じゃつた。彼は人々の心がコンピューターの中に入っているのなら、コンピューターの世界を本当の世界にすればいい、と考えたんじゃな。そんなことをどうやってやるのかはワシにはわからんが、とにかくそういうことをじゅうぶんやつてやるのと、ワシはずつと船乗りじゅうぶんやつたからあんまり難しいことはよく知らんのじゃが……」

「気にすんなつて、オレ様もバカで有名だからな。どうやらバカコンビで決まりだな。いや、でもジェフがバカつて意味じゃないよ。俺たちの仲はそのぐらいバツグンだつてことだ」

「や？ カエル君、ビールがもうないじゃないか？ 今度はワシの番じゃな？ さつきから何回も悪いからの」

「マイト、ジエフー何言つてんだつて言つてるじゃないか？ そんなのオレ様のおじつで決まりだせ」

「いや、ここにはカエル君、友情というものは時には素直に気持ちを受け取ることも大事ですぞ」とジエフは言つ。うん、そうかもしれない、と僕は思う。持ちつ持たれつというバランスがそこには必要なのかもしねりない。

「オーケー、じゃあ、その次はまたオレ様の番だな？」

「そう言つたジエフはカウンターのところにビールを取りに行く。

僕は頭のなかで今聞いた内容を整理してみる。

とにかくそれまであつた世界というものが住みにくくなつてきて、コンピューターの中に入り始めた、ということなのだろうか

？でもまだマイマイチ仕組みがよくわからない。僕の身体はまるで生きているように思える。どうやつたらそんなことが出来るのだろう？観念の逆転？と僕は思つ。観念の逆転とはなんだ？全くわけがわからない。そもそも観念というものは、観念だから、どうやってそんなものを逆転させるのだろう？

「待たせたかの？ほら、新しいビールじゃ」

「オウ、ジエフ。ありがとう。どうやつもつ一度乾杯だな？」

「乾杯って、日本語では何て言つんだ？」とジエフが僕に聞く。

「カンパイって言つんだ」と僕は乾杯の部分を日本語で言つ。

「そうか、そしたらカアアンバアアイイ」とジエフは言いながら僕とグラスを合わせる。

それにしておれでビール何杯目だったかな？と僕は思い始める。話を聞いているのはいいけど僕はそんなに酒に強いほうではないのだ。ジエフはビールが好きみたいでもう何杯目なのかもわからないけど、とてもうまそうにビールを飲む。そのままCMに使えようなほど、気持ちのいい飲みっぷりだ。

「そう、それから、どうなつたんだ？新しいコンピューターが発売されてから？何が一体戦争なんだ？でも結局オレ達はコンピューターの中に住むことになつたわけだよね？」と僕は聞く。

「そう、でも精神戦争のことは誰も詳しい内容を知らんのじゃ。ただそうゆうことがあって、我々はコンピューターの中に住むことになつた、としかな」

「なんだよ、それ？全然わけがわからんねーよ。みんなこいつして生きているのにそんな矛盾を気にしないのか？」

「ワシらはもうずっとここに住んでるんだじゃ。だからワシらはこれが当たり前なんじゃよ。理屈やシステムがワシらにはわからなくてももうここにいるのが当然なんじゃ。ハードウェアのコンピューターがどのようにプログラムされていようともそれがきちんと機能さえすればワシらにはどうでもいいことなんじゃ。だからもうそんなことを考える人もこの時代になればほとんどないんじゃ。それにコンピューターの中で住むことを拒んだ人々たちがどうなったのか、それはこちら側の世界では知りようがない。今の我々にとってそれは鏡の向こう側のように全く別の世界なんじゃ」 そう言つたジョフはまたグイッとビールを空にしてしまつ。僕のジョッキにはまだ満杯に近いぐらいのビールが残っている。今度は僕の番だ、と思つ。

「ジョフ、今度はオレ様の番だな」

「や？ でもカエル君はまだ飲んでおらんじゃないか？」

僕は一気に自分のグラスを飲み干す。僕はカウンターに向かいながら、こんな酒の飲み方は高校生みたいじゃないか？ と思う。いうのもジョフはすごく酒が強いみたいだからだ。これはなかなか厳しいコンビになるかもしれないと思い始めてくる。

気がつくと僕はロデオに乗った後のようにものすごく自分が酔つ拝つていることに気がつく。なんだか足元もフラフラしている。今日は長期戦にはかなり無理があるようだ。

僕がビールをジエフに持つてゆくとジエフはあつという間にビールを飲んでしまう。僕の目の前には零れ落ちそうなぐらい満杯のビールのグラスがふたつも並んでいる。僕はなんとかジエフに追いつかなくてはと無理にビールを飲むけど、飲んでも、飲んでもジエフのペースは変わらない。

次第に本当に何の話をしているのか全くわからなくなってくる。もうダメだ。これが限界だ、と僕は思う。

「ヨウ、といりでや、ジエフ」と僕はジエフが喋り続けているのを遮つてそう言つ。「いつのも、チヨー申し訳ないんだけど。オレ様つてあまり酒飲んじゃダメなんだよね。実は医者から止められてるんだ。いや、ほどほどなさいいらしゃいんだけど、これ以上はもう飲めない」

「ありや？ そりやつたな？ いかん、いかん、忘れておつた。ついワシも若い人と出会えて喋りすぎたようじやな？」

「いや、ジエフ、そんなことはないぜ。全く、ノーウォーリーズだと僕は胸の辺りに気持ち悪いものを感じながらそう言つ。

「オレ様は、これから豚の飼育をしなくてはいけない。そろそろ時間なんだ。でもオレ達のコンビのことは忘れないでくれよ」と僕は早くトイレに行かなくては、と思いながら言つ。

「ああ、ワシは毎日このクラブに顔を出すから。またそのうち会えると思つ

「オーケー、グッドラック、マイト。ビンゴの天才、ジエフ」

僕はジョーフともう一度握手して別れる。早く部屋に戻らなくては、と僕は思つ。とにかくトイレだ。これは今この瞬間には僕の一番の問題なのだ。これは一刻を争う問題なのだ。記憶がどうのこうのと言つている場合じゃない。とにかくトイレ、トイレだ。僕は記憶を辿り、巨大なクラブの中を自分の部屋に繋がる扉へと戻る。

部屋の扉を勢いよくあけようとするけど部屋の扉にはまだ鍵がかかっている。

「オーケイ、コトカあ、緊急事態だ。早くここを開けてくれないとものすごいことになる」と僕はドアをバンバンとノックしながら言つ。「オーケイ、これはマジで言つてるんだぜ」僕はドアの前で何度も足踏みしながら言つ。「聞こえてるんだろ? コトカ? オレ様マジでやばいんだ。記憶がまた全部なくなつてもいいから、とにかくここを開けてくれ!」

そうすると音もなく扉が開く。僕はすぐにドアを開けてリビングを潜り、トイレのドアを開けようとする。

「ダメー!」とコトカが言つ。

「なんだ? 今オレ様はそれどころじゃないんだ。話をしている場合じゃないんだ

「ダメって言つてるでしょ!」

「なんだよ? オレ様チョーやばいんだ

「今私がトイレ使ったところなの」と口カガは少し恥ずかしそうに言つた。

「オレ様なあ、豚の匂いなんか気にしてる場合じゃないんだよ。それどころじゃないんだ」

「まだトイレに完全消臭機能がついてるバージョンじゃないのよ。バージョンアップすればすぐに使えるけど。」

「する、する、なんでもする。ハイ、ケータイをんお願いね」と僕はいながらトイレにかけこむ。

「オイ、死ぬかと思つたぞ」と僕はトイレから出でて言つた。

あれつ？と僕は同時に思つた。

「どうしてオレ様はトイレの場所がすぐわかつたんだ？」

「だつて、前に住んでたからじゃない？」

「ううん、こんな刑務所みたいに家具もない部屋に？ 一体どうやって掃除したらいいかわからなくなるんだよ。ほとんどの部屋にあったもの捨てただけじゃないか」

「違つわよ。もつと前は部屋らしかったわよ。カエルがケータイを初期化したか？」

「オレ様は知らねーって言つてゐじゃないか？ それよりも布団ひいてくれ。オレ様は酔つ払つて気持ち悪いんだ」

「自分の部屋に行って寝ればいいじゃない。布団だけは残ってるわ  
」

僕はまだいろいろとコトカと話をしなくてはいけないような気がするけど、とにかく今は眠りたいといつ気持ちのほうが強い。

「いやちだつたよな。オレ様の部屋？」

「やう、やつちよ」とコトカは言つ。

部屋の中はリビングを挟んで僕とコトカの部屋がひとつづつある。そしてトイレとシャワーが玄関の近くにある。家具らしい家具もないで本当に広い刑務所みたいだ。僕は自分の部屋に行くとすぐに布団に入る。なぜだかそこには懐かしい匂いがする。これは僕のものなのだろうか?と思つ。

僕は眠りうとする意識のなかで明日田が覚めたらこんな悪夢から逃れて全く別の場所にいる自分のことを考える。それはもつと、なんていうか、まともな場所と時間だ。僕はそこへ辿り着くのだろうか?僕は薄れてゆく意識のなかでそう願つ。

でもやっぱり僕は目覚めてもカエルなのだ。

僕は昨日のカエルのまま田が覚める。というよりもカエルの記憶を持つた僕が目覚めたといったほうがいいのかもしれない。

部屋の中を改めて見回すと大きな窓が一つあることに気がつく。そこには断崖から見える海が映っている。僕は田を覚まして自分が自分であることをもう一度確認する。やうだ、僕はカエルだ、と。そして自分がこの部屋に辿り着くまでの昨日の記憶を探つてみる。それはまるで一本のストーリーのようにちゃんと繋がつている。僕はいまこの部屋にいるということが確認できる記憶を僕は持つている。それにしてもひどい一日酔いだ。まだ頭がグラグラしている。これは僕の記憶がおかしいためでない。昨日ジエフとビールを飲みすぎたからだ。

僕はちゃんと記憶を持っている。それをもう一度確認してから僕は身体をゆっくりと起こす。部屋の中には家具と言つ家具がひとつもない。あ、そういうえばケータイがあつたな、と僕は思い出す。僕は布団の横に転がっているケータイを手に取つてみる。

「ビーツルズが聞きたい」とケータイにつぶやく。

でも何も音は聞こえてこない。

「おー、ケータイ

「おはようございます、カエル様。ごゆっくりお休みになられましたか？ 今日の『』気分はいかがでしょう？

「うふ、はつきり言って朝から最悪だ。頭も痛いし、記憶もない。でもとにかくビートルズが聞きたいんだけど」

「カエル様、申し上げにくいのですが、カエル様のお部屋にはまだスピーカーがついていませんので、音源をお持ちでもお部屋の中では音楽を聞くことはできません。よろしければ、こちらで何かご紹介いたしましょうか？」

「ああ、それなら最高級のスピーカー頼むぜー」と僕は言う。

「かしこまりました」

そう言つとビートルズが部屋の壁中から音楽が聞こえてくる。まるでコンサートホールみたいだな、と僕は思う。でも一分もしないうちに部屋の壁を誰かが叩いている音が聞こえてくる。

「オイー! うせえんだよ!」と物凄い音で壁を蹴る音が聞こえる。

なんだ? と僕は思つ。また悪夢の始まりなのだろうか?

とりあえず僕はケータイの音楽を止める。そうすると部屋は一瞬にして静まりかえる。さつき壁を叩いたのは誰だつたんだろう? 男の声だつたからコトカということはありえない。隣の住人なんていふばずがない。ホテルの廊下には僕の住んでいるこの部屋のドアしかなかつたのだ。どうなつているんだろう?

僕は起き上がりつてリビングへ行く。そこにはコトカが床に座つている。

「おはよー、カエル。良く眠れた?」

「なんだよ、よく眠れるわけねーじゃねえか。まだわけがわからんねーよ」

「うわ、すごい酒臭い。ちょっと、カエル飲みすぎたんじゃないの?」

「コンビの杯を交わしたからな。なかなかハードだった、って、オレ様はまだオレ様だよな?」

「何言ひてんの?カエルじゃない?」

はあー、と僕はため息をつぐ。朝起きた時からため息を付かなくてはいけない一日なんてろくな一日になりそうではない。それにこのわけのわからない世界の一日がまたやつて来たというだけで、僕はなんだか気が重くなってしまつ。

「それにしてもさ、さつき誰か壁叩いてたぞ、あれなんだ?」

「ああ、あれね。隣の住人じゃない?まだ部屋に防音プログラムをダウンロードしてなかつたでしょ?」

「なんだ?それ?そんなものは付ければいいけど、隣の住人ってなんだ?昨日は隣に部屋なんかなかつただろ?」

「何言ひてんの?あるに決まってるじゃない?私たちの住んでいるのは〇号室でしょ?隣は7463号室でその隣は〇29856号室」

「なんだ?そんなもの昨日はなかつただろ?何の話だ?」

「だから私がもういちいち説明しない、って昨日書いたでしょ？自分で外に出てみればいいじゃない」

僕は部屋の玄関の扉を開けて外に出てみる。

朝からこんなに驚いたことは生まれて初めてかもしない、といふぐらい僕はびっくりしてしまう。そこには巨大な町が一夜にして出来上がっているからだ。僕は空にも届きそうな高い高層マンションの一室の扉から出てくる。僕が振り向いて部屋のドアを見てみるとそこには「0号室」と小さなラベルに書いてある。隣を見てみるとコトカが言ったとおり、7463号室でその隣は029856号室になっている。延々と同じような作りのドアが廊下に並んでいる。昨日見た水族館の内部のような廊下はどこに消えてしまったのだろう？それにクラブはどこに消えてしまったのだろう？と僕は唖然としながら思つ。マンションとマンションの間を凍えそうな風が通り抜けてゆく。僕はティーシャツと短パンという格好なので皮膚がめぐれそうなほど寒さを感じる。あわてて僕は部屋の中に戻る。

「オイ、コトカ」

「これってどうなっているんだ？って言つんでしょう？これはこうゆうことなんだかいじゃない」

「おまえなあ、『いいじゃない』で片付くよつの問題か、これが？もうオレ様はカエル君を卒業したい。今日は卒業式をしよう。朝からウキウキの気分でオレ様はカエル君を卒業する。卒業証明書のピーは市役所に届けておいてくれ」

「朝から何バカみたいなこと言つてんの？」

「卒業式には一緒に螢の光を歌おう。一応言つておくけど涙は流さなくともいい。だいたい涙を流せるほどの思い出をオレ様は持っていない。そもそも記憶がないんだからな。オレ様の記憶はクール宅急便で届けてくれ」

「バカ！とにかく音楽が聞きたいんだつたら防音プログラムをダウンロードしなきゃダメよ。ここは安アパートで隣の人のいびきまで聞こえるぐらいなんだから」

「それじゃあ、ケータイ君よろしく頼む」と僕はケータイに言つ。

それから僕はまだかなり一日酔いがひどいことを確認する。頭がガンガンする。昨日は何杯ビールを飲んだんだろう？その変の記憶がはつきりしないのは僕の頭がおかしいためではないだろう。

僕は音楽を聴くために自分の部屋に戻る。ビートルズは素晴らしいがいつまでも「ナッシング・ゴナ・チエンジ・マイ・ワールド」といい続けていても本当に世界は何も変わらないままだ。このままではいけない。僕はもつとタフで吹き飛ばされるぐらい激しいものが欲しいのだ。そう、まるでニルバーナみたいなのが。

「????????????」

「？」

「ニルバーナ？」

僕は覚えている、その名前を。

メタリカ。

クイーン。

レッド・シッペリン。

ジミ・ヘンドリックス。

エリネム。

なんだ? どんな出ででるじゃないか?

レッド・ホット・チリペッパーズ。

レイ・チャールズ。

なんだ?

ステイービー・レイ・ボオン。

ジム・ムス・ブラウン。

ボブ・マーリー。

ジャック・ジョンソン。

ビートルズで出でるんだ?

ビービー・キングにヒック・クラプトン。

止まらない、全くもって止まらない。

ストーン・ローゼス、ジョン・ベック、カルロス・サンタナ。そしてあのレディオ・ヘッドにコールド・プレイ、マッシュ・アタック。どこまで繋がって行くんだ？

しかし気がつくと僕は自分の部屋で両手を挙げてガツツポーズをしている。僕は記憶の一部を取り戻したのだ。早くCDを手に入れなくては、と同時に僕は思う。それは僕の記憶の何かの手がかりなのだ。違う、ケータイで注文するんだった、と僕は瞬時に思いなおす。

「おー、HMV！」と僕はケータイに向かって叫ぶ。

「いつも来店ありがとうございます。こちらはHMVでございます」とケータイが喋る。この前と同じ若い女の声だ。

「今思ついた!!コージションの音源を全部くれ!」と僕は叫ぶ。

「ありがとうございます、これでカエル様のポイントは340ポイントになりました。無料で3ギガ分音源をサービスさせていただきますが、何がよろしいですか?」

「とりあえず、今のところはいい。手に入れたものを聞くから」と僕は答える。

「そうですか?ノーダウトとか、モチバなんていいものありますけど……」とケータイが言つ。

「今のところそういうものはあまり気が向かない。とりあえずポイ

「…」  
「…」

「…ですか？Hンヤ、とかマライヤ・キャリー、マドンナなんか  
も売っていますが…それにミシシウラっていうお客様にだけ教える  
秘密の音源もあるんですよ。しかもこれ限定発売なんですよね」

「…」  
「…」

「…が…」  
「…？」

「…」

「…」  
「…」

「…」  
「…」

僕はケータイの通話を切るボタンを押す。

ケータイの画面には、

NOW LONDING

NOW LONDING

NOW LONDING

NOW LONDING

NOW LONDING . . .

NOW LONDING . . .

という文字が何度も浮かびあがる。おそらくは僕が購入した音源をケータイにダウンロードしているのだな。

「カエル！まだ寝てるの？」とコトカが僕の部屋のドアをノックする。

「起きてるよ」と僕はドアに向かって言つ。

「どうかに行つて」飯食べない？ お腹空いてるんだけど？

「ああ、そうだな。ちょっと待つてくれ、顔洗つて、歯磨かないとな

「まだ、水道契約してないでしょ。あなた昨日トイレして流してないわよ

「なんだよ、それ？ 昨日水流してない？ ああ、酔っ払つてたからかな。それは悪かった、じゃあ、ケータイに言えばいいのか？」

「そうよ、早くしてよね。私お腹空いてるんだから

「オウ、わかったよ

と答えるけど、田覚めてすぐなので僕はあまり機嫌が良くない。あの豚まだ食うつむりか？と僕は心中で思つ。実は相撲取り部屋

からのスカウトを待ち望んでいるのだろうか? という疑問まで浮かんでくる。

それにしても僕は昨日トイレを流さなかつたのだろうか? それは人間失格の烙印を押されてもしかたがないかもしれない。でも、僕の前にコトカが使つていたはずだ。でもバーションアップした直後だつたからかトイレは汚れていなかつた。

だんだんと僕の記憶が何かと絡み始めたことを僕は感じる。外に出ていきなり町があつたのには驚いたけど、海と砂漠しかないようには遙かにましだろう、と思い直す。これでなんとか人間らしい暮らしができるかもしれない。

そういえば、水道を契約しろとか言ってたな、と僕は思い返す。僕はそれをケータイで注文する。さすがにこのままトイレが流せないのは問題外だ。水がないと人は生きていけない。

僕はトイレに行つて顔を洗う。随分気分がまともになつたような気がする。

「オイ、ケータイ君、歯ブラシがないんだが用意できるか?」と僕はケータイに聞く。

「かしこまりました。天然素材の新開発スーパーマイナスイオン発生の音速電動歯ブラシでよろしいですか? あと、よろしければ朝の男の必需品、電気髭剃り『ダンディーズム』が最近売れ筋ですが?」

「なんでもいいよ、それでいい」と僕は答える。僕はそれで朝の身支度をする。僕のサイズに合つたジャケットとジーンズをケータイで注文する。この世界のあらゆることはケータイを操作すればいい

みたいだ。

「じゃあ、どこに行くんだ。どこか上手い飯食わせるレストランかなんか知ってるのか?」と僕は聞く。

「知らないわよ、カエルが決めればいいじゃない?」

「今まではどうしてたんだ?まさかいつも外食してた、ってわけはないよな」

「たまにチーン店のテイクアウトとかもしたけど、だいたいいつもカエルは自分で料理してたでしょ?私はそれを食べてたけど」

「なんだ?オレ様は料理もするのか?オレ様はまさに豚の飼育係か?」

94

「とにかく今日はどうするの?まだ部屋に何もないから外で食べるしかないじゃない?」

「そうだな、とりあえずクラブに行くか?あんな大きなクラブならレストランぐらいはあるだろ。つてクラブはどこにあるんだ?」

「クラブはこのマンションの地下よ。エレベーターで一番下まで行けばいいのよ。クラブにはできれば行きたくないんだけど、今日はしうがないわね」

「とにかく行こうか、オレ様も腹が減った。オイ、それとな、この部屋の鍵なんとかしてくれよ。不便でしょうがねえ」

「じゃあ、ケータイ貸して、私の鍵を「ペー」してあげるから

僕はケータイをコトカに渡して部屋の鍵を「ピー」してもうう。そして僕らはエレベーターで地下に降りる。エレベーターのドアが開くとそこには昨日見たのと同じクラブの扉が目の前にある。

僕とコトカがクラブに入つてゆくとそこでは昨日の夜の続きのように様々な人がいる。音楽はアストリックの「ポイズン」がかかっている。

僕はクラブの中を見回しながら中に入つてゆく。ボディビルダーミたいに筋肉ムキムキの男が短パンだけを身につけて自分の二倍ぐらいはありそうな大きなスピーカーに向かつて腰を擦り付けるようにして激しく踊つている。まるでジミヘンがギターをこすり付けるみたいに、今までずっと長い間我慢してきたことが爆発してしまったみたいに、音を愛撫し音に愛撫されるように身をくねらせている。

その隣の薄暗い壁際のソファーアの上では数多くの人がTVを取り囲むようにして眠つている。もちろんテレビの音は大きなクラブダンスの音に書き消されてしまつていて。テレビには何か政治の演説のようなものが延々と映されている。人々はその演説があまりにもつまらなくていつの間にか眠つてしまつたように見える。

天井を見上げると大きなガラス張りの向こう側には星が輝いているのが見える。この世界の時間や空間がどのように機能し、成り立つているのか僕には全く理解できない。

それから僕とコトカはレストランのブースに行き、テーブルに腰掛けで食事をする。僕が席に座つてもまだ筋肉質な男は狂つたように腰を振つて踊つている。

まるで「俺は飯なんか食べない、飯なんかじゃ俺は止まれない、頼むから俺のことはほつといてくれ」と言つているみたいだ。僕がじつとその光景を見ているとこの踊り狂つている男はひょつとしたらゲイなんぢゃないかと思つ始める。

「どうしたの？」とコトカが聞く。テーブルはダンスフロアから少し離れているのでコトカの声も聞こえやすい。

「あのせ、あそこで踊つている男なんだけど」僕が視線を向けるとコトカは僕の視線を追うように田を動かしてその男をチラツと見る。「ひょつとしたらゲイかな？」

「あれがゲイ以外の何かだつたら私は拍手して喜んあげる。そのくらい強烈にゲイよね。あの踊り方どう見たつてヤバイもん」コトカは何万年も昔の昆虫の化石を見たような顔つきで言つ。

「でもゲイつてことはセックスに関していくれば元々男と女の一つのものを一つにして持つているつてことだよね。セックスをしなくてもセックスの問題はある程度解決しているんぢゃないかな? そう考えるとすごくない? もちろんオレ様はゲイぢゃないからゲイの人々のセックスの悩みなんてわからないけど」

「でも、それはなんていうか、違つんぢゃない?」コトカはバラバラとメニコーをめぐりながらそつと言つ。音楽の重低音が遠くでドンドンと僕の意識を蹴飛ばしている。コトカは頭のどこかで何かを考えながらまつたく別のどこかで全く別のことを考えているような気がする。

「元々男と女がいるから世界があるわけでしょ。それがないってことは世界そのものがないってことになるんぢゃないかしら」

「コトカが目線でウエイターを探している間僕はコトカの言ったことにについてしばらく考える。それでもなんだかよくわからない。世界そのものがないってどういうことなんだ？よくわからない。なんだか自分がものすごくバカなんだという気がしてくる。ブラジャーとパンティの部分だけが真っ白く残ったものすごく日焼けした若い女の裸を見ているような気分がしてくる。身体はくまなく興奮しているように思えるけど、頭の中のどこかに開かない扉が隠されているような感じだ。

「私は注文決まつたけど、カエルは？ウエイター呼んじやう？」

「ああ、オレ様はライスと味噌汁。糊と納豆。それに漬物と温泉タマゴだな。あと梅干があれば文句は言わない」

「カエル、朝からそんなに豪華なもの食べてもいいの？日本食はものすごく高いのよ」

「なんだ？ここは日本食置いてないのか？オレ様はベジタリアンだぞ。健康第一っていうのがオレ様のモットーなんだ。頭がおかしくなるようなジャンクフードなんか食べないからな」

「ある」とはあるけど、食べたかつたら食べればいいじゃない

僕はウェイターを呼んで注文を伝える。しばらく僕らは黙つてクラブの風景を見ている。ここでは朝も夜も関係なく人々が踊つてゐる。僕とコトカには朝なのにここはまるで地球の裏側みたいに時差があるように思えてくる。

僕とコトカは運ばれてきた料理を食べる。味は日本食に近いけど

そこには何かが足りないような気がする。例えばおふくろの味みたいな僕の心のようどころなるようなものが。でも僕は黙つてもくもくと食事をする。いつも「飯を吃るのはなんだかとても久しぶりのような気がする。でもコトカと一緒に「飯を食べている自分にあまり違和感がない」という違和感が僕の中にあるような気がする。なんだか複雑な気分だ。

「カエル、今日はこれからどうするの?私はもう部屋に帰るけど」

「ああ、オレ様は少し町へ散歩に行つてくる。どんなところか見ておきたいんだ。それにあんな部屋じゃ何もできないだろ?少しは何か買つてくれるよ」

「そう、じゃあ私は部屋にいるから、それに帰りが遅くなつてもいいよ。カエルも少しば一人で考える時間が必要かもしれないもんね」

「まあ、何かあつたらケータイで連絡するよ。それじゃあまたな」

僕はコトカが去つてしまつてもしばらく一人でクラブのテーブルに座つている。僕は手に入れた音楽をさつそく聴きたいと思つけどヘッドフォンを持つていない。

「もしもし、ケータイ君?」

「ほんにちは、カエル様。何かご入用でござりますか?」

「あのせ、一人で音楽が聞きたいんだけど、ヘッドフォンつて用意できる?」

「もちろんでござります。MP3プレイヤー機能でござりますね。」

「わつわく」用意いたしますか？」

「ああ、頼むよ」

そうするとケータイの横からはじめ込み式の耳栓のようなものが出てくる。おそらくはワイヤレスの耳栓型ヘッドフォンなのだひつ。

「やあ、カエル君。カエル君じゃないか？」と僕に呼びかける声を聞く。

「あ、ジョフ、ジョフじゃないか？いやー、またしても偶然だな？これはやつぱりかなりのコンビだぜ」と僕は言つ。ジョフは僕のテレビにやってきてわつままでコトカが座っていた席に座る。

「ワシは、見たぞ。わつき見たぞ。カエル君もなかなかやるじゃないか？わつき一緒に女の子が座つておつただろ？ジョフは朝から手にビールのジョッキを持つている。それにすでにかなり酔っ払っているみたいだ。僕はビールのジョッキを見ただけでまだ頭が痛くなるような気がする。

「あ、あの豚か？あれはオレ様が飼育しているんだ。間違つてもオレ様の彼女とかではない」

「なんじゃ？ワシはてつきり……なんだかす」く仲がいい夫婦みたいに見えたぞ」

「ジョフ！朝から冗談キツイぜ、マイト。人間には言つていいことと悪いことがあるだろ？いくらコンビでもそれにはツツコミ入れられないぜ。あれはオレ様が飼育しているだけだ」

「なんじゃ？ いくらなんでもそれは言いすぎじゃないかの？ ワシはあんなにかわいい子は最近見ておらんぞ。あんな美人はなかなかいのじやないかな？」

「マイト、ジエフ！ 「冗談は顔だけにしてくれよ。あんなブサイクオレ様は見たことがねーな」

「カエル君、何かの見間違いじゃないのか？ あの子なら間違いなく十人中九人は美人だというようなタイプじゃと思うがの？」

「ジエフ、マイト。朝から漫才の練習なんかしなくてもいいんだよ。実はジエフってさ、目が悪いんじゃない？ なんならオレ様が眼鏡屋でも一緒に連れて行つてもいいぜ。もちろん、リムジンでな」

「いや、ワシの田は悪くないんじゃ」

「そりが、それなら、あ、そうだ、明日、明日の夜にオレ様の部屋に遊びに来いよ。今日はまだいろいろと準備しなきやいけないんだけどさ。明日ならオッケーだぜ。そうだ？ またビールでも飲もうぜ」

「ワシは別に構わんが、本当にいいのかの？」

「いいよ、いいよ、豚が一緒にいるけど、あんまり気にしないでくれ。あればただの「ーストだと思つてくれればいい。そしたら明日の夜8時にオレ様の部屋でどうだ？ 住所はこの〇号室だから、すぐわかるだろ。こんなに近くだつたら、残念ながらリムジンは呼べないかもしねないけど。いいか？」

「ワシはオーケーじゃ。そしたら明日の夜8時じやつたな？ 忘れないで伺うよ。それとこれがワシのケータイのアドレスじゃ。一応知

つておつたほうがこいじゃる?」

そう言つて僕とジョフはお互ひの連絡先を交換して別れる。それから僕は町を散歩してみることにする。

僕はアパートを中心にして迷わない程度に町の中を歩いてみる。まるで外国を歩いているような、映画の中に飛び込んでしまったような驚きを僕は感じる。町は新しく近代的で目に付くものすべてが僕の目には新鮮に映る。建物はどれも建てられたばかりのようにぴかぴかで古い建物は見つからない。少なくとも歴史を感じさせるようなものは全くない。道端にゴミひとつ落ちていないし、とても清潔な感じがする。まるで細菌ひとつこの町には入り込めないよう思えてくる。

スーパー・マーケット、デパート、食品街に行つてみる。そこではあらゆる国の料理が並び、あらゆる国の言葉が飛び交つている。国際的というよりはこれがこの町の日常なのだろう。僕はその全く新しい世界の日常に興奮していく。田にしたことのない野菜や、そして料理がある。想像もできないぐらい幾何学的なファッショングをした人々が歩いている。その日常の中に僕は新しい自分自身を見つけた人々が歩いている。その日常の中に僕は新しい自分自身を見つけ

る。そこで大きく息を吸い込み、新しい空気を胸いっぱいに送り込む。僕は町をしばらく歩いてみた後、目に付いた公園のなかに入つてゆく。

太陽はキラキラと輝いて澄み切つた空の中を雲が流れてゆくのが見える。と言つても高い高層マンションで空の大部分は見えなくなつていて。高層マンションは地上に長く巨大な影を照らし出し、隣の高層マンションを覆つていて。僕の視界が広く範囲ではそれが延々と繋がつていて。

公園はそれほど大きいものではないけど、ブランコや滑り台が置いてあって、公園を取り巻くようにして立つていてる木々が光を浴びてくつきりとした影を地面に投げかけていて。その中心では7・8人の男の子たちがサッカーをしている。まだ小学生の低学年あたりだろう。僕は公園の端っこに日陰の中にあるベンチに腰を下ろして男の子たちを眺める。太陽は時間を止めようかとするように力強く辺りに照りつけ、風がときどき砂を巻き上げて男の子たちを襲う。でも男の子たちはそんなことに全く気がつかないみたいにボールを必死に追いかけまわつていて。

僕はどこかでこんな光景を目にしたことがあるような気がする。でもそうゆう気がするだけでそれは僕の記憶ではないのかもしれない。

僕はヘッドフォンをして音楽を聴き始める。公園にいる人々はまるで僕なんか世界に存在していないという感じで子供と遊んだり、カップルがふざけあつたりしている。

そんな光景をぼんやり見ていると久しぶりに少し落ち着いた気分になることができる。車の中で目を覚ましてからとんとん拍子にい

ろんなことが起きて、落ち着いて考える時間がなかつたのだ。

僕は記憶をさかのぼって僕のことを、そしてこの世界のことをもう一度頭のなかで整理してみる。どうやら僕は本当に力エルであるらしい。自分で認めたわけでもないけど、それを認めないとここでは生き延びていけないだろう。少なくとも力エルであれば住むところもあるし、のたれ死ぬこともない。でも本当にそれでいいのだろうか？僕はどうするべきなのだろう？でもしばらく考えて力エルの今までいるしかないのだろうと思つ。このままこのわけのわからない世界に一人で放り出されても僕には生きてゆく自信がない。それに考えれば考えるほど僕はどんどんと混乱してゆく。

一体ここはどんな世界なのだろう？コンピューターのなかの世界といふのはどうゆうことなのだろう？僕の脳が巨大なコンピューターに繋がっていて操作されているのだろうか？それとも神が人間を創つたように、コンピューターが人間を作ったのだろうか？じゃあ一体誰がそのコンピューターを操作しているのだろう？それとも宇宙というものが僕の知らない間にそれだけ進化したということなのだろうか？とにかく僕がどこか別次元の世界にはまり込んでしまったことは確かだ。

こうして目の前にいる人々やこの公園や、町や、空や風、コトカやジエフ、そしてこの僕でさえも本当は存在しない世界にいるということなのだろうか？僕は自分の身体を擦つてみると、そこにはちゃんと生々しい感触がある。全くリアリティのないリアリティだ。僕にはどう考えてもわからない。まるで押尾 守の「イノセンス」みたいな世界だ。

太陽が沈んで街灯が灯り始めるまでずっと音楽を聴きながら昨日から繋がつていて自分の記憶といつものを辿つてみる。でも昨日のこ

とは思い出せてもその前のことはいくら考へてもわからない。それでも音楽はそんなことどうでもいいじゃないか、と僕の耳で囁き続けているようだ。

ボブ・マーリーが「エブリシング・ゴナ・ビー・オーライ」と僕の耳元で歌う。僕はそれに合わせて歌を口ずさむ。「エブリシング・ゴナ・ビー・オーライ」と。

とにかく僕が誰であるかうして太陽が昇り、沈み、風がそこを吹きぬけてゆく。僕は一日をなんとか生きてゆくしかないのだ。当たり前のことだけ、僕はそう思つ。とにかく買い物をして部屋に戻らなくてはいけない。後はなるよつになると思つしかどうやつても道はなさそうだ。くつきりとした飛行機雲が空を一つに翻るよう夕焼けのなかに浮かびあがつているのを見ながら僕はそつ思つ。

僕は100円均一のショッピングに行って部屋に必要なものを買ひにゆく。適当な消耗品なら100円均一で十分だ。

部屋に戻るとコトカはリビングの床でまた例のバカみたいな顔をして寝ている。どうしてここまでバカな顔をしているのだろうと僕は思つてしまつ。僕はコトカを起こさないようにしばらくコトカの顔を見ている。

一体ジョフは何の話をしていたのだろう?と思つ。どう考へても、世界が逆さまになつたとしてもコトカはブサイクだ、と改めて思う。もしかしたらジョフはデブで、ブサイクな女が好きなのかもしれない。人にはそれぞれ好みというものがある。

僕は突然買い物袋の中にマジック・マーカーが入つてゐることを思い出す。

「お、オレ様す「じ」と思いついたやつた」

僕は寝ているコトカにいたずら書きを始める。

「「Jつやあ、ほんとうに、豚じゃないか?」と小さく声でひとり言を言う。

僕はまず、筋肉マンみたいにコトカの額に「豚」と書き、忍者ハットリクンみたいに頬に丸を書き、首筋に「私は瘦せたい」と書く。僕はそのコトカのバカみたいな顔を見て、何度も、何度も笑う。これはだんだん楽しくなってきたな、と思う。そういうえば、買い物袋の中には買ってきたハサミがあることを思い出す。

「Jの髪の毛がまた気持ち悪いんだよな」

僕はコトカの顔を汚らしく隠している髪を切つてしまつ。

「どうだ? 実はオレ様はカリスマ美容師なんだ。早く人間になりたいよー」と僕は言う。

でもハツと気が付くと自分がとんでもないことをしていることに気が付く。僕はコトカをよく見てみる。そこにはさらにバカみたいなつたコトカが口を開けて顔にいたずら書きをされたまま眠つている。

もう一度笑つてしまいそうになるけど、これはよく考えてみるととんでもないことだ。でもコトカはまだバカみたいな顔をして眠つている。

「まあ、それ以上バカにはならねえだろ？なんなら罪滅ぼしにオレ様が何かプレゼントしてやるよ。これぞまさに豚に真珠つてやつだな。ガハハ」とまた笑う。

なんだかこの世界にいるのもなかなか悪くないような気がしてくる。

気が付くと僕は眠っている。僕はリビングではなく自分の部屋で眠っている。僕は昨日の夜自分の部屋に帰つて眠つたのだろうか？と記憶をさかのぼらせてみる。でも、そんなことはいいか、と思いつつ。とにかく自分の部屋にいるのだ。部屋のドアを激しくノックする音が聞こえる。

「カエル！カエル！」と聞いたことのない女の声がする。なんだよ？まだ眠いんだけどなあー、と思いつ。

「カエル！カエル！」

「なんだよ？オレ様はまだ寝てるんだ」

「カエル！カエル！つてば！」と僕の名前を呼ぶ声は止まらない。

しまつた！そういえば昨日の夜コトカにひどいことしちゃつたんだ、と記憶を思い出す。でも声はコトカの声じゃない。眠気を押さえ込み、立ち上がってドアを開く。そこには髪の短い人形のようないい女が立っている。天使のような微笑を浮かべる学校一のマドンナみたいだ。誰だ？と僕は思つ。コトカの友達か誰かだろうか？

「カエル！昨日の夜私の髪切つたでしょ？」と女は言つ。

「なんだ？セリヨリータ？君のような美しい人にオレ様がそんなことするわけないじゃないか」と僕は緊張してそう言つ。こんなにかわいい子と話すのは初めてなので何を言つていいのか自分でもわからなくなる。まるでグラビアアイドルの写真集から飛び出してきたみたいに女はとても美しい。

「カエル！何言つてんの？あなた私が寝てる間に私の髪切つたでしょ！なんてことしてくれるの！これは冗談じやすまないわよ！」

「ちょ、チョ、ちょっと待つてくれ。オレ様は確かに悪ふざけしてコトカの髪を切つてしまつた。それは悪かつた、とオレ様も反省している。でもコトカはどこに行つたんだ？まあ、あんな豚のことはどうでもいいか。それにしても朝から君のような美しい人に出会えるオレ様ってなんてラッキーなんだろう？もう人生の運をすべて使い切つたような気がする。いや、でもファンキー・モンキー・ベイビー、気にしないでくれ。君に会えたオレ様は全く後悔してない」

「カエル！何バカなこと言つてんの？私じゃない？私にはコトカって名前があるつて言つてるじゃないの？」と目の前の女の子が言つ。

「オーケー、コトカの友達、かわい子ちゃん、オレ様はすべてお見通しだ。君は頭がイカれてるんだね？でも大丈夫、オレ様が面倒みよう。これからオレ様と人生をやり直さないか？きっとうまくいくよ。とつあえず、あなたの美しい名前を教えてもらえないかな？」

「カエル！だから私の名前はコトカだつて言つてるじゃないの！」

「オーケー、朝から冗談はキツイぜ。一体どこのコト力ちゃんの話をしているんだ？あの豚が逆立ちしても、君のようなその真珠のような大きくて美しい瞳、そして真っ白で透き通るような若々しい肌、その神秘的なボディライン、そんなものはこの世界のどくだつて手に入らない。たとえここがどんな世界であろうと…………まさか、君が？コト力なのか？あのコト力？豚つてことか？」

「だからさっきからそういう言つてるじゃない」と女は言つ。「何言つてんの？それより話題を変えないでよね？私の髪切ったでしょ？昨日の夜？」

「だつて、声も全然違うじゃないか？眼鏡もかけてないし」と僕はびっくりしながらそつまづ。

「何言つてんの、私は私のままじゃない。変ないたずら書きは顔洗つたから残つてないけど、もう冗談でもこんなことは一度としないでよね！」

「おい、何言つてんだ、つていうのはこっちのセリフだぜ。君が、君のように美しい人がコト力なわけないじゃないか？」

「だから、私だつて言つてるじゃない？」と女は繰り返す。

「オイ、ちょっとこっちに来い」と僕は女の子と洗面所の鏡の前に行く。

「ほら、見てみる、君はバツグンの美人じゃないか？今一押しのアーティストじゃないか？どこからどうみてもかわいいじゃないか？君はコト力じゃないよね？」

「もう、だからコトカだつて言ってるじゃない。これが私よ」とコトカは鏡に指を刺してそう言つ。

僕は改めて自分がまだ夢を見ているのだろうか、と考え始める。これは一体、どうなっているんだ? このかわいい子がコトカだつて? どうなっているんだ? 昨日まではものすごく、ブサイクだったはずだ。それもその変のブサイクじやない、ものすごくおおおおおくブサイクだつたはずだ。どうなっているんだ?

「オイ、コトカ？」と僕は言つ。

何よ？

一才人  
二才人?

「だから、何よつて言つてるじゃないの？」

「オイ、コト力?????」

「だから、さつきから 一体何なのよ？」

「いい加減にしてよ、だから何！」

「オレ様は頭がイカレちまつたのか、嬉しいのか、恥ずかしいのか全然わからねえ。一体どうなつているんだ? 遺伝子組み換え手術でもしたのか?」

「そんなことは知らないわよ。それよりも私の髪の毛切つたでしょ！髪はね、女の命つていうじゃない。それぐらい大切なことなのよ。わかつてゐるの！」

「いや、オレ様はそれはものす」おおおおおおおおおおおおおく、似合つてゐると思つけど。つていうか、コトカはコトカじやなくて、コトカは、ものす」く、かわいい、コトカ、つて、すげえ、いい女だなあああああ、つて、一体、どうなつてゐるんだ？まさに、これは、オレ様は、わけがわからねえ、んだけど、コトカつて本当にかわいい、なあ、つて、違うんだよ、つていうか、コトカつて、一体何者なんだ？もしかしたら「ンジャ？クノイチ？」

「ねえ、カエル！ちょっとしつかりしてよ。何言つてゐるのか全然わからないじゃない？昨日どこに行つてたのよ？どこかで頭でも殴られたんじゃないの？」

「ああ、オレ様は、昨日は公園で、つて、あのコトカが、まさか、こんなにかわいい、つて、オレ様には、わけがわからんなくても、コトカはかわいいからどうでもいいじゃないか、つてそんなわけにはいかないぞ、つて、でもコトカ本当に可愛くなつたなあ。まるで別の惑星からやつてきたお姫様みたいじゃないか？」

「何言つてんの？バカいつてんじゃないわよ」といしながらもコトカは恥ずかしそうに顔を赤らめる。

「いや、でもあの豚が、つて、でも恥ずかしがるコトカも本当にかわいいなあ、つていうか、そのほうがもつと可愛いじゃないか？なんだ？そろそろベッドに行く時間じゃないか？そろそろ寝るか？」

「朝からバカ言つてんじゃないわよ！カエル、ちょっとまともに話を

しない？ 朝一はまだ起きてるの？」

「バカ言つてんじゃねーよ。オレ様が作るに決まつてるじゃないか！ まさか君のように美しい人にそんなことはさせられない。オレ様がコトカ姫においしい食事をご用意いたしましょ。つて、オレ様昨日とかおとといコトカにひどい」と言つたかもしけないけど、あれは全部冗談なんだ。許してくれるよね？ 昨日の夜も本当はそんなことしたかったわけじゃないんだ。悪魔が昨日やつてきてね、いや、実はあれはオレ様じやなくて、悪魔があの玄関のドアから入つてきてコトカ姫の美しい顔に落書きして、そのうえ髪まで切つていつたんだ。あいつはひどい奴だつた。あれは超一級の悪魔だつたんだ。オレ様はダメだ、と思つて戦おつと思つたんだが、悪魔に眠らされてしまった。あれは、だから……」

「もう、そんなことはいいから、とにかくこんなことは二度としないでよね。許してあげるのも、カエルが私の欲しいもの何でも買つてあげるつて言つたのを私のケータイが聞いていたからよ。そういうやなかつたら、もう、許さないからねー！」

「ああ、これはコトカ姫。もう何でも買つてください。姫にはやつぱりショッピングが似合つ。いい女がショッピングしてこるのは素晴らしいことだ。ジャンジヤン好きなものを買つてきてくれ」

「ホント？ ホントにいいの？」とコトカの顔が急に明るくなる。

「当たり前だぜ、なんでもいい。なんならコトカのためにショッピングセンターを貸しきつてもいいぐらいだ」

「キヤー、カエルつて、すうごーたまには男らしさ」というじゃない？」

「オレ様が？当つたり前だぜ、このファンキー・モンキー・ベイベー！オレ様もやるときにはバシッと決めるからな。オイ、センタリング左コーナーからな」と僕はサッカーボールを蹴る真似をする。「オウ、そう言えば忘れてたけど、今日の夜にオレ様の友達が遊びに来るんだ。ジェフっていうなんだけどさ、クラブで会つたいい奴なんだよ。外国人なんだけど、いいだろ？」

「えー？私つてあんまり英語上手く話せないの知つてるでしょ？それでもいいならいいけど・・・・・・・・、カエルが友達連れてくるつていうのも久しぶりだもんね」

「そうか、そしたらわざとく準備しなきやな。今日は一緒に買い物デーだな」

「なんか、ワクワクしちゃうね。ねえ、美容室も行つてもいいですよ？」

「もちろんだ、でもコトカが美容室なんか言つたらスーパー・モデルと間違えられるかもな。その辺のいかさまスカウトに捕まるんじやないか？」

「何バカなこと言つてんの、もつ」

それでもコトカは嬉しそうに笑う。僕もなんだか楽しくなつてきたような気がする。こんなにかわいい子と一緒に住んでるなんて僕はなんてラッキーなんだろう、と思つ。

「ねえ、そしたら買い物のカタログすぐにダウンロードしちゃおつか？それに朝ごはんはどこかに注文して持つてきてもうう~そのほ

うがすぐに買い物できるでしょ？」

「オウ、ヘイ、ヨウ、悪くないぜ、そのアイデア。なんだか急に仲良しになつたみたいだな、コトカ？」

「バカ！まだ許したわけじゃないからね。さつさとしてよ、支度」と言つとコトカはケータイを操作し始める。

「それじゃあねえ」とコトカはケータイの商品カタログを見ながら言つ。ケータイを操作するコトカを見ながら僕は本当にコトカがとびきりの美人であることを確認する。確かにジエフが言つたとおり十人中九人は美人だというようなタイプかもしれない。ケータイを操作している手もほつそりとして若々しく、まるで手のモデルのようだ。大きくて切れ長の瞳はどこか妖艶な魔性の女の輝きを放っている。小さな顔の輪郭からはちょっとアンバランスとも言えるぐらいの大きな口が特にセクシーだ。街角ですれ違つただけなのにずっとどこか記憶の片隅にインプットされてしまう、というぐらいの美人だ。

それにもあの人コトカが・・・・・・、どうやつたらこんな美人に変身できるのだろう、と改めて思う。それでも僕はなんだかものすごく自分はラッキーなのかもしれないと再び思い始める。力エルでいるのも悪くないかもしれない。

「えーと」とコトカはケータイを見ながら言つ。「あ、これ、まずルイ・ビトンのバックでしょ、それに、あ、このエルメスのバックも欲しかつたのよね、えーと、あとは、そうだ！カルティエの腕時計でしょ。うーん、ビトンはダミエにしようか、モノグラムにしよ

うか迷つといふよな

「オイ、コトカ? 何の話をしているんだ?」

「それとねー、うーん、何でも買つてくれるって言つたわよね? 言つたわよね? そうよね? 言つたからにはじょうがないわよね。ねえ? そう、思つでしょ? えーとね、私は、そうだ! エルメスはドカーヌとパークのバックを買つことにして、あ、そういうえば前から欲しかつたグッチの新作があるのよね、でも思い切つてワニ革の鞄なんて買つちゃおうかしら? 私つて鞄が好きなのよねー。あ、そうだ! シャネルの財布はどれがいいと思つ?」

「ちょっと、待つてくれ、そういうえばオレ様は金を持つてるのか? 貯金とかはあるのか? 何を言つてるとか全然わからんねーよ。ちょっと真面目に話をしようじやないか?」

「そんなのビうでもないじゃない。カエルが何でも買つてくれるって言つたんじやない? そうでしょ? 言つたことはちやんと約束を守るのが男つてものじやないの? ちょっと、何? 今まで散々人を豚呼ばわりして? このぐらいなんてことないでしょ? そうそう、私前からこの部屋が気に入らないなーと思つてたのよね。ビう、ニューホームでなんて? みんなが羨むようなすごい家に住むの。高級車を乗り回して、南の島でバケーション。ビーチで日光浴して、身体の隅々まで光を吸い込むの。ビうへ、そういうの?」

「オイ、オレ様は庶民だぜ? そんな金あるわけないだろ? それに『強い光を求める者は濃い影を残す』って言つじやないか? そんな不吉な影は見たくない」

「言つておくれどね、ビうして私はかりにいつも我慢しなく

「ちやいけないの？」「んなとおぐりいじやない？なんでも買ってくれるんでしょ？」

「と、とにかく、だ。ちょっと落ち着いて話をしようつじやないか？」

「私は落ち着いてるって言つてるじゃないのーなによー人のこと豚、なんて言つて。オレ様なんて偉ぶつちやつて。お金なんかどうにでもなるでしょ？」

「悪かった、このとおりオレが悪ハジヤいました。どうかこの辺でご勘弁してください、「コトカ様」と僕は頭を下げる。

「何よ！冗談じゃないわよ。バカ！あなたつてどうしてそんなにバカなの？」

「じゃあ、どうしてオレと一緒にいるんだ？今まで聞くの忘れてたけど、どうして俺たちは一緒に住んでいるんだ？」

「私たち結婚してるからでしょ」

「え？」

「なによ、そんなバカみたいに驚いた顔して」

「え？」

「え？じゃないわよ、私たちは夫婦なの」

「ええええええええええ？え？オレたちが夫婦？ってことは、オレは結婚しているってことか？「コトカと？」

「他に誰がいるのよ」

「いや、コトカはかわいいからいいけど……でも……オレが結婚……っていうのはちょっとまだ心の準備が……ええええ？」

「もう、これ見ればわかるでしょ」

コトカはコトカのケータイを差し出してコトカのパスポートを僕に見せる。

名前 石川 琴歌

住所 0号室

血族 半日本人

「おい、オレ様には、いや、オレには相変わらず全くわけがわからんねーぞ。素人が撮ったエロビデオみたいに局部アップばっかりで何がなんだか全然わかんねー。オイ、カメラもつと引けよこのヤロウ！つて感じだぜ」

「あのねえ、いい加減にそんなこと言つの辞めてくれる。私まで頭がおかしくなつてくるわ」

「あのさあ、こっちこそいい加減にオレ達がどうゆう状況なのか教えてくれてもいいだろ。もう驚くのには疲れてきたんだ。オレは一体誰で、ここはどうゆう世界なんだ?ここがコンピューターのなかつていうのはクラブで知り合った友達に聞いたよ。まだよくわからんねーけどさ。それにしてもオレはこの世界で何をしているんだろう?ここはオレが今まで住んでいた世界なんだろうか?」

僕がそういうとコトカはしばらく黙つて最後に大きなため息をつく。

「ねえ、カエル。あなたが大変なのはよくわかるけど、私だって大変なのよ。あなたが記憶を無くすたびに私は『これは一体どうなつているんだ?』とか『おまえは誰なんだ?』とか聞かれるのよ。それも一回や一回じゃないのよ。何回もなのよ。そういう私の気持ちだつて少しは考えて欲しいわ」

「それは申し訳ないと思つよ。オレだって記憶がしつかりしてたらもつとまともなことが言えるかもしれない。でも自分が誰なのかわからぬんだから、それはしょうがないだろ?」

「言つておくけどねえ、カエル、あなたが記憶喪失になるのはこの世界だけの問題じゃないんじゃない?それはあなたが抱えている問題じゃないの?結局あなたは誰にもなりたくないんじゃない?自己否定を繰り返しているだけじゃないの?」

「ちょ、ちょっと待つてくれ。朝からそういう問題はかなりヘビーだ。朝起きていきなり時間制限の焼肉食つようなもんだ。とにかくオレ達は夫婦なんだよな?とりあえずわかりやすいところから話を始めよ?うじやないか?コトカはコトカで、オレはカエルだろ?」

「わ、あなたは私の夫でバカなカエルなの」

「でも一般的に言つてどうしてコトカみたいな女がオレみたい  
なバカと夫婦なんだろ？」「どうしてオレと結婚なんかしたんだ？」

「そんなこと知らないわよ。あなたはものすごくバカなんだけど…  
・・・・・ものすごくいい人つて言つたか・・・・・・実はしつかりと  
しているつていうか・・・・・・特別な才能があるつていうか・  
・・・・・それこそがカエルが抱える矛盾なんじやないの？」

「なんだ？オレは矛盾してるのか？だつたらこの世界こそ矛盾して  
るんじゃないのか？だいたいコンピューターの中にどうやって人間  
が暮らすんだ？観念の逆転つてなんだ？」

「わ、そんなこと言い始めたときりがないでしょ？とにかく」  
はそういうことなんだからしようがないじゃない。そんなこと言つ  
てこる場合じゃないのよ。私たちは仕事して、生きてゆくためのお  
金を稼いで、暮らしていかなくちゃいけないのよ」

「だからね、ううう難しこ」と話しえてもしようがないじゃないか  
？話がどんどん難しくなつてこくだけだ。オレは金を持つているの  
か？仕事はなんだ？オレはコトカとこんなふうに言い争いをしたい  
わけじゃないんだ。もっと平和的に問題を解決しようじゃないか？  
オレはもつと、なんていうか、まともに話がしたいんだ」

「う言つてもコトカは黙つている。どうしていつも言い争いにな  
つてしまつんだろ？」

「確かにオレが悪いのかもしれない。」うなつてしまつたのはオレ  
が記憶をなくしてしまつたからかもしれない。でもオレだって…

・・なんていうか、まともに暮らしたいと思つし、結婚しているんだつたらコトカを幸せにしたい・・・・・つていうのは大げさかもしれないけど、とにかくオレは記憶を取り戻すことが先決なのかもしない。オレはどうがんばってみてもバカなカエルでしかないかもしない。それでもなんとかこの世界でがんばってみようと思つし・・・・・・・・・オレはオレなりにがんばってみるよ。としか言ひようがないじゃないか？

どうして話が次々ととんでもないことになるのだろうと思つ。朝起きるとコトカがとんでもない美人になつていて、それに僕とコトカは結婚しているらしい。それは記憶がないからかもしぬないけど、この世界は本当にどうなつてているのだろう？僕が知つてているリアリティとは全く違う。ちょっとともになつてきたと思つてほつとするとすぐにとんでもないことが起つる。

「とにかくなあ、コトカ」と僕は言つ。「もうオレはこのびつくり玉手箱みたいな世界にはうんざりだ。とにかくわかりやすいところから話を始めよう。オレは金を持つていてるのか？それに職業はなんだ？もつと現実的に話をしよう」

「ちょっと、すぐにそやつて話を変えるでしょ？カエルはなんでも買つてくれるつて言つたわよね。じゃあ、そこから話をしましょうよ」とコトカは少し怒つた顔になる。確かに美人は得かもしぬない。ブサイクがどんなに怒つてもなんとも思わないけど、美人が怒るとなんだか説得力がある。そついえば買い物の話をしていたのだ。

「それでもなあ、コトカ、とにかくオレは金を持っているのか、と、聞いているんだ。オレの仕事はなんだ？それにオレは一体、」

「いい加減にしてよ、カエル！」と突然コトカは大きな声を出す。

「あなたつていつもそういうじゃない。何度も言つてもわからないのね！だから話を変えないで、つて言つてるでしょー！」

「わかった、悪かった」と僕は謝る。

なんともいえない沈黙が部屋のなかに流れている。窓の外からは強い風の音が部屋のなかに忍び込んでいる。それはまるで一つの世界を引き裂く木霊のようにうつろに僕の耳に届いてくる。

コトカはケータイの横に置いてあるタバコをとつて火を点ける。僕は黙つてコトカがタバコを吸うのを見ている。

「わかったわ」としばらくしてコトカが言つ。「とにかくカエルが誰のかつていう話をしましょ。そうしないと話が進まないもんね」

それを聞いて僕は少しほととする。コトカが美人になつたのはいいけど、僕の立場がずいぶんと弱くなつたような気がする。

「あなたは私の夫のカエルでしょ？」こまではいいわよね

僕は頷く。とにかくこじはじつと黙つて話を聞かなくてはいけない。

「お金のことは・・・」

「実はオレは大富豪の息子でジャンジャン金持つてるんだろ？それで金に目がくらんでコトカはオレと結婚してしまつた、っていう筋書きだ。どうだ？ そだろ？」

「バカ！あなたって話を聞く気があるの？」

「『』めん、ちやんと聞くよ」と僕は言いつ。

「こきなり深刻な話しへなるかもしけないけど、実は私たちは借金しているのよ」

「バカやうう！そんなわけねえだろおお！オレは大富豪の息子なんかで札束で人の顔をひっぱたいて暮らしているぐらいじやなきやいけないんだ。そういう設定に変えられないのか？オイ、ケータイ君？」

「バカ、カエル、ちやんと話を聞きなさいよ。でも私たちはそんなに不幸じやないのよ。むしろ幸せなほうなんだから。私たちは借錢していく、あなたは仕事もしていないんだけど・・・」

「ちょっと、待てよ、このヤロウ！そんなわけねえだろおおおおおおおおおおお！オレが仕事してない？」

「『』のヤロウって何よ？その口の利き方？」

「『』めん、そつぬう意味じやないんだ」

「ちやんと話を最後まで聞きなさいよ。あなたは要するに主夫なの。私が仕事をしていくあなたが家事を担当しているってこと。それで、実はね、ここからがすごいところなんだけどね「そう言つてコトカラはにんまりと笑う。とても嬉しそうな含み笑いだ。僕はなんだか嫌な予感がする。

「実はあなたは小説家の卵なの。あなたはいつの日かテレビでデビューする

ためにずっと小説を書いていたのよ。それを私が支えていたの。バカなカエルでもすごい夢を持つてるのよね。そうゆうところに私は引かれたんだから」 そう言ってコトカはまた嬉しそうに笑う。

「ちょ、ちょ、何度も言つようだけど、ちょっと待てよ。それはないぜ。オレが小説なんか書けるわけないじゃないか？それにオレは全然小説家になんかなりたくないぞ。そんな職業は最悪だ。はつきり言つてそんなひどい仕事はないよ。オレは小説家にはなりたくない」

「あなた自分が何言つてるのかわかつてるの？」 さっきまで笑つていたコトカが急にブチ切れたみたいな顔になる。目を大きく見開き、鼻の穴が少し広がり、声が高く、そして大きくなる。

「あなたね、カエル。あなたが私のことを豚呼ばわりしても、記憶をなくしても、それでもあなたに耐えてきたのはあなたがずっと小説を書いてきたからなのよ。それが私の望みなの。あなたは小説を書かなくてはいけないのよ。あなたには才能があるのよ」

「そんなんあるわけないじゃん」と僕は答える。「いきなりお前は今日から陶芸家だと画家だとが言われてもできるわけないだろ？オレは音楽が好きだからミューージシャンだつたら考えてもいいけど、小説なんか書けないよ」

「あなたね、私がどんなに支えてきたと思つてるの？このクソ、カエル、ファックヤロウ、マザーファックカー！」

「ちょ、待てよ」

「コトカはタバコを吸い込んで煙を吐き出しながら言つ。「このサ

ン・オブ・ア・ビッチ！マザー・ファッカー！私は力エルの小説のためにすべてを捧げてきたのよ。すべてよ。すべて。あらゆるものを持げてきたのよ、犠牲にしてきたのよ。それがどんなに大変だったかわかる？それが私の心の支えだったのよ！そのために私はこんな借金生活までしてるので。それでもあなたが小説を書いていたからずつと我慢してきたのよ。それを今更辞めたなんて言わせないわよ。もう離婚よ！そんなのあんまりじやない！」コトカがそう言つと左側の田から一滴の涙が頬を伝つて落ちてくる。

窓から吹き込んでくる風はさらに勢いをましてヒュオオオオオオオオーというなりをあげて僕の耳に届く。改めて一体僕は何者なんだろ？と思う。僕はコトカを傷つけたいわけじやない。もつともに話がしたいと思う。でも僕がまともにならうと思つても話はどんどんまとじやなくなつてゆく。シンプルな人生を求めれば求めるほど人生は逆にどんどん複雑になつてゆく。

とにかく僕が小説なんか書けるわけがない、と思つ。いくらコトカが涙を流しても、いくら申し訳ないと思つてコトカの気持ちに応えたいと思っても、できぬものはできない。

「とにかく今までの話を整理すると」と泣いているコトカに声。 「オレは家について主夫をしていたわけだよね？それで、うん、よくわからないけど、小説を書いていて、コトカは仕事に行ってお金稼いでいた、ってことでいいのかな？」

そう言つてもコトカは返事をしない。

「なんだか申し訳ないけど、オレだって急にこんなへんてコな世界にきて、次々にとんでもないことが起こって、それで急に小説を書けなんて言われてもできないよ。それはコトカには申し訳ないと

思つよ、ほんとに。もしかしたらオレには「トカがいつよつに才能があつたのかもしね。でもね、オレは小説なんか書けないし、書く気もしないし、どうやつて書いたらいいのかもわからん。今回のかエル君は今までのかエル君とはちよつと違うんじやないかな？」

「バカ、あなたは小説を書くのよ・・・・・・・・・」とコトカラは泣き声で言う。「あなたはとても美しい文章を書けるのよ。素晴らしい作品を書けるのよ。カエルがケータイを初期化しちゃったから作品は残つていなければ、あなたには才能があるのよ。いつの日か成功して『コト力を幸せにしてやるつて言つたじやない?』『コト力はタバコを消すと、床にうつ伏せになつて息を詰まらせるようにして泣く。』

「・・・・・悪いけど、それは無理だよ。今回のカエル君はまったく別のカエル君なんだ、ということはどうだらう？ そうだ！ 今回は才能のないバカなカエル君というのはどうだ？ 現実的でまともなカエル君。だいたい小説家なんてまともな奴じゃないよ。陰気くさいし、気難しそうだし、偉そだしさ。最悪だよ。ミューージシャンでいいじゃないか。うん、今回のカエル君はギタリストだ。これから趣味程度でギターを始めよう。そのへんでお互い妥協しようじゃないか？ オレも仕事を探してまともに働くし、ふたりで働けばすぐに借金なんか返せるよ」

「一億。一億よ、借金。そんなのどうせひっつて払ひたまえ。」

「イチオク？ 1億つてなんだ？ オレみたいなバカがどうやってそんなに借金を作るんだ？ 銀行も貸してくれないだろ？」

「私の死んだ両親の借金なの。正確には私の借金なんだけど、それ

でもいいからって結婚したんじゃない・・・・・・もう話すのも疲れたわ。部屋に行って休むから」コトカは起き上がりてコトカの部屋に入つてゆく。

「カエル様、カエル様」とケータイが僕に話しかけてくる。

「どうした? 今それどうじゃないんだけ?」

「さきほどコトカ様がご注文された品はこつりのお持ちいたしますか? わずかコトカ様! お皿が高いですね? どれもこい品ばかりです」

「悪いけど、全部キャンセルしてくれ」と僕は言つ。

「申し訳ございませんが、カエル様。すでに商品は発注済みですで・・・・・・今更キャンセルというのは・・・・違約金などが発生してしまいます。かなり高額な商品ばかりですのでキャンセル料も安くはないかもしれませんよ」

「とにかくキャンセルだ。人の話勝手に盗み聞きしやがって、勝手に注文してんじゃねーーー」のクソやうつ

「カエル様、それは穩やかではありますね。私どもはできる限りの誠意を持つてお客様に喜んでいただき」と、

「ふざけんじゃねえ、とにかくキャンセルだ」

「カエル様、ご忠告しておきますが我々もこつまでも下手に出ているわけではありませんよ。仮の顔も三度まで、くれぐれも口の聞け方にはお気をつけてくださいませ」

「おー、なんだよそれ？なめてんじゃねえぞー。」

「おめえこそなめてんじゃあねえぞ、このヤロウ！？金返さんかい！日本刀食わせたろ？」「とやくざみたいな声が聞こえてくる。僕はあわててケータイの電源を切る。

「どうしてこいつなるんだ？一体僕が何をしたと言つんだ？どうしてこいつどんどんとわけのわからぬい話が出てくるんだ？僕は前世でものすごく悪いことをしたのだろうか？何もかもがまともじやない。まともに考えても僕には想像もできないような世界だ。借金1億だつて？それがどのくらいのお金なのか僕の頭ではわからない。1000万ぐらいまでならなんとか想像できるけど、1億といつのは文学的数字のよつに思える。

そこに追い討ちをかけるようにメールが届く。メールはジェフからだ。

「今夜は楽しみにしておるよ。間違いなく8時に向つから（^—^）」とある。

僕はジエフと楽しく酒を飲む気分ではないことに気が付くけど、それはもうどうしようもない。僕が誘ったわけだし、ジェフも楽しみにしてこるみたいだ。

僕は大きくため息をつくと洗面所に行つて水を飲む。コトカガリビングに置いていったタバコを吸いたいような気分になつてくるけどひとまず我慢することにする。

「これは呪われた人生なのだろうか？僕が一体何をしたというのだろう？僕は何か間違いを犯しただろうか？僕は何かを選んだわけじ

やない。僕をとつまくこの世界は向こうから勝手にやつて来て、僕を飲み込んでしまったのだ。僕は車の中で目を覚ました僕に戻りたいような気がしてくる。あそこにならまだ僕の選べる選択肢というのがあつたかもしれない。そのまま逆を向いて別の場所に行くとか、砂漠の方に向かうとか、もしくは海に飛び込んでしまうとか・・・。今では窓の外には海も見えなくなつていて。向かい側のマンションのドアが見えるだけだ。まるで世界の果てみたいな風景だ。

僕の人生はこれからどうなつてしまつのだろ。でもまさかこれ以上ひどいことにほんならないだろ。仕事もしてないうえに結婚していく、おまけに借金まである。それ以上なにかひどい状況があるだろかと考えてみよつたけど無理だつた。今ですらすでに想像を超えた状況なのだ。それに僕が小説を書いてるなんて・・・自慢じゃないけど漢字さえまともに書けないような僕にどうやつて小説が書けるのだろ。まるでギターのチューニングができるギタリストみたいじゃないか。

とにかく今夜はお客さんが来るのだ。こんな殺風景な部屋のまま招待するわけにはいかない。最低限の家具と、それに料理を準備しなくてはいけない。

窓の外ではまだ冷たい風がうなりをあげて世界を飛び回つてゐる。あの風はどこから来て、そしてどこへ飛んでゆくのだろ。僕の耳はその音の行方を聞き取ることができない。世界は限定され、僕はいつの間にか世界の端っこに飛ばされてしまつてゐる。ここで僕の耳に木霊するのは僅かな遠い稻妻の音だけだ。それでも僕は音楽を聴こえと思つ。僕はケータイを拾い上げ、曲を選ぶ。

そしてまたボブ・マーリーが歌う。

「Hブリシング・ゴナ・ビー・オーライ」と。

しばらくしてコトカが部屋から出でてくる。そしてよつやくいろんな細かい話を聞くことができる。コトカはまだ落ち込んでいたいだつたけど、ゆっくりと記憶を撫でるように僕に話してくれる。コトカはわりといい血筋の家に生まれ大事に育てられて、世間一般から見れば良い暮らしをしていた。両親はヨーロッパ人と日本人の血族だつた。でも事業に失敗した両親はコトカを残して自殺してしまい、借金だけが残されたコトカはしようがなく「ブラック・サン」を購入し、この世界にやつてきた。でもなぜだかわからないけど、コトカの住む世界は購入後も全く変わらなかつたらしい。本当にコンピューターの中に住んでいるのかその区別ができなかつた。

「救いを求めて『ブラック・サン』を買つたけど何にも変わらなかつたわ」とコトカは言つ。コトカに残された借金もそのままだつた。

でもそれから間もなくコトカは僕と知り合つ。他にも金持ちの友達や、そしてコトカのことを気に入ってくれる金持ちのボーイフレンドもいたらしいけど（まあ、コトカぐらいの美人ならそうだろうなと僕は思った）結局はすべてを捨てて僕と結婚することになった。

それまでコトカのことを気にかけていた男たちは結婚と同時に周りからいなくなつて、まさに僕とコトカはこの世界に一人きりで残された、というわけだ。そしておそらくコトカが金持ちのボーイフレンドを選んでいれば悩むことのなかつた両親の残した借金が僕とコトカの前に大きく立ちはだかつたというわけだ。

それにコトカにとつて僕と知り合つてこうゆう生活を始めるまで金銭感覚というものは別次元にあつた。わかりやすく言うと一般的ではなかつたわけだ。1億というお金が普通に暮らしている人々にとつてどれくらいのお金なのかをコトカは自分で働いてお金を稼いでくるまでわからなかつた。欲しいものは何でも買ってもらえたし、あつちのスーパーマーケットのほうが安いから遠くても安いほうのスーパー・マーケットに行くという感覚がわからなかつた。安いということに一体どんな意味があるのか、それすらも考えたことがなかつた。

そうゆう暮らしのなかで僕はコトカにとつて全く新しく、そして今まで出会つたことのなかつたタイプの人間であつたらしい。それまでのコトカにとつて貧しさというのは単なる劣等感だつた。貧しさといふものは生きる上においてただのマイナス要素であり、できればそんなものに関わりたくないと思っていた。それは誰でもそうだろうけど、コトカの場合元々貧しさからは無縁の世界にいたわけだからそのショックは強かつたのかもしれない。

でもコトカから言わせればそういうものを跳ね除けて僕は人生を楽しんで生きているように見えた。要するに知らない世界に生きる人に興味を持つたというだけなのかもしれない。全く自分からかけ離れたところで暮らす人、貧しさという中で何とか生きていこうとする泥臭さ、別の匂いということなのかもしれない。それでも僕は小説家になるという夢を抱き、懸命にこのどうしようもない世の

中を生き延びていた。コトカはそれに共感し、それから僕を支えるために墮天使となつて僕のところに舞い降りてきた、というわけだ。

「コトカの話を聞きながら僕は一体どう人間なのだろうと考えていた。世の中のことを何も知らないイノセントな女の子がバカな男に捕まってしまうというのはよくある話なのかもしないけど、僕はそれほど非現実的な人間ではない、と自分で思う。僕はふつうに生きたいのだ。小説家になるなんて下らない夢を追いかけていても、そんなものなおさら人生に失望するだけじゃないか。それに僕は小説家になるつもりは全くない。コトカみたいな美人のお嫁さんをもらうのは有り難いことだと思うけどそれとこれとは話が別だ。もつと現実的に物事を考えなくてはいけない。

「コトカは僕が小説を書くことを支えながらなんとか昔のコネで紹介してもらつた絵本を作る会社に勤めているのことだ。もちろんコトカには絵本を作る才能があるわけではなく事務的なことを担当している。

「それでもさ」と僕はコトカに聞く。「とにかくオレが借金をしているわけじゃないんだよね?」

「やうよ」とコトカは答える。まだ泣いたためか少し目が腫れている。

「それならオレは自由なわけだよね? たとえばオレがコトカと別れたら借金に負われる」ともなつてことだ。オレは自由の身なんだろ?」

「やうよ」となるわね。でも……

「別にコトカと別れようつてわけじゃないよ。一応確認つてことだ、ベイビー。暗い顔してもしようがないだろ？それよりも今夜ジェフつていうオレの友達が遊びに来るんだよ。下らない人生でもとにかく楽しもうじやないか。大丈夫なんとかなるよ、ノープロブレムだ」と僕は言つ。そう言いながらも実は全然大丈夫だとは思つていない。

「そうね、いつまでも暗いことばかり考えていてもしようがないもんね。とにかくこの部屋なんとかしなくちゃね」

「オーケー、ベイビー。ゆつやくHンジンがかかつてきただみたいだな。こうなつたらオレはもう止まらないぜ。ドント・ストップ・ミー・ナウ。クイーンでも聴いちゃうか？」

「もう、相変わらずカエルはカエルよね」

「とにかくもつとましな部屋にしよう。そうだ！畳を部屋中に敷き詰めようぜ。それにちやぶ台だな。着物も着ないとな。当たり前だけど部屋のなかは土足厳禁だからな。オレは死ぬときは畳の上で死にたい」

「何時代の話してるの？もう日本の製品なんて作つてないからすつゞく高いのよ。日本の文化は滅んじつたの」

それから僕はケータイを操作して家具や料理品、その他生活必需品を注文する。注文確認の決定ボタンをクリックするとすぐに部屋に家具が現れ少しばかり部屋らしくなる。もちろん日本の家具なんて高いものは買えなかつた。最低限の必要品だけだ。それから料理に必要な調味料、食材も注文した。あつという間にそれらが冷蔵庫の中に入つてゐる。物質はデジタルに還元され、世界に現れる。

8時ちょうどにジョフが部屋にやつてくる。僕はスシを作つてジエフをもてなす。なんと言つても外国人にはスシを食べさせておけば間違ないとどこかで聞いたことがある。ジョフは上機嫌で、いつものようにビールを何杯も飲み、コトカのことをアジアの妖精のようだと褒めちぎる。ゲイシャの奥さんがいるなんてカエル君がうらやましいと何度も繰り返す。

ジョフはそれからなぜ自分がこの世界にやつてきたのかといつこと話を始める。

ジョフは昔船乗りをしていた、とジョフは語り始めた。そう言われるどジョフには長い間海と関わってきたサーファーのような雰囲気があることに気が付く。

ジョフは大きな船で何家族が一緒に暮らす遠洋漁業をやつていた。子供たちや仲間に囲まれ彼は貧しくても幸せな日々を送つていた。まるでノアの箱舟のようにそこには彼の愛するべきもののすべてがあつた。仲間の下らない冗談に、妻や子供の幸せな微笑み。それは彼が守るべきものであり、つらい人生送りながらもなんとか手にした小さな楽園のような場所だった。

そこにある静かな夜に嵐がやつてきた。でもそれは嵐という形をした何か別なものだった。彼らはプロの船乗りであり、嵐が来るときにはそれなりの準備というもののする。嵐がやつてくる前には空気ががらりと変わる。まるでマイルス・デイビスがゆっくりとトランペットに魂を吹き込む時のように空間の雰囲気が別次元へと飛ばされる。彼らは経験的にその匂いを感じ取り、嵐に備える。

でもその夜は誰一人として嵐が来るとは予測できなかつた。星たちは水平線の中心にいる彼らを照らし出すかのように空に輝いていた。

そしてジョフは嫌な夢を見た。悪夢から覚め、船のデッキに行つてみると船は空を飛んでいた。ジョフは空を飛んでいるわけではなく、大きな波が船を押し上げていたことに気が付き、眠つている仲間を大急ぎで起こした。やがて爆発音のようなものが聞こえてきて、ジョフは妻と子供の手を握り救命ボートに飛び乗つた。しかし目が覚めてみるとジョフは水平線しか見えない海の真ん中に救命ボートに乗つて一人で浮かんでいた。見上げると憎らしいほど太陽が輝いていた。それから一人だけ助かつたジョフは「ブラック・サン」を購入しこちら側の世界にやってきた。

じつくりと聞くとそれは興味深そうな話だつた。僕はジョフができるだけ心を開いて僕とコト力に接してくれていることがわかつた。朗らかな笑顔、そして打ち解けた会話。ジョフの話は相当長いものだつた。

でも僕は全然ジョフの話が耳に入らなかつた。延々とジョフが話し続ける隣で僕はずつとこれからどうすればいいのだろうと考え続けていた。ジョフの話はまるでオルゴールのように記憶のどこかをさ迷つてゆつくりと消えていつただけだつた。一体これからどうなるのだろう? 僕は誰で、どうしてこんなところにいるのだろう?

ジョフは帰り際に今日はどこか具合でも悪いのかと僕に聞いた。僕はなんでもないと答えた。ジョフは「井戸の中の蛙大海を知らず、されど蛙は空の高さを知つている」と言い残していく。

それからの日々はこれといった変化はなく過ぎてゆく。まるで読みかけている本にしおりを挟んだように僕の中の時間が一時的にそこで止まってしまう。昼間コトカが仕事に行っている間、僕は部屋にいて音楽を聞き部屋の掃除、洗濯、料理をし、気が向くと散歩に行つて、夜になるとクラブについてビールを飲む。果てしないその繰り返しだ。とにかく僕はこの世界のことをじっくりと考える時間が必要だと思った。ゆっくりとこの世界に自分を慣らし、そして一体何をするべきなのかといつことを。

クラブに行くといろいろな人と出会つことができた。さまざまな職業、人種、そして個性。僕は人々が語る世界に耳を傾け、そして少しずつ世界のことを学んでいった。でもやっぱりここがコンピューターの中の世界であるということにはいつまで経つても納得できなかつた。そして僕が知りえた範囲では、この世界の人はそんなことは特に気に留めていないみたいだつた。テレビを見て、酒を飲んで、これといった問題を抱えず、何事もなく日々が過ぎてゆけば世界は回つているのだと信じているみたいだつた。

何度もコトカにも一緒にクラブに行かないかと誘つてみたけど「下らない男に声をかけられるから」と言つて断つた。どうやらコトカはクラブに行くのが好きじゃないみたいだ。僕は借金している上にろくに仕事もしていないのでコトカに引け目を感じていたけど、コトカと話し合つといつも口論になつてしまつた。だんだんと僕はコトカと顔を合わせるのが嫌になり、僕は夜遅くまでクラブについて時間帯をずらすよつになつていつた。僕はやらなくてはいけないこ

と、それははつきりとわかつていた。僕は働いて、借金を返さなくてはいけない。でも一体どんな仕事をすればいいのか、僕にはさっぱり検討もつかなかつた。僕は目の前に突きつけられたものからずつと目を背け続けていた。それが何ヶ月か続いた後、ある日の夜僕は一人の男と出会うことになる。

いつものようにクラブのカウンターでビールを飲んでいると「ハロー」と隣の男が僕に話しかけてくる。

クラブの中の音楽はエイペックス・ツインの「ウイー・アー・ザ・ミュージックメーカー」がかかっている。

男がカウンターのところに来てケータイを注文する機械にピッと掲げるとボーイが赤ワインを運んでくる。

「ハロー」と男はもう一度僕に話かけてくる。

その男をみた途端に僕はこの男は日本人ではないかと思う。見るとからにアジア人だし、そうゆう雰囲気がする。男は黒い髪を整髪料でしつかりと固め、痩せた体にあつたぴつたりとしたスーツを着ている。何かスポーツでもしているみたいで頬はげつそりとして目つきは鋭く、顔つきはさつぱりとしている。アクセサリーは見るからに高価そうな時計を腕にひとつだけ付けている。

「アー・ユー・ジャパーナーズ?」と僕は英語で言つ。

「そう見えるかい?まあ、そう見えてもしょうがないかもしね。私の祖先は中国人だからね。おそらく似ているところはたくさんある

るかもしない」

男はそう言うとワインを口元に運ぶ。男はそうとう金持ちなのか。ワイングラスもクリスタル製のピカピカに磨かれたものだ。僕がいつも飲んでいる汚いグラスに入ったビールではない。

「ヨー、オレまだここに来てから日本人に会ったことないんだよね。どこかで見かけなかつた？」

「日本人？君はあの日本人の血族か？てつくり中国人かと思つたよ。まあ、このところ全く見かけないね、日本人は」日本人？と言つたときには男はとても驚いた表情をする。

「オレ、オレ以外の日本人探しているんだけどまだ会つたことないんだよね」

「日本人はほとんど滅んじやつたからね。我々中国の経済的勢いに勝てなかつたし、日本はどんどんと尻すぼみになつちやつたから」

「なに？それ？オレ聞いたことないよ」と僕は言つ。

「なんだ？そんなことも知らないのか？ちょっと図書館でもいつて歴史を調べてみたほうがいいんじゃないか？」

「なんだ、ヨウ？教えてくれてもいいじゃん？おじさん暇なんだろ？それにここだけの話だけどオレって人から歴史の話を聞かないと生きていられないっていう複雑な病気をかかえているんだ。おじさん、そういうのって大変だと思わない？」

「おじさんとはなんだ！オジサンとは。私はまだオジサンではない

「！」と男は叫ぶ。

「へえー、見かけよりも若く見えるね、あんまり人生苦労してないんじやない？」

男はすぐに答えず、ジャケットの内ポケットから煙草とライターを取り出すと火を点けて一呼吸おいた。そのへんの女の子なら「かっこいい」と思うような場面かもしれない。男には「金持ち」というようなオーラが漂っている。

「それよりも私の名前はチャンと言つんだ。とりあえず、この珍しい出会いに」と言つてチャンはワイングラスを僕のほうに差し出す。僕は自分のビールのグラスで乾杯すると二つのグラスがぶつかつた「チーン」という心地よいクリスタルの音がチャンのグラスから聞こえる。

「失礼だけど、私はあまり時間がないんだ。歴史の話は自分で図書館でも言つて調べてきたりどうだい？そのほうが自分でいろいろと考えることができるだろ？本を読む、という習慣にもなるし。そうそう、習慣といえば日本と中国には共通した習慣がたくさんある。そういうのを調べてみるのもおもしろいだろ？良かつたら私のケータイが使つてている図書館のガイドブック機能をあげよう。それでいいだろ？私は次のアポイントメントがあるんだ」

「めんどくさい」と、オレつて大、だい、ダイ、大嫌いなんだあああ。少しがらじ教えてくれてもいいだろ？おじさん？」と僕は言つ。

「君がそこまで言つたのならしおりがない。次の予定を多少変更するぐらいのことはできる。それぐらいできないとビジネスマンは務ま

らない。それならあっちのボックスの席に座らないか？もちろん特別料金は私が払うよ。それにとりあえずおじさんはやめてくれ

「イース、オレって、けっこつ、ラッキーなんだよね、こうゆうことに関しては、チャンだつたよね」と僕は言つ。

チャンに連れられてクラブの奥のひな壇のよつになつたボックス席の一一番上ある豪華なソファに移動する。僕にはよくわからないけどそのソファはとても高級そうで座ると身体の力がふんわりと抜けるようになんと僕を包み込む。目の前にあるテーブルも一枚板のどつしりした歴史のあるテーブルのように見える。それにテーブルに運ばれた高そうなウイスキーとワイン。僕とチャンがソファに座るとウイスキーを持ってきたテレビに出てきてもおかしくないぐらいモデルのような美人一人がサッと僕とチャンの間に入つて座る。一人は長い髪のブロンドのレースクイーンみたいな女の子で、もう一人のほうは同じく美人だけど上品な色氣があるような長い黒髪の女の子だ。まるでキャバクラに来たような気分になる。そこに行けば簡単に恋という幻想に酔うことができる。それがたとえ夢の話であろうとも、システムに組み込まれた巧妙な疑似体験だつと僕が楽しむことができればどうでもいいのだ。

綺麗な女の子に囲まれた僕は少し緊張してしまつ。僕は自己紹介をしてみんなに僕の名前を教える。

「どうだい？ なかなか居心地がいいだろ？ 」とチャンが言つ。

「そつスね、でもこうゆう豪華なところつて来るの初めてだから、ちょっと緊張しちゃうなあ

「あらあ、全然緊張なんてしなくてもいいのよ。そんなのするだけ

「無駄なんだから」とブロンズの女の子が僕の膝に手を置いて言う。チャンの向こう側に座つたもう一人の女の子もにっこりと僕に微笑む。まるでリラックスすればいいのよ、というようなふんわりとした笑顔を浮かべている。それは本当の微笑みなのか、商売上の微笑みなのか僕にはよくわからない。どちらも美人だけど、僕は黒髪の女の子のほうがかわいいなあ、と思う。

女の子たちは手際よく僕とチャンに飲み物を作ってくれる。僕はいつものようにビールを頼み、チャンはワインを頼む。僕が視線をクラブのほうに向けるとひな壇の下のダンスフロアではたくさんの人々が踊っているのが見える。

音楽はサム・ポールの「アイル・テイク・ヨー・ゼア」がかかっている。

僕はクラブの大音量の渦から遠ざかった薄暗いVIPの席に座つてしまふ。そこにはまるですべてが映し出されていると僕は少し混乱してしまふ。人々が踊っているのを見されているかのように思えてくる。人々はさまざまな人生を送っているのだろうけど結局はこうして踊っている。その中には今日の午前中に手術をしていたドクターもいるのだろうし、学校の教師や、セールスマン、主婦やタクシードライバーまでいるだろう。僕は彼らの向こう側にある生活の匂いを感じることができる。そこにある匂いが僕の記憶と繋がっているような気がしてくる。

「いいかい」とチャンが僕に向かつて言つ。それで僕はチャンのほうを向いて話を聞く。

「私はカエル君のために時間を取つた。ビジネスで相手の時間を取るということは当然ながら利益、金の問題ということになる。それ

は覚えておいでくれ

「え、でも、オレって金、またいきなり金の、金、カネのことしか頭がないのかな、オレって、とにかくカネの話で悪いんだけどさ、オレって金持つてないんだよね。金ないし、仕事もしてないし、さらには結婚してるんだ」

僕がそう語ると「まるでヘレン・ケラーの3重苦みたいだな」とチャンは答えて大笑いする。二人の女の子もそれに合わせて笑う。僕はさらに少し緊張してしまひ。

「でもその3重苦ってなんだよ?」と彼らが笑い終わるのを待つてから僕は聞く。

「悪い、悪い、つい笑ってしまった。3重苦といつのは、見えない、聞こえない、話せないってやつさ。見猿、聞か猿、言猿、というのがあつただろ? あれと同じだ」

「ふーん、よくわかんないけど、大変みたいだな」

「それは自分のことじょう?」とブロンズの女の子が僕にツッコミを入れる。そうするとまたチャンと二人の女の子は笑う。

「君はなかなかおもしろいキャラクターみたいだね」とチャンが僕に向かってそう語つ。「なかなか将来有望じゃないか。冗談のひとつも言えないビジネスマンは、いやそうじやないな、冗談の大切さを知らないビジネスマンはビジネスマンではない、というのが私のビジネス哲学のひとつだ。日本は先進国の割には国際感覚がまるでなかつたし、ろくに英語も喋れなかつた。でも君の英語はなかなか上手じやないか?」

「英語はジョフっていう友達に習つたから少しは上達したかもしない。でもオレってあんまり頭良くないんだよね、はつきり言つて。あんまりビジネスの話なんかされてもよくわかんないんだ、実際のところ」

「わつか、それならビジネスの話はひとまず置いておいて」チャンはそう言つと、グラスを傾けるようにしてワインを少しだけ飲む。そして黒髪のおとなしい女の子の細い肩に腕を回す。

「君の子のじとじと思つへ」ヒチャンは僕に言へ。

「綺麗、んんん、かわい子ちゃんだと思つぜ、コウ、バリバリのグリグリ、イカシてるつて感じじゃん、君のハートに釘付けだぜ！まだ網にかかつたばかりの魚みたいにピチピチだもんな」と僕は答える。

「そうか気に入つたか？」

「氣に入つたなんてもんじやないぜ、ダンナ。こんないいオンナとしつぽりやつちましたら、胸に二つの傷をもつたケンシロウでさえ『我が生涯に一片の悔いなし』つて感じだぜ」

そう言つと周りのみんなが大声で笑う。

「よからい、君はなかなか見所があるな。ところで君は女を知つているのか？」ヒチャンが言へ。

「なんだって、ダンナ？ オレは、耳、耳、///が遠くての――――――？」

「カエル君、君は女と一発やつた」とはあるのか?と聞いているんだ?」

「マジタク、聞こえねーなー、なんて言つてんだ?」

「君、ドリフターズじゃないんだぞ、君は今までに女とセックスしたことはあるのか、と聞いておるんだ！」

「ゼンゼン、聞こえねーよー、ベートーベンみたいに何も聞こえねーよー、なんて言つてんだ、ダンナ。もっと大きい声で言つてぐんねえがあ？」

「貴様！ふざけるのもいい加減にしやがれ！おまえのチンポをオマンコに突き刺したことはあるのか？って聞いているんだ？」

「ねえ、ひょっとしてカエル君ってドーティなんじゃない?」とブロンドの女の子が言つ。

「おい、どうした？大丈夫か？」とチャンが言う。

僕は呼吸を整え、ビールを飲む。

「オレってときどき変な発作が起るんだがあるんだ、でも、ノー・

「おーい、君、カエル君？中国語も話せるのか？」  
「中国語では？」

「おーい、君、カエル君？中国語も話せるのか？」

「いや、よくわかんねえけど、話せるのかもしれない、ウォー・シ  
ー・リーベンレン」

「おい、それは『私は日本人です』って『中国語じゃないか？お  
い、君はますます見所があるじゃないか？これはおもしろい夜にな  
りそうだ。私は今夜のスケジュールをすべてキャンセルするよ。ど  
うだ？今夜はじっくりと楽しもんじやないか？」

「オーケー、オレなら全くモウマンタリーだな。我、暇、達人」

と僕は中国語で言つ。自分で言つてびつべつするけど、僕は中国  
語が話せるみたいだ。

「ナマ・サヤ・チャン・ニヤ。アンダ・オラン・ジャパン・ニヤ？」  
とチャンが言つ。

「ヤー・サヤ・オラン・ジャパン」と僕は答える。

「おいおい、おい、おい？なんだ？君はインドネシア語も話せるじ  
やないか？私にはインドネシア人の血も混ざっているんだ。どこで  
君はインドネシア語を覚えたんだ？」

「サヤ・ティダ・タウ。ティダ・インガット・ニヤ。トゥタペ・テ  
イダ・アパアパ」と僕は言つ。

「ねえ？ カエル君、今、なんて言ったの？」 ヒプロンドの女の子がチャンに聞く。

とチャヤンは少し興奮ぎみに言つた。

チャンはケータイをポケットから取り出して何やら操作する。

「さあ、これで今夜の予定はすべてキャンセルした。といつてもそれだけ私がカエル君を見込んだからだ。それで、カエル君は歴史の話が聞きたいんだつたね？」とチャンは英語で囁つ。

「ああ、オレってさ、歴史の話聞いていないとダメなんだよね。なんかこう意識がグラグラしちゃってさ、実は医者にも進められるんだ。歴史の話を聞きなさいってね」

「そうか、そしたらとりあえず私の過去の話をしてあげよう。それでだいたいの流れはわかるはずだ。それにこれは私の経験談だから歴史の本を読むよりもわかりやすいかもしない。まあ、とりあえず何か飲み物はいいかね？」

「ああ、ビールでいいよ。オレってさ、あまり金持つてないだろ？ 下手に高いもの口にしても味がわかんないんだよね」僕がそう言つと隣の黒髪の女の子が新しいビールを僕に作ってくれる。

そこでクラブの中にはメタリカの「ワン」という曲が流れ始める。

「お、この曲オレ好きなんだよね。アイ、キャント、リメンバー、エニシング」と僕は英語で最初の小節を歌う。

「いいかな、話始めても？思つたよりも長い話になるかもしない」とチャンが僕に聞く。

「オーケー、オレつて暇の達人だからな」

そうしてチャンは話始める。

「私は昔、日本の大手電機メーカーで働いていたんだ。じゃあ、その変のところからいこうか」そう言つてチャンはグラスを口に運ぶ。とてもゆつたりと、そしてスケジュールという時間から解き放たれた私はこんなにも余裕があるんだとその素振りは言つてはいるみたいに。

「私はその会社の中でかなり高い地位にいたんだ。私は若く、そして中国人であつたにもかかわらずね。それだけ私には能力もあつたし、そして何よりもとにかく人よりもたくさん働いた。それが私の成功の秘訣だ。とにかく働く、ということ。人の何倍も頭を動かし、そして身体を動かす。それが成功の秘訣だ。と、簡単に言つてしまえばそのとおりなんだが、これを実行するのは並大抵のことではない。しかし、私はそうして会社でもみんなに認められ、評価されていた。下らない仕事は山ほどあつた。いや、楽しい仕事なんてものはほとんどなかつた、と言つたほうが正しいかもしれない。私のやつていることはほとんどが下らない仕事だつた。でも私はなんとか日々を乗り越えていた。

でも、そこにある問題が起つた。我が社が新しいMP3プレイヤーを発売することになつたんだ。発売前の段階で商品が私のところ

ろに届いた。本当はそんなこともあってはいけないことだったんだ。というものの試作の段階で私のところに商品が届かなくてはいけなかつた。要するに手違いがあつたんだ。そして発売前の段階でそのMP3プレイヤーが私のところに届いたときにはもう手遅れだつた。私は愕然とした。そのくらいその商品はダメだつたんだ。私はこんなものを発売すれば我が社はもう終わりだと思つた。そして私は私の権限が届く範囲の限りにおいて断固反対した。こんなものを発売したら我が社はもうやつていけないと重役会議で発言した。しかし、私の上司たちにはそんなことさえわからなかつた。頭の悪いクズともだとは思つていただけどまさかあそこまでアホだとは思わなかつた。結局どんなに私が叫んでみたところで私は大きなシステムの中のほんの小さな部品にしかすぎなかつた。もしかしたら私が中国人といふことも関係していたのかもしれない。結局ところ人種差別や国境意識。人々はなかなか変わらないつてことさ。そこで私はいろいろと考えた。その頃にはもう結婚していたし、子供もいた。給料にしては同じ同世代と比べても申し分なかつた。他人からみれば順風満帆というところだつただろう。でも私は悩み始めた。せつかく良い大学を出て、一流の会社に勤めて、必死で頭を下げながらやつてきていたことの意味が私にはどうしてもわからなくなつてきた。結局社会の中では良い大学を出ようが、そんなものはどこの階級に属するかを決めるだけであつて、社会の中では仕事ができる奴、がんばつて仕事ができる奴が生き残つていくんだ。我々の国もずいぶんと受験戦争でダメージを負つていたからね、あの精神戦争ではかなりの人間が死んだ。私も大切な友人を何人も失つた。厳しい受験戦争を乗り切り、そしてさらに厳しい社会の中で我々は頭を下げながら必死にやつっていた。でもいざ立ち止まつて自分の過去を振り返るとそこには何の意味もなかつたような気がした。

しかも会社は『我が社の社運をかけて』というキャッチフレーズまで掲げてそのMP3プレイヤーを発売したんだ。私の頭がおかしい

のか、奴らの頭がおかしいのかだんだんわからなくなってきた。どこに生きてゆくことの意味があるのかわからなくなってきた。それが精神戦争の火種だつたんだ。私の元にも何人も誘いが来た。私の友人たちも生きる意味を失い、精神戦争に出かけていった。そんな下らない社会の中で生きてゆくことに意味はあるのか？ そうゆう問い合わせ生まれたものから戦争に賛成し、そして崖から飛び降りていった。殉職者たち。そして彼らはみんな奴らだつた。死んだ奴はみんないい奴だつた。今にして振り返つて思えば彼らのほうがまとも、と呼んでもいい人間だつたかもしれない。私は今もこうしてその世界の狭間に一人で座つているが、彼らは大きな声で『ノー』と叫ぶとその暗黒の崖に転がり落ちていつた。そうして私は多くの友人を失い、会社を辞めて独立してこうなつた。結局私も悩みに悩んだ末に、戦争には参加しなかつたんだ』

「ヨウ、でもさ、どうしてそれが日本という国の崩壊に繋がるんだ？」と僕は聞く。

「考へてもみたまえ、我々中国と日本では人口のベース、つまりマーケットの大きさが全く違つたんだ。どんどん社会のシステムも弱肉強食という人間の攻撃本能に近い形に変わつていつた。つまり社会の中で生き残れない奴を生き残れる奴が支配する、という枠組みがたんだんとクリアになつていつた。中国はどんどんと急成長していくからどんどん物質社会になつていつた。多くの人が多くの新しい電化製品を買つた。その大きなマーケットは世界中の電気メークーがまさに戦争のように争つていつた。でもそんなMP3プレイヤーを発売する私の会社には全く勝ち目がなかつた。まさに私の思うとおりになつたわけだ。

それに日本と中国の間には歴史的な問題が色濃く残つていた。2次世界大戦のときの生臭い空気をなかなか拭い去ることはできなか

つた。それほど歴史の問題というのは簡単なものではない、ということだろ?。誰が一人『もう終わったことだからもういいじゃないか』と言ったところで片付く問題じゃないからね。結局あの精神戦争でも日本と中国の戦いはひどいものだつたらしい。でもそれはあくまでも向こう側の世界のことだからね。私の家族は『ブラック・サン』を買ってこちら側に非難したけど、向こうの世界はすでに消滅しているかもしれないね』 チヤンはワインをまた一口飲むと話を続ける。

「私が会社を辞めて独立しようと思った最大の理由は酒だった。私には会社の上司たちと一緒に酒を飲まなくてはいけないのがどうしても嫌になつた。絶えられなくなつてきたんだ。あのバカどもが口を大きく開けて馬鹿笑いしている顔を見てると吐き気がしてきた。でもそれも仕事だから付き合わなくてはいけない。これは死ぬほど退屈だ。あいつらはとにかく自分を正当化したいだけなんだよ。やつらの下らない話を酔つ払いながら延々と何時間も聞かされるんだ。あれはまさに牢獄と呼んでもいいかもしない。そうゆうのに私はもう我慢の限界が来た。そしてある晩会社のパーティーのときにまたあのMP3プレイヤーの話になつた。上司は酔つ払つていたし、半分冗談のつもりで私に言つたのかもしれない。でも彼の一言が私の我慢の壁を突き破つた。そして気がついたら私は手に持つていたワインを彼の顔にぶちまけていた。それで終わりだつた。私はこうして死んでいた友を思い返して女たちと一人で酒を飲む。人の生き血というワインを飲み、死んでいた友を思う、それが今の私だ。でもそれで私の人生というものが幾分救われたと言えるかどうかはわからない。これはまさに死ぬまでわからないのかもしれない。もしかしたら前よりも悪くなつていいかもしれない。それでも私はワインを飲み、金を人の何倍も使い、人生を出来るだけ楽しく暮らせるように心がけている」

「チャンさんて素敵な人生歩んでらっしゃるのねー?」ピプロンドの女の子が言う。

「もうかな? そう聞こえるかもしれない、でもここにいる私はすでに死んでいるんだ」 そう言つてチャンが笑う。

「えー? わけわかんないー?」ピプロンドの女の子が答える。

「ところでカエル君へーここまで話はわかつたかな?」

「オウ、だいだいなー」

僕は頭の中でさつと話をまとめてみる。とにかく日本は世界との経済争いで勝てなかつたということだらう。経済が弱くなれば当然国としての運営は難しくなつてくれる。

「君は男だろ? だつたら歯は抜かれてはいけない。社会の中でも、どんなに忙しくても、男は歯だけはもつていなくてはいけない。とは言つてもよだれを垂らしたむき出しの歯じゃないよ。スマートでミステリアスなバンパイアみたいな歯だ。それをちゃんと忘れないことだ。・・・まあ、今夜は少し喋りすぎたかな? そろそろ本題に入らうじゃないか?」

「本題? ホンダイつてなんだよ?」

そこでチャンはものすく嬉しそうにヒヒヒヒと笑う。いつもは真面目な顔をしているけど、笑った時はすくへ口をそつたな笑い方をする。

「ギャンブルだよ、カエル君。私も随分と歴史の話をしてあげたか

「うわうそろビジネスの話を始めよ! じやないか?」

「ギャンブル? 自慢じゃないけど、オレってここにさ、つてときには必ず勝負に負ける呪いを身体にインプットされているんだ。勝つことよりも負けないことを考えなさいって言われたような気がする」

「とにかくギャンブルの内容だけでも聞かないかね? その後にやっぱり嫌だつたら辞めてもいい、どうだい?」

「ああ、オーケーだぜ。それなら悪い話じやないよな? チャンスの神様には前髪しかない、とかマルチ商法みたいなことは言わないでくれよ」

「どうあえず、だ」と言ってチャンはおとなしい黒髪の女の子を見る。「この子のことは気に入つたつて言つたよね?」

「ああ、ブリブリのかわい子ちゃんだもんな」

「この子は実は聾痺なんだ。人の話は理解できるけど話すことはできない。そして彼女は優秀なマッサージの技術を持っている。人間の持つ五感のうちどこかが遮られている場合、またその別的能力が常人と比べて飛躍的に発達している、ということがある。中国の医学では人間の身体はひとつ小さな宇宙であると考えられている。そこでまず最初に彼女のマッサージを受けてもらつ。もしかしたらマッサージによって君の中に眠つている何かが目を覚ます、という可能性だってあるだろ? そしてこれだ! これを見たまえ」

そう言つてチャンは黒髪の女の子のドレスの袖をまくる。そこにはタトゥーが入つてゐる。

「これはリンクヤンといつ、手曲を現す印だ」

タトゥーは丸い円が波を打つ線で一つに割れていて、一方は白い肌、一方は黒で塗られている。そして白の中に小さな黒の点があり、黒のほうにも小さな白い点がある。

「これにはいろいろな意味が隠されているわけなんだが、とにかくだ。マッサージを受けた後にはこの子と一緒にやつてもらつ。カエル君が男になるチャンスを私が『えよつ、』というわけだ。これが私のギャンブルの提案だ」

「カル君、さつきみたいな冗談はもういいだろ？私もいろいろ喋つたじゃないか？君も私の言いたいことはわかるはずだ」

「なんだよ？ それ？ ゼンゼン、わかんねーなー、ダンナ。 また声が小さくなつていつたみたいだ」

「だからさああ、やつさから言つてるじゃないか？この子にマッサージしてもらつて、その後この子とセックスすればいいんだよ。無事君がそれを潜り抜けることができたら君の勝ちだ。できなければ君の負け、とまあ、そういうことだ。わかつただろ？」

「ダンナ、イマイチわかんねーな。どうしてオレがこの子とセックスするんだ?」

「だからああああ、さああああ、それがギャンブルだつて言つて  
るじゃ、ないかあ！」

「だつて、そんなのめちゃくちゃ簡単じゃん? だつてこの女の子とセックスすればいいだけ、だろ?」

「カエル君がそう思うのなら、賭けてみればいいじゃないか? といつ」とは、決まりかな?」

「でもなあー、なんとなく・・・・」

「オイ、オイー! ここまで来てまさか男になれない? って言つんじゃないだろ?」

「そんなことはないんだけどさ・・・・ちよつと個人的な問題が・・・・」

「当たり前だ、セックスの問題が個人的な問題じゃなかつたりどうする? まさか家族ぐるみの問題つてわけにはいかないだろ? ママー、この宿題わからないから教えてー、なんてこともできない。これは極めて個人的なことなんだ」

「僕はしばらく考える。とくに悪い条件ではない、といつもこれもものすごいチャンスだと考えていいかもしない。

「といつでもー、オレが勝つたらどうなるの?」

「ああ、せうだつたな、ギャンブルの条件を決めよ! カエル君が買つたら・・・・そ、君は借錢しているんだ? へへへらへらいだ?」

「さあ? 1億以上あることは確かだけど」

「 そ う か 、 私 に と つ て は 鼻 ク ソ を ほ じ る ぐ ら い の 額 だ が 、 君 に と つ て は 切 實 な 問 題 だ ろ う ね ？」

「かなり」と僕は答える。まことに僕にとってはそれが一番の問題なのだ。

「そうか、そしたら君が勝つたら2億あげよう。借金がなくなる上に1億の金を手にすることになる。さらに君を見込んで私の会社に入れてあげてもいい。まあ、それは勝つたときに決めればいい。私のほうもこの賭けに勝てないようではカエル君には会社勤めは無理かもしれない、と考えるからね。確かに君には才能はあるかもしれない。5、6年も私の元でしっかりと働けば私の右腕ぐらいにはなれるかもしれない。そうすればもう金の心配はしなくてもいい。まさに入人生をかけた大勝負をするわけだ?どうだい?」

「でもれ、ホレが、もし、もしだよ、負けたらどうなるのかな？」

「せうだな・・・・・・・・・とりあえず私は君と会えて楽しかつたし、君から金を取るのは少々良心が痛む。そうだね、今夜のこの特別料金を払つてくれればそれでいいよ」

「チヨ、ちょっと、ちょっと待ってくれ、ダンナ。だいたいいくらぐらいなんだい？」

「なんだ?まさか賭けに負けるつもりじゃないだろ?」

「そんなことはないけど、もし、つてことがあるからな。それにこれ以上借金が増えるとどんなことになる。オレはケツの毛どころか、ケツの穴までなくしてしまうかもしれない」

「どうあえずお金のことがいいじゃないか?とにかくやるのか?やらないのか?」

「やる!」と僕は答える。「オレはやるぜ!」これはものすごい戦いだ。性欲と金とこの二つの欲望のぶつかり合いだな。オレはやるしかない・・・・・・つてその子が聞いてるの!」

と囁いて僕は黒髪の女の子のほうを見る。彼女は相変わらずこうじつと笑つたままだ。

「やうか、決まりだな。そしたらこうゆうことは早いほうがいい。この子が部屋に案内してくれるからカール君はこの子に着いて行けばいい。じゃあ、よろしく頼むよ!」

チャンがそう囁いてスッと黒髪の女の子が立ち上がる。僕は少し緊張してしまう。

「私はここで待つてるからね。それとひとつだけ私から条件を出す。何があつてもカエル君、彼女に話しかけてはいけないよ。簡単だろ?じゃあ、楽しんで」とチャンは僕に囁く。

僕と女の子はクラブの中にある特別の個室のようなところに案内される。曲がり角があるたびにそこにボーキが立つていて道案内してくれる。まるで王様になつたような扱いだ。僕はシャワーを浴び、個室のベットに裸で寝転がつて女の子が来るのを待つている。そしてこれはものすごいチャンスなんだぞ、と少し緊張しながらも自分に言い聞かせる。

広々とした個室は落ち着いた感じの豪華な部屋で、静かなインド音楽のよみうりなものが流れ、柔らかな間接照明がぼんやりと灯っている。まさにマッサージの部屋、というよみうりな感じだ。ベッドのシーツからはたつぱりと太陽の光を吸い込んだよみうり匂いがする。なんだか本当に王様になつたよみうり気がしてくる。

一人になつて僕は初めて冷静に僕の置かれた状況を考えてみる。勢いで賭けにのつてしまつたけど、僕はコト力裏切つていていうことになるのではないか。そう思うと急に僕はコト力に對して申し訳ない気がしてくる。僕はこんなところで一体何をやつているんだろう？本当にこれは僕が望んでやつてることなのだろうか？僕はだんだんと不安になつてくる。考えれば考えるほど僕のやつていることはまともじゃないよみうり気がしてくる。可愛い女の子とセックスをして、その上借金まで帳消しになつて、僕にとつては多額のお金が手に入るのだ。どう考へてもこれはまともではないよみうな気がする。じゃあ一体まともつてどうよみうりことなんだろう？

とにかく考へてみてもしかたがない。チャンが言つよみうりにこれはビジネスなんだと僕はひとまず自分を無理やり納得せせる。これはビジネスチャンスなんだ、と。

やうすると黒髪の女の子がチャイナドレスで登場する。ものすごくセクシーだ。まだ僕が学校に通つていたころに気がついたら教室の誰かが鼻血を流していた、みたいな気分になる。

女の子はそつと僕のところへ近寄つて来て、僕の身体に触れる。そして女の子はマッサージを始める。綺麗なものにはトゲがあると言つけど、そのマッサージはものすごく、時には歯を食いしばらなくてはいけないぐらい、痛い。僕はときどき声を出しそうになるの

を我慢しながら女の子が僕の全身をマッサージしてゆくのを必死でこらえている。一度痛いほど押し付けたあとは穂やかな波のように

女の子は僕の身体を撫でてゆく。それが僕の全身で繰り返される。

僕の耳には遠ざかる意識と運動するようにインンド音楽が聞こえる。

僕は女の子が僕の肩を叩くので田を覚ます。僕はどうやらマッサージの途中で眠ってしまったみたいだ。気がつくと女の子はすでに裸になっている。

女は君の性器を優しく撫で、口に銜える。そして君は女の身体を思い出す。[写]実主義の画家が描いた精密な油絵のよつに皺のひとつひとつ、体毛の一本一本まで見落とさないように。彼女の身体だけではなく君と彼女の匂いが染み込んだベッドや、君の部屋の照明、セックスのあの氣だるさ、その季節の湿度にいたるまで細かく君は思い出す。

女の体のラインを思い出し、脇の下の影や、わき腹のたるみ、白くやわらかいふくらはぎ、不器用な足の指、そして女の陰毛。君の指先に触れた彼女の性器の温度を思い出し、鼻のなかに残るその匂いを思い出し、吸い込まれてゆく女の性器を思い出す。

連続写真を一枚一枚丹念に眺めるように君は彼女の表情を、僅かな感情のブレを思い出す。ある写真では大きく田を見開きながら顎をしゃくり上げ、別の写真ではしっかりと田を瞑つて下唇を噛んでいる。彼女の表情は激しく君を求めている。

そうしていつの間にか君は幻の彼女を抱いている。夢のなかで、夢の君が、夢の彼女を抱いている。それは現実に彼女を抱いているよ

りも生々しく思えてくる。彼女の力強い生命力が君を向かい入れ、彼女の口からこぼれる吐息を、その生命の匂いを、感触を君は思い出す。彼女は君の口の中で舌を動かし、何かを捜し求めるかのように生温かい粘膜を摩り付けてくる。彼女が上に乗り、彼女の髪が流れ、互いの手を取り合つて単純なうねりに身を任せ。君は彼女のすべすべしたお尻りに手を回して揉み解す。

彼女は腰を仰け反らせ、呼吸と共に裏返つたような声を出す。君の性器と彼女の性器が擦れあうたびに彼女の表情はメトロノームのように規則正しく揺れ動いている。彼女のねばねばの体液はだんだんと君の時間を溶かしてゆく。君の記憶はどこかではらばらに弾けてしまう。夢と現実が分水域を超えて、何かが壁にぶち当たる。

声？と思つ。彼女は囁きだつたはずだ？どうして声が出せるのだ  
ろ？

はつと気がついて僕はもう一度彼女を見てみる。それは彼女ではない。

それはコト力になつていて

だんだんと僕の記憶がおかしくなつてきたよつた気がする。どこかとどこかが絡み合つて解けない。なんだ？よく見るとひつときの黒髪の女の子じやないか？

今のは幻想だつたのだろうか？

だんだんと意識が朦朧としてくる。彼女が動くたびに腕にあるタ

トウーが気になり始める。あれはなんだ？それにこの女の子の表情は商売的なものなのだろうか？それとも本物の彼女の表情なのだろうか？僕はだんだんとそんなことを考え始める。

ダメだ、僕は賭けに負けるわけにはいかない。僕はセックスに意識を集中しなくてはいけない。なんとしてもこれをやり遂げなくてはいけないのだ、と自分に言い聞かせる。それにしてもこの子は本当に感じているのだろうか？ちゃんと女の子をイカセないと男としてのプライドが保てないような気がする。ダメだ、そんなことは考えるな。ダメだ、僕は賭けに勝たなくては。日本人のチンポは小さいからいつも彼女が外人のチンポをズボズボ入れているとしたら・・・・。僕はだんだんと消極的になつてくる。ダメだ、ここは賭けをしているんだぞ、僕はもう一度自分に言い聞かせる。

僕は身体を起こして彼女に後ろを向いてくれというようなボディランゲージをする。昔誰かが「女は目を閉じて後ろから突っ込めば誰でも同じだよ」と言っていたのを僕は思い出す。ここは一気にゴールへねじ込むしかない。あまり余計なことは考えるんじゃない、ここはチャンスなんだ。

でも僕は彼女の背中を見て愕然とする。そこにはタトウーで文字が刻み込んである。

「LIFE ALWAYS HAS TWO SIDES」と。僕はなんとかわけがわからなくなつてくる。こんなところで僕は一体何をしているのだろうと思つ。

僕が愕然としていると彼女は僕から離れてしまう。

「どうやらダメだったみたいだね」と残念そうに席に戻ってきたチャンは僕に言つ。「まあ、それはそれでしちゃうがない。とにかく今夜はエル君と会えて楽しかった。もう会うこともないかも知れないけど良かつたら図書館の使用ガイドを「コピーしてあげよ。私がさせてものプレゼントだ

僕はチャンに図書館ガイドを「コピーしてもらつて部屋に戻る。僕が玄関の扉を開けるとそこには静かな闇が僕を待ち受けている。まるで今夜僕の身に起こったことを非難するみたいに。僕は足音を立てないようにしてリビングを抜け、そして自分の部屋の扉を閉めてから電気を点ける。それと同時に大きなため息が僕の耳に木霊する。一体僕は何をやっているんだろうと思う。ケータイをチェックすると今夜使ったお金は2534500円と画面に表示されている。

僕はケータイを見る。そこに着信の後はない。迷惑メールが3通届いているだけだ。部屋にいてもすることはない。僕は外に出ることを考える。

いつもと同じ街。同じ日常。デパート前の広場ではだぼだぼの服を着た若者が座り込み、その隣には制服を着た女子高生がいる。コンビニでは立ち読みをしている人々が肩を擦り合わせるようにして

居場所を守っているし、角のパチンコ屋の自動ドアが開くとがやがやとした騒音が漏れてくる。人々は勝手気ままに歩いていて、どこに向かっているのかも自分ではわかつてい。みんな夢遊病者のように片手にケータイを握り締めている。みんな自分の居場所を誰かに知つてもらわないと不安でしようがないのだ。

そんなことを考えると僕は外に出る気がなくなる。ビルへ行つてもどうしようもないような気がしてくる。でも結局は部屋にいたところで同じことなんだ、と僕は思つ。

僕は顔を洗い、歯を磨き、服を着替えて外に出ることにする。ようやく僕にとっての一日が始まる。ヘッドフォンを取り付けてしっかりと耳を塞ぐ。部屋のドアを開けて外に出る。でもいくら耳を塞いだところでそこにある匂いは、街の沈殿した匂いは鼻から入つてくる。

駅までの道のりを歩きながらビルに立つ。駅まで歩く。商店街を通り抜け、小さな信号の交差点を渡りながら僕は考える。店に掲げられた幾つものチーン店の看板や数字の列を通り過ぎる。僕はあくまで平静を装い、彼らのなかを通り過ぎる。街の人々は口裏を含ませたように頑なに沈黙を運び続けている。ウォームランをしていても、彼らの視線が、歩き方が、息遣いが僕にそう告げる。僕に向かつては何ひとつ語りかけてこない。

どこにも行くところがない。行きたいところがない。改めてそう思つ。チャンに図書館のガイドをコピーしてもらつたおかげでそれから毎日のように図書館に通つようになった。そこにある本をしらみつぶしに読み始め日々を過ごした。そこには僕の知らない世界がたくさんあつた。見たことも聞いたこともない世界のささやきに僕は耳を澄まし、新しい自分をその中に探し求めた。でも結局いつも

僕はここへ帰つてくる。僕の人生といつ終着点へ。我々はただこの宇宙といつもの自分の軸に合わせて回転させているだけのことなのだ。

芸術という音楽はすべてモーツアルトなどある本に書いてあつた。それは正しいのかもしれないけど、そんなことを言つていても時代はそれ以上進化しない。宇宙といつものは進化することによって拡大し、そして同時に縮小しながら無へと帰るのだ。

駅に向かう足どりは変わらないけれどもそこに行つたところで、僕の行きたいところはわからない。

駅にはわざわざまな可能性がある。わざわざまな可能性の出発点だとうことができる。その気になれば、そこを足がかりにして僕は今まで行ったことのないようなところにも行くことができる。

こゝそのじとビニカ海に行つてみようかと思つ。穏やかな水平線を見て、世界の広さを感じることができれば少しはましな気分になるかもしれない。やらゆらと揺れる波を見ていれば時間を忘れて何がいいことが起こるかもしれない。でもそれも思つてみるだけで僕は海になんて行かない。この街の周囲にはまともな、心を開けるような海なんてないことを知つていいからだ。それに今から海に行つたとしてもついた頃には暗くなつているはずだ。僕の一日は日が暮れるのが早い。どこにもいけないまま気がついたらネオンが灯り始めている。

そして遠くに行くには金がかかる。金がなくなるとこことは、働いてない僕にとって、収入がない僕にとっては僕の猶予を、他愛のないものかもしれないけど限られた自由な時間を自分ですり減らすということになる。

僕は3駅離れた街までの切符を買い、電車に乗る。そこまで行ったところで何があるわけじゃない。チヨーン店のコーヒーショップとチヨーン店のカレー屋とチヨーン店の定食屋、バーガーショップ、本屋、レコード店、どこにでもあるような街があるだけだ。じゃあなぜそんなところに行くのだろうか？

「無駄なんだよ、無駄。おまえはなんにもわかつてないな」とケータイが彼らに聞こえないように僕に耳打ちをする。

上り電車は出たばかりみたいでプラットホームにはまばらにしか人がいない。でも次の電車が来る頃にはまるで決められたことのようにそれなりの人々が集まつてくる。僕はこの街の一員として、夢の住人として、プラットホームに立つて電車を待つている。僕はケータイをマナーモードにし、曲を入れ替えて電車に乗る準備をする。ボリュームを小さくし、彼らに僕の存在を知られないように気を配る。ドアが開くフロントポジションに移動し、白線を越えないようにして、そしてそんなそぶりを周囲に悟られないようにして僕は電車を待つ。

電車がプラットホームに入つてくるとどうしても車内に目がいく。どれぐらい人が乗つていて、どのくらいそれが僕にのしかかってくるのか、それを計算する。

思ったより電車は空いている。いくつかの席が空いているのが見える。僕はドアのそばの手すりをしっかりと握り、席には座らない。そんなところに座つてもろくなことがない。こんなことがなかつたらこの街はもつとましなところだらうと思つ。シートには彼らのよだれがべつとりと張り付いているからだ。彼らの匂いだけではなく、価値観や、人生観や、道徳がそこでは待ち構えている。そんなとこ

ろにケシを下すあへりこなり立つていたまづがよつぱりもじだと思ひ。

僕は音楽を聴きながら電車に揺られてくる。窓越しに移る景色はとらえどこりがなく、壁の中を進んでいくように思える。僕は電車のなかに吊り下げられている広告に田がいく。

そんなものはどうでもこことだと思いつながりも、他に見るものがないので知らず知らずのうちにそこにある文字が田に入る。

目的の駅で電車を降りると歩いてコーヒー・ショップに向かう。レジでコーヒーを頼み、トレイにコーヒーと灰皿を載せて二階の席に行く。ほとんどの席は埋まっている。誰もが自分の座れる、自分のお尻を落ち着ける場所を求めてこんなところにやってくる。窓際のカウンターの席が空いている。僕はそこに座り、ガラス張りの向こうの街を眺める。僕は周囲に聞こえないように鼻から長いため息をつく。

僕の右側の髪の短い中年女性は参考書のようなものを開いて勉強している。左側のスースを着た20台後半ぐらいの男はノートパソコンを開いて忙しそうにパタパタとキーボードを叩いている。

ガラス越しの街からすぐ目の前に交差点が見える。

信号が青に変わる。

人々は向ひからりじむり、元からり向ひの側に移動を始める。

信号は青だ。

横断歩道の手前でケータイを耳に当てている男が慌てて交差点を渡る。した男とぶつかるのが見える。ぶつかったほうの長い髪の男は振り向いて何かを言つ。ケータイの男とぶつかった男は言い合つになつたみたいで、ついには取つ組み合いになる。

信号は青だ。

二人は横断歩道の真ん中でお互いに掴みかかる。胸元を引っ張り、ぶつかつた男が殴りかかる。ほとんどの人々はそれを横目で見ながらもこちらから向こうに、向こうからこちら側に渡り終える。信号は青から黄色に変わり、赤になる。

信号は赤だ。

男たちはまだ取つ組み合いをしている。両サイドの車から一斉にクラクションが鳴り、その音はガラス越しのヘッドフォンをした僕の耳にも響いてくる。

確かに何も変わらない。改めて僕はそう思つ。

たしかに、なにも、かわらない、と。

とたんにケータイが耳元で囁く。

「なあ、もうわかったか?」と、「おまえにはどこにも行くところがないじゃないか。おまえはどうすることもできない。どこに行きたいかも自分でわからない。そつだろ? いつものようにおまえは自分の特等席に戻つてくるだけだ。この下らない街の、下らない日常のど真ん中にな」

僕は聞こえない振りをする。振りをしたところでほんとはしつかりと聞こえている。僕はグラスを口に運び、また曲を選び、ボリュームを少し大きくして音楽を聴く。

次の日から仕事探しを始める。僕には特にこれといった業種の希望はない。とにかく早く金が貯まって、早く落ち着いた暮らしができる。でも働いたところで返せる借金ではない。でも生活を落ち着けるためにも仕事を始めなくてはいけない。逃げ道はない。延々とメリーゴーランドに乗っているような気分になつてくる。いつまでそれを繰りかえすのか、繰りかえしてそれでどうなるのか、といったことはひとまず脇に置いておく。そんなことをいつまでも考えていてもお金は減る一方だし、働くこともできなくなつてしまう。

夕方に突然ケータイが鳴る。着信はみたこともない番号なので電話に出ないでおこうかと思うけど、しつこく鳴り続けるので出ることにする。

「もしもし、石川 カエルさんでしあうか？」と僕の名前を叫ぶ。聞いたことのない女性の声なので「そうですねけど」と怪しみながら答える。

「今日インターネットで我社のページに登録をしていただきましたよね？早速なんんですけど、ご紹介できるお仕事がありますのでお電話差し上げました。今、お時間よろしごですか

「はい」と僕は答える。「いつも事務的で、礼儀正しい電話をじばらぐしていないので僕は緊張してしまつ。

「今何かお仕事はしていらっしゃいますか？」

「いいえ、していません」

「それでは、もう足労ですが一度わが社のほうに来ていただけないでしょうか？インターネットでは正式な登録にはなりませんし、お仕事のほうもできればこちらでお話したいのですが？」

僕は一瞬じつうふうに答えていいのかわからなくなってしまう。ついあえず「よろしいです」と答えてしまう。よろしいですか？それは僕のせりふではない。けつこうです、と答えるべきだったのだろうか？でもけつこうです、といつ」とは断つているふうにも聞こえるし……。

「それではじつじつお時間よろしいですか？」相手の女性は躊躇なく話を進めてしまつ。

「オレとしてはいつでもいいですが……」

「それでは、明日の3時にオフィスのほうへいらっしゃっていただけませんか？」

「大丈夫です」と僕は答える。「お伺いいたします。よろしくお願いいいたします」ようやく社会的なカンが戻ってきて僕はそう答える。「オフィスの場所はおわかりになりますか？」

「インターネットで調べますので、大丈夫かと思います。明日の3時にお伺いします」

僕は焦つて舌を噛んでしまい、「します」のところが、「しまひ」と言つてしまつ。

「それでは明日お待ちしております」

相手の女性がそう言つて電話が切れる。

なんだかわからないけど、とにかく求人ページとのにらめっこは一旦休戦ということになった。

僕は明日のためにスーツを着てみる。ネクタイを締め、ワイシャツを着る。クリーニングから戻ってきたままになっていたビニールの袋を取る。それから鏡の前に立つ。そして、なんだコイツ、と我ながら思う。

でもそういう違和感を、時間をかけて消してゆく。鏡の中の自分をさまざまな角度から眺めてみて、社会と自分とを少しずつ繋ぎ合わせてゆく。どこから何かを切り取り、僕のなかに貼り付ける。ズボンのポケットに手を突っ込んでみて、ジャケットを何度も着たり脱いだりして身体に馴染ませる。スーツのままトイレに行つてみて、おしつこをしてみる。僕じゃないみたいに見えるけど、最初の違和感は少しずつ和らいでゆく。何事も慣れなのだ。コト力が見たらなんていうだろ？僕は考へてしまつ。面接に行く前に美容室に行き、髪の毛をカットしてもらつ。

次の日の3時に会社に向かう。出迎えてくれたのは昨日電話をもらつた女性と同じみたいだ。小太りで、眼鏡の向こう側で細い目をさらに細めながらひきつった笑いをする。30台半ばから後半ぐらいだろうと思う。その女性が僕の担当になつてゐるみたいで、小さ

くバロック音楽が流れる清潔なオフィスでいろいろとテストをさせられる。一般常識や、マークシートの性格診断、パソコンがどれぐらい早く打ち込めるか、それから僕の職歴を聞かれる。

「何か資格のようなものはお持ちですか?」と女性は問う。

「資格は『ネット作家 2級』『暇の達人 3回戦』と、あとは『着物の似合つ日本人世界ランキング 1位』というのを持つています。けどこれはこの世界にはオレしか純日本人がいないからであります。いわば不戦勝のようなものなんです。それと『使用上の注意をよく守つてお使いください』はもつてます」

「それは、『履歴書には書いてないですね』

僕の冗談は全く通じなかつたみたいで、それが冗談だとわからない相手の女性は僕と僕の書いてきた履歴書に交互に視線を送る。僕を異邦人のような目で見つめている。僕はもう冗談は止めておいたほうがいいなと思う。

「今までどのようなお仕事をなさつてきましたか?」

僕は自分の職歴を話す。記憶がないから本当は全部でつちあげなんだけど、大学を卒業した後の工場の夜勤や、レストランのウェイター、ビデオ屋の店員、短期のリゾートバイト、トラックドライバー、その他もちろんの仕事経験を話す。相手の女性は履歴書に書いてあるはずなのに、仕事をしていった正確な場所と時期を聞いてくる。僕はそんなことどうでもいいような気がするけど、なんとか履歴書に書いたとおりに思い出しながら詳しく話す。

「今回」紹介したいのは、簡単な電話のお仕事なんです」そう女性

は言つ。

「簡単な」とこゝにが強調されて聞こえるような気がするけど、僕は続きを待つことにする。

「会社のほうから電話をかけるリストをいただきますので、そのリストに従つて電話をしていただくだけです。経験がなくても誰にでもできるお仕事ですので、ぜひやってみられませんか?」

「はい」と僕は答える。

「経験がなくても誰にでもできる」という部分がまた引っかかるけど、僕は「はい」と答えることにする。いちいちそんなことで引っかかっていたら働く」とはできない。

相手の女性は契約内容や仕事条件、そういうものが書かれた書類を出してきて僕にサインをさせる。書類にはすでに僕の名前が書かれている。その書類は僕が会社に来る前から机の引き出しに入つていて、おずおずと女性が引っ張り出してきたものだ。僕がここに来る前から、テストや質問を受ける前から、それはあらかじめ決まつていた運命のように思えてくる。

「突然で申し訳ないですが、明日からさつそくお仕事よろしいですか?」相手の女性は言つ。

「明日?明日から?ですか?」と僕は言つ。

「もちろんカエルさんの都合の良い日からでかまいませんが、来月からといふことはないですよね?」

「いや、やつですね・・・」と僕は躊躇してしまつ。

「それと仕事が決まったところで最後にもつ一つだけテストがござります。とにかくそれからやつちやいますか?」と女性は明るい表情でやつ言ひ。でも僕はそこで全く親しみとこつものを抱くことはできない。

「はい」と僕は答へる。

「やうしたら、えーと、もう一度机のほうに戻つていただいて、えーと、これ、この原稿用紙に『私の自画像』というテーマで、そうですね原稿用紙3枚ぐらい何か書いてもらえませんか? 適当でいいですから、テキトーで」と女性は言ひ。

僕はまたやつ書きリストを受けた机に戻り原稿用紙を見つめる。女性は奥の部屋のほうに消えてゆく。僕の仕事が決まったみたいなのでどこかに連絡しているのかもしない。

僕は改めて真つ白な原稿用紙を見つめる。

そして「私の自画像?」と思ひ。

とにかく何でもいいからここに書けばいいのだ。バカで間抜けなカエル君であることをわざわざ書くことはない、と僕は思ひ。もつとしつかりとした社会的ビジョンをもつた大人としての意見をここに書かなくてはいけない、そう僕は思ひ。

でもそつ考へて見たところで・・・・・・・全く何も浮かんでこない。

考えれば考えるほど僕は書くことから遠ざかってゆく気がする。

私の自画像？

こんな難しいテーマが会社のテストなんかに本当に使われるのだろうか？と原稿用紙を見つめながら僕は思つ。

まずい、そろそろ時間がなくなりそうだ。このままこらめっこを続いているわけにはいかない。とにかく僕は借金をしているんだ。電話の仕事なんてもちろんやりたくないけど、そんなことは言つてられない。でも、まさか、明日から急に働かと言わるとは思つていなかつたなあー、と僕は思つ。

ダメだ、何か書かなくては。えーと、僕は記憶のない、バカな力エルです。

違う、まさかそんなこと書けるわけないじゃないか？

そうするうちに女性がドアをあけてオフィスに戻つてくる。

「書けましたか？」と僕に微笑む。

「申し訳ありませんが、この話はキャンセルできないでしょうか？」と僕は言つ。

「え？何か問題がありましたか？労働条件も決して悪くないと思うのですが・・・」

「そういう問題ではなくて、ちょっと個人的なこと……」  
僕は言葉を濁してしまつ。ダメだ。断るときにはちゃんと断らなくては、と僕は思う。

「これからお仕事の紹介依頼をしておきながら真に勝手だとは思いますが、またの機会に、ということはできないでしょうか？」

「ええ、ま、まあ、それは、別にかまいませんが」

「度々申し訳ございません」

やつ言ひと僕は立ち上がりオフィスを出る。僕は帰り道にケータイで煙草を注文する。思いつきり煙を肺の中に送り込むとなんか世界がどうなうと僕には関係のないことのように思えてくる。欲望の炎は消したと思っても気が付くと風の中で揺れている。

僕はなんだか自分がとても疲れているようを感じる。どこか心の休まるような場所に帰りたくなる。

昔流行った音楽が流れる居酒屋でのんびりと酒でも飲みたいような気分になつてくる。着物を着たやさしいおかみさんみたいな人が僕にお酌をしてくれて、僕の下らない話をただ聞いてくれる。そこでしか僕は本当の自分の気持ちを話せない。誰にも言えない秘密をこつそりと心の穴にしまいこむように僕はそこで心を解いてゆく。心を隅々まで広げ、体の中からストレスを追い出すのだ。温泉にも行つてのんびりと日々の疲れを癒す。おいしいものを食べて何もかもを忘れ、バカみたいにカラオケでもしよう。

でももちろんこの世界にはそんな場所はもう存在しない。それは

僕の記憶と共にどこか別の世界に消えてしまったのだ。僕はもうそこに戻ることはできない。僕は自分が全くアパートに戻る気分ではないことに気が付く。クラブに行ってビールでも飲もう。今夜はヤケ酒だ、と僕は思う。

いつものようにクラブの入り口のドアを開く。クラブの中にはケミカルブラザーズの「カム・ウィズ・アス」が流れている。

クラブの席には誰ひとりとして座っていない。客一人いない。どうしたんだ?と僕は思う。中に入つていっても誰一人いない。カウンターにも、テーブルにも誰もいない?そして大音量の音が僕の耳で木霊する。一体どうしたのだろう?この前来たときはこんなことはなかったのに。僕はだんだんと恐ろしくなってくる。

そして僕がダンスフロアのところに行くと原因がわかる。フロアでは大勢の人が取り囲むようにして一人の男が踊っているのを見ている。まさにクラブ中の人々がその男の踊りを見ている、という感じだ。

そのダンサーは「スペース・イズ・プレイス」とプリントされた

真っ赤なティーシャツを着て、黒のぴったりとしたズボンを履いて踊っている。髪は短く彫刻のような整った顔をしている。まるでセックスアピールという香水を付けているかのようにダンサーからはまわりの人々とは全然違う匂いが、雰囲気が漂っている。僕は人々の壁を掻き分け前に進んでようやくその踊りを見ることができる。

彼はとてもリラックスしているように見えるけど、背筋をピンと張つて、男性的な甘いカーブを描いた顎をグッと引き、とても見事に踊っている。何かが完結されたような踊りを。男が手を伸ばすと音と空間の波がそこに生まれ、男がステップを踏むと大地が時間を止め、くるりと回ると風がそこに生まれる。そこには踊っている男の人生というものがありありと浮かび上がっている。その悲しみと孤独と生きるというエネルギーを僕はそこから読み取ることができる。

僕は、というよりも、観衆の誰しもが、このクラブ全体がその踊りに釘付けになっている。

それからスクウェア・ブッシュヤーの「テトラ・ソニック」に音楽が変わる。

ダンサーはまるで人間の歴史をなぞるようにして、その音のラインを崩すことなく踊り続ける。そこには間違いない人ではないものが含まれている。人間を超えたもの、といえばいいのかもしない。ダンサーはまるでヨガ・ダンスのように踊る。数々の音の渦の中から的確に一本のラインだけを選び出し、それを丹念になぞっているようにも見える。誰もがそれに目を奪われている。このクラブの中にいることをすっかり忘れてしまうぐらいに。自分がどこにいるのかもわからなくなるぐらいに僕と観衆は男の踊りにただ見とれる。

やがて音楽がだんだん小さくなつてきて音楽が止まりそうになる。そしてアナウンスが流れる。

「みなさまありがとうございました。彼がこのクラブの唯一の公式ダンサーであります。華麗な踊りを楽しんでいただけたかと思います。彼の踊りはこの辺でお終いです」

「えー、ふざけんじやねー、もつとやれー」と観衆から野次が飛ぶ。

「またの機会をお楽しみください。それでは最後に大きな拍手をお願いします」

アナウンスがそう言つと、みんなが一斉に拍手をする。男は丁寧に頭を下げる。人々の壁を搔き分けるようにして消えてゆく。

「すっげえ、踊りだつたなあ、オレ鳥肌立つちやつたぜ」と言ひながら僕の隣を酔っ払いの群れが通り過ぎてゆく。観衆は席に戻つてそれぞれに話始める。ダンスフロアでは彼に刺激されたのか多くの人がそこに残つて踊り続けている。

僕は目に付いたテーブルに腰掛けビールを飲み始める。それにしてもすごい踊りだつたな、と僕は思う。今まで僕は本格的な踊りというものを目の前で見たことはなかつた。それもプロのダンサーの踊りなんか普通に暮らしていく見かけることはない。今日はなかなかラッキーだつたな、ビールを飲みながら男の踊りを思い返す。

「やあ、さつきの踊り見てた?」と僕に後ろから声をかける男の声がする。僕が振り返るとそこにはさつきまで踊つていたダンサーがビールを手にして立つてゐる。

「うー、いいかな？席空いている？それとも待ち合わせかな？」ダンサーは僕にそう言つ。

「いいシスよ、ぱっちり席空けておきました。ビーナ、良かつたら座つてください」と僕は言つ。それでもなぜこの男は僕のところに来たのだろうと不思議に思つ。

「やあ、カエル、君、だよね？」

「そうっス、オレはカエルです。通称、暇の達人です。ビーナしてオレのことを知つていいんですか？」

「君のことは噂で聞いてるよ。このクラブの常連だろ？その変の情報ぐらいは入るさ。私もここで働いているからね、イチオウ。でも、気が向いたときにしか踊らないけどね」

「へー、そんなんで飯食つていけるつていうのもつらやましいなあー。オレなんか仕事探しでクタクタつて感じなんですよ」

「そうか、君は仕事を探しているのか？うん、良かつたら僕がこのクラブに口を利いてもいいよ。何か君にできる仕事があるかもしれない。まあ、君の運が良ければ、ということだけね、もちろん」

「エッ？マジで？マジっスか？オレに仕事？でも、そんなに簡単に決めていいのかな。オレってかなり長い間仕事探しで迷つているんです」

「でも私のコネクションもそんなに強くないからあまり期待しないほうがいいかもしない。できることなら仕事は自分で見つけたほう

うがいいもんな。そう、それよりね、君はなにか探し者をしているんだって？」

「そう、オレってさ、この世界のことがまだよくわからないんだよね、実際のところ。頭が悪いだけなのかもしれないけど、この世界のどこかにある記憶のスイッチを探しているんだ」

「ふーん」とダンサーは席に座り、ビールを飲んで答える。額にはまだじつとりとした汗が浮かんでいる。彼はそんな長い間踊つていたのだろうか？

「カエル君、私が知つてのことならいくつか教えてあげることができるかもしね。でも私の言つこともただの参考程度に思つてくれればいい。人それぞれ考え方というものは違うからね。でも少しくらいならこの世界のことを教えてあげることはできるよ。君がそれを聞きたければ、といつことだけだ」ダンサーはそう言つ。

「オウ、オレつて何度も言つようだけど、暇の達人なんだ。人の話を聞いているのは好きなんだ。もちろんおもしろい話のほうがいいけど」

「そうか、私もちょうど踊り終わった後だし、少しカエル君と付き合つことにしよう。いいかい？」

「オーケー。オレなら大歓迎だ」

「僕はトニーだ」とトニーは言つて僕にウインクする。僕はそこにはか不思議なものを感じる。とても人の良さそうないい男なんだけど、もしかしたらトニーはゲイかもしれない、と僕は思う。あれほど人々を魅了するダンスができるのだから特別なにかが潜んでい

るのかもしれない。でも相手がゲイであるうとなからうとなんとかせんじていられない。僕らは握手を交わす。

「トリーの国出身?」と僕は聞く。

「やうやうとは、私にもわからない。もう先祖もずいぶんと混ざってしまったからね。とりあえず、カンパイしようじゃないか?」

トリーは「カンパイ」と日本語で言う。

「今、カンパイって言つたよね?え?日本語話せるの?」

「少しひらこはね。簡単なもんだ。どこの国に言つても大体使う言葉つて言つのは同じだからね。自分のやることの必要最低限さえわかればどこの国にいつてもなんとかなるものさ。私の場合はビールをよく飲むからそれで知つていたわけだ、それじゃあ、カンパイ」

やう言つて僕とトリーはグラスを合わせる。

「ところでね」とトリーはうまそうにビールを飲むとそう言つ。「スイッチの話だつたよね。うーん、でもうまく言えないな。とにかく一度スイッチを切る、そしてまた入れなおす。そうするとプレイバックされる君の世界は今までとは全く違うものになる。そこには新しい記憶が再生されている。君はまだそこから目覚めたばかりだからまだこの世界のことをよくわかつていなだけかもね」

「えー、オレつて目覚めたばかりつてことないぜ、もうこの世界に来てからずいぶんと時間は経つてると感づな」

「なんていうか、それはあまり時間とか場所とか、そういうものには関係がないことなんだ。やっぱり身体を動かしてみないとわから

ないこじつていうのがこの世界にはたくさんあるんだ。といひでカエル君、洞窟に入ったことはあるかい？」

「洞窟ですか？観光旅行とかでいったことはありますけど

「そんなんじゃない。もつと本当の洞窟だよ。狭くてじめじめして  
いて本当に真っ暗なところや」

「そんなどこにまは行つたことはないな。システムのなかにあつた  
かな？そんな選択肢が？」

「システムのなかにはそんなものは入つていない。それはどこから  
でも行けるし、どこでもないとこなんだ」

「どこからでも行けるし、ビリードもないところ？ですか？」なんだ  
かなぞなぞみたいだ。

「そんな洞窟に行くことを想像してみるんだ。最初に入つたときは、  
ああ、なんでオレはこんなところ来ちまつたんだろうな、と少し後  
悔するような洞窟。ねえ、カエル君、もう一杯ビールを飲まないか  
？良かつたら今夜は私がおどるよ、私も踊つた後は少し興奮してベ  
ラベラとひとりで喋つてしまつ癖がある。とにかくビールどうだい  
？」

「もちろん、有り難くいただきます。このビール恩は一生、このカエル、  
忘れることはありません」

「たかがビール一杯じゃないか。私が取つて来るからカエル君はこ  
こで待つてね」とトニーはカウンターのまづに向かつてゆく。

クラブの中にはザ・ストーン・ローゼスの「ブレイキング・イン・トゥ・ヘブン」が流れ始める。

トミーがテーブルに戻ってきてビールを僕に手渡してくれる。僕とトミーはもう一度カンパイする。

「カンパイ」と僕とトミーは言つ。

「やうやつ、やつぱり、何の話だつたつけ？」

「えーと、洞窟がどうのいつのって話じゃなかつたかな？」

「あ、そうか、そうだったね。やつ、そして君はそこに行く。観念とこう名の洞窟の中に足を踏み入れる」

曲が変わって辺りが静かになつたので、トミーの声はとどまつた。きつと聞こえる。まるで耳元で囁いているみたい。

「やつには矛盾といつ名の魔物がいて君が中に入つてゆくのを拒もうとする。君が見たどんな怪物よりも恐ろしい、おどき話でてぐるお化けのよななものだ。まだ洞窟の入り口だからうすらと外の光は中を照らしている。そしてぼんやりとした影がさらに濃くなつたあたりに君はその怪物の息吹を感じる。それは良く見えないからさらに君は恐ろしくなる。君の息がいつの間にか止まつていて。君は何とか一息深呼吸すると洞窟の中に向かつて全速力で走り出す」

トミーはそこでテーブルに置いた煙草を取り、デュポンのライターで火をつける。ライターの蓋を開けたときに独特の「ンイイ」という金属音が響く。まるで何かの合図のようだ。

「後ろからはその怪物の恐ろしい咆哮が聞こえる。それは狭い洞窟の中であるで君の肌を引きちぎるかのように木靈して君の耳に届く。その咆哮に混じってその怪物が後をつけてくる音まで聞こえてくるんだ。君は必死で足を動かし、ひとまず怪物のことはなんとか頭から振り払って走ることだけに意識を集中させる。君はどんどんその洞窟の内部へと入ってゆく。するとその洞窟はだんだんと小さくなっていることがわかる。君はもう少しだ、と思つてさらに走る。だつて狭くなれば怪物は奥へは入つてこれないからね。君は走る。もうマラソンのゴールのテープを切つてしまつたかのようにあとはゆっくりとね。もう後ろを振り返つても怪物が追つてくる気配はない。それはどこか遠くに消えてしまったんだ、と君は思つ。そして君は立ち止まる」

トニーは煙草を吸う。銘柄はインドネシア産の「ガラム」だ。独特の匂いが僕の鼻につく。

「さて、君は逃げ切つた。なんとかね。でもここからが問題なのさ」  
トニーは煙を吐き出し、僕のほうを見る。僕は黙つてトニーの言うことを聞いている。

「ここで初めて君は気がつくだろう。君がとんでもない洞窟の奥にひとりで迷い込んでしまつた、ということに。君は改めて君がどうゆう状況なのかを考えるだらう。君の大事なケータイはこの洞窟の中ではどうやつても電波は届かない。電波が届かないということは君の持つているものがすべて使えなくなつてしまつ、ということさ。それがどんなに大変なことか君にもわかるだらう。パソコンもできない、音楽も聞けない、本も読めない、ゲームもできない、もちろん漫画だってもつてきていない。ケータイは電源が入らずにただの鉄くずになつてしまつ。これは今まで君が生きて味わつたことが

ないような状況だ。ものすごく深刻なトラブルだ。でもひとつだけ君には望みが残されていた。そう、君は煙草を吸つようになつただる。「

僕は頷く。

「わ、君は煙草を吸う、イコール、ライターを持っている、ということさ。君はポケットから必死の思いでライターを取り出す。そして君は火をつける。そうすると洞窟の内部が浮かび上がつてくる。ライターといつてもこの時代のライターだからね。ものすごく明るい。夜の学校の白々とした不気味なライドぐらいに明るい。じめじめした岩肌や、足元を流れる汚いどぶ水のよつなももの君の目にに入る。おまけに気持ち悪い小さな虫まで歩いている。でもそうゆうものも真つ暗闇よりはまだましだと思つてあまり見ないようにする。しうがない、ここまで来てしまつたんだ、と君は思う。

君は死ぬほど喉が渴いているけど、落ち着くためにとりあえず煙草を吸う。とにかく君は逃げ切つたんだ。まだ息も少し乱れている。君は煙草に火をつけてそれを吸う、吸うことによって自分が今どれだけパニックになつているか改めて気づくだろう。

どうしよう、ケータイはもう使えない、君が共に過ごした時間がゆっくりと遠ざかつてゆくのを君は感じる。パソコンのメールも送れないし、インターネットも、電話も、メールもできない。君の好きな音楽も聞けないし、テレビも見れない、あのチーン店に行つて飯をテイクアウトすることもできない。君は何かに対して怒りたくなつてくる。なんでこんなところにオレは来てしまつたんだううと思つ。う、そして君ならここからどうする?」

「オレなら……」と僕は少し考へる。「おやりくとにかく

奥に進むでしようね。後ろには戻れないし、もう少し先に行けば出口があつて、最悪の場合でも電波が届くところにまで行けばあとはなんとかなるんじゃないかな?」

「うそ、まあ、そう思つのが自然な流れだらうね」とトニーは呟つ。「そして君はとにかく先に進んでみよつと想つ。そのじめじめして汚い洞窟を君はすすんでゆく。まるで地下鉄の駅ようにドブ川のような匂いが君の鼻に入つてくる。でも、まあ、しようがない。進むしか道はないもんね。そう思つて君は再び足を前に進める。そして悪夢とここのはここから始まる」

「アーチーちつぱつとドブ川をまちつ一度煙草を吸い、それを灰皿の中になじ込む。

「君はちつして進んでゆく。その汚くてじめじめした洞窟をね。君は歩き始めたことによつてもう少し落ち着きを取り戻す。頭の回転もまともになつてくる。もう自分はそんなにパニックになつていな、そう思つ。とりあえず先に進んでみればなんとかなるかもしない。出口が見えてこればラッキーだし、ケータイが電波をキャッチしたその瞬間には自動的に電源が入るだらうと思つ。そうすればもう助かったようなものだ。外と連絡さえとれればここからすべにでも出るだらうことが出来るだらう。

そう思つて君は前に進んでゆく。それでもじめじめく5分ぐらい、10分ぐらい一人でその洞窟を歩いてみてもケータイの電源は死んだままだ。道は一本道になり少しずつ狭まってゆく。その洞窟の中で君の耳に届くのは不気味な君自身の歩く音だけだ。さて、君ならどうする?」

ひどい話だなあ、と僕は思つ。そんなところに迷い込んだらやうだ

パニックになってしまつかもしれない。

「やう、君は再びパニックに陥つてゆく。だんだんとその気配を背中に感じるようになる。これはまずいな、と思い始める。ひとまず落ち着かなくてはと自分に言い聞かせる。そうするとまた君の目の前に矛盾の怪物がまた戻つてくる。壁だ。その洞窟は先に進んでみたけど、そこは行き止まりだつたんだ。そして君の大事なケータイはまだ死んだままだ。君はひどいパニックに陥つていてことに自分で気がつく。死んだままのケータイと壁。

君は今歩いてきた道を戻つてまだ洞窟が比較的広かつたところにまで戻つて必死で君のケータイを振るだらう。とにかく少しでも電波をキャッチしてくれれば君は助かるんだと。でも無駄だ。ケータイは死んだままだ。ひどい洞窟に入りこんじやつたなと君は思つだらう。君はさんざん疲れ、汗をかき、ぼろぼろに身体を汚した上に、結局その洞窟の一番奥の壁の前までやつてくる。『もうダメだ』と君は思つ。君はそのままにして、そしてその自分の声を聞く。その音はまったく自分の声には聞こえない。自分が言つたんじゃない、と君は思つ

そういうのって最悪のパターンだなと僕は思つ。

「やう、これが悪夢といつものなんだ。そして君は疲れてしまつてその洞窟の中で眠つてしまつ。そうして君は深い、深い眠りにつく。もう何もかもが死んでしまつた後なんだ。あとはもつ眠るぐらいしか残されていないからね。そうして君は眠りにつく。でも結局それがどこであろうとも眠つてしまえば君の意識は別の場所へと運ばれて行く。夢のなかだ。君は夢の中を今度はさ迷うことになる。そしてそれはあらゆる場所であり、あらゆる時間なんだ。そうして君は何かの音を聞く。何かが君の意識を叩いて起こそうとしている。そ

れはひとつ鐘の音なんだ。そこにはすべてがあるし、すべてがない

クラブの中にはトッド・キヤン・ダンスの「サモミング・オブ・ミコーズ」という曲が流れ始める。

そこでは誰かが踊っている。誰だ、と僕は思つ。僕は意識を凝らしてその影を追おうとする。今一瞬何かが見えたような気がする。

「君はそこではじめて君の中を流れる水の音を聞く。それは地底の遙かそこに眠る古い、古い記憶の水だ。君はそこで初めてその水の意味を知るだろつ。その水を口に含み、匂いを嗅ぎ、新たな生命の記憶を取り戻す

影だ。

僕の影がそこでは躍つている。

なぜこんなとこで影が躍つているのだろつ。

違う、影なんかじゃない。

コトカだ！

コトカがそこでは踊つている。

コトカは必死で踊つているが、コトカの目からは大量の涙があふれ出でている。どうしてこんなにも涙が出るのだろうといわんばかりに泣いている。しかしコトカはとても上手く踊つている。まるで音そのもののようにコトカは踊つている。コトカは音の渦の中を華麗に

舞う。約束の地に火を灯す聖靈のよしよし、まるで大地と空を繋ぐ妖精のように華麗に踊っている。

「カエル君？」

僕はその音で我に返る。

「カエル君？ 大丈夫か。涙なんか流して、酔っ払っているのかい？」

「今夜はいろいろあつて大変だつただろ？ もう帰つて寝たほうがいいんじやないか？」

僕は手で自分の流している涙を拭う。トミーは僕が涙を流したためか僕に対して何かしらの同情心を抱いているみたいだ。僕はもう一度コトカの姿をフロアのなかに探そうとするけどコトカはいつの間にかいなくなつてしまつている。

「いや、自分でもなぜ泣いているのかわからないんです。きっと少し疲れたのかもしない。このところいろいろと考えることがあるから」 そう僕は答えて席を立つ。

運命の歯車は大きな破壊的な音をたてて次の歯車をしつかりとくわえ込み、それがまた次の歯車を動かしてゆく。そしてその歯車は延々どこまでも繋がりやがては大きな鐘の音になる。

部屋に戻るとケータイの電源を確かめる。ケータイの待ち受け画面にはいつものように一枚の絵が写されている。会社の面接に行き、トニーに出会ったおかげでクタクタに疲れている。もう何も考える力は残っていない。そのままベッドに倒れこむと眠ってしまう。

朝方日を覚ますとコトカはどうしているんだろ？と思つ。昨日クラブで踊つていたのは本当にコトカだったのだろうか？僕はコトカの部屋のドアをノックする。

「おーい、コトカあ、まだ寝てるのか？」

返事はない。

僕はもう一度ノックする。

「おーい、コトカ姫様、寝ていらっしゃるのでしょ？ とかとお伺いしているではありませんか？」（ちらはレポーターのカールちゃんでーす、お休みのこと？）、あ、まことに、あ、申し訳ござりませえええん

返事がない。

「おー、コトカ、寝てるのかって聞いてるんだけど？」

もう一度ノックする。

「コトカあ、出て来いこのヤロウ、オレ様は借金取り、じゃなかつた、オレ様は借金持ちなんだ、頼むから出てこよお

僕はドンドンと扉をノックする。

どうなつてんだ？

「このクソヤロウがあ、デテコイー！出て来い！おまえ天才、志村ケンさん呼んでもいいのか？あの人、只者じゃねえんだぞ！バカ殿なんだぞ！なんなら北野タケシ監督に来てもらつてもいいんだぞ！あの伝説のコマネチが来たらもう誰も止められないんだぞ！翼クンと岬クンのゴールデン・コンビよりもすごいことになるかもしないんだぞ！それにいい加減にしねえといつもみたいにエロビーナオのネタ話始めちゃうぞ！」

「バン」

という大きな音がして扉が開く。そこにはコトカが立っている。とても寝ぼけた顔をしている。でもこぞいじつして見るとやつぱり口

トカは美人だ。いい女は何をしていてもいい女なんだな、と僕は思つ。今では長くなつた髪が良く似合つ。

「何よ、寝てたんだけど？」

「いや、悪い、コトカ姫、無理やり目を覚ましてしまひまして、その上貴重なお時間を……」

「そんなことはいいから、一体なんなの？」

「昨日の夜にクラブに来てた？」

「えー？ なんで、私がクラブに行かないって知つてるじゃない？ 行かないわよ」

「そうか……やつぱり昨日の夜はかなり酔つ払つていたのかな？」

「そんなこと知らないわよ、良かつたら私も少し眠りたいんだけど、いい？」

「オーケー、悪かつた。気の済むまでお眠りあそばせ、くださいませええ、おひめさま。そして姫のお好きな高級ブランドの天然素材ローションを体中ベチョベチョに塗りまくつて、ああ、もうダメ、アハン、イヤン、そんなことしないって言つたじやない、オー・イースター・オー・ファックミー・アアーン・ファックミー・イックウウつて……」

そう言い終わる前にコトカは扉を閉めてしまつ。それと同時に頭の中にあるアイデアが閃く。

そうだ、パーティをしよう。

それはそれで何かのきっかけになるかもしれない。いつまでもこうしてダラダラしているわけにはいかないし、僕もなんでもいいから仕事をしなくてはいけない。とりえず長かった僕の生活にも一応の目的ができた。パーティをしよう。そしてそれが終わったらどんな仕事でもいいから、もう選ぶことはあきらめて、鉛筆ころがしでもして、仕事を決めよう。僕はそう思う。

それがどんな仕事であろうともこれから先僕は死ぬまで延々と働き続けなくてはいけないだろう。そう思つと胃の中から反吐のようなものがせりあがつてくるような気がしてくる。毎日、毎日死んだほうがましだと思いながら電車に乗り、勝ち目のないストレスという敵と踊りながら朽ち果てるまで足を動かし続けるしかないのだ。一年に数回しかない連休を楽しみに日々を送り、その連休にしたところでバタバタしている間に終わってしまう。年に2回のボーナスは僕に何も与えてくれはしないだろう。大きな楽しみも悲しみもないごく平凡な人生を送るのだ。

そんな人生を送るとわかっているんだからその前に最初で最後かもしれない大きなパーティを開こうと思う。それは僕の人生のクライマックスになるかもしれない。それはただの花火のようなものだ。その夜だけは人々を楽しませ、日常という枠を打ち壊すかのように記憶の燃えカスとなる。それは心の奥底に眠る夢を焦がし、風に吹かれて闇の中に消えてゆく。次の日には人々はそんなことがあったとこに記憶しているだろう。

でもそれはささやかなものではあるかもしれないけど、この僕の人生の大きな転換期なのだ。多くの人々が暮らすこの砂漠のような町

のなかで僕はその砂の一欠けらにしかすぎないかもしない。それでもそれは誰のものでもないこの僕の人生なのだ。誰にも理解されないかもしれないけど、それは僕にとって特別なものでありたつたひとつしかこの世界に存在しないものなのだ。

僕は自分を特別な人間であると思ったことはない。この世界にはさまざまの人々がいる。それぞれの役割がありながら交換可能なペルソナのようなものを共有している。誰かが誰かに摩り替わり、そしてあくる日に僕はその中のひとりとして存在している。この世界の中には僕のわからないこともまだたくさんあるけどそれはまるで空に輝く星のようにそれぞれの人生としてこの世界に散らばっている。そう考えると僕もまた特別なものの中に属しているということになる。

そんな僕のための一生に一度の特別なパーティ。それをやつてみようと思う。何もかもを投げ捨て、サムライ魂を世界に発信するのだ。僕は当面パーティのことだけに意識を集中するよう心がける。

その夜にクラブに行つてパーティを開きたいのだけど、会場をつかわせてもらえないかと馴染みのバーテンダーに聞いてみる。

「それはオーナーに聞かないとわからないな。ちょっと待つてくれ」彼はそう言つとどこかに電話をかける。オーナーか、と僕は思う。こんな豪華で馬鹿でかいクラブのオーナーつていうのは相当金持ちで、やくざなんかも絡んでいて、いかにも怖そうな人なんだろうなと僕は思う。僕はカウンターに立つたまま少し緊張しながらビルを飲んで待つていると「カエル君」と僕を呼ぶ声を聞く。

「やあ、カエル君。久しぶりじゃな」とそこにはジョンが立っている。

「あれ? ジョン、久しぶりじゃないか、マイター! 元気だった?」

ジョンは相変わらず短パンによれよれのティーシャツを着て、まるでトレードマークのようになってしまった。ジロッキを持つてこる。

「どうしたんだ、ジョン。最近見かけなかつたけど?」

「ワシもなかなか忙しくてな、カエル君も元気をつけて何よつじや。とにかくワシに何か話があるんじやろ?」

「はあ? ジョン。ビンゴの天才にしては的外れな」と言つた。今は田せりよつと用事があつて、人を待つているんだ

「だからワシのことはじやろ?」

「違うよ、マイター。オレはクラブのオーナーを待つているんだ

「んなわけないよな

「だからワシのことはじやろ?」

「違うよ、マイター。まさかジョンがここにオーナー、ってや

「だからワシのことはじやろ?」

「そんなわけねえええだらぬおおおおおお。もしかしてジョンってすっげえ金持ちなんじやねえかあああああ。俺たちのコンビはどうなるんだ? オイ、今すぐコムジン呼んでくれ。ビルでもいい

からオレをこの世界から連れ去ってくれ

「まあ、まあ、カエル君。落ち着いて。確かにワシは貧乏ではないが、見ての通りそんなに贅沢な暮らしをしてるところわけでもない。とにかく話ところのは何じゃな？」

「オイ、マイト。金、金ええ、カネ、貸してくれ……っていうのは冗談だよ。そんなこと頼んで友情を台無しにしたくないからな。できればここでパーティを開きたいんだけど、会場を使わせてもらいたいんだ。一晩だけでいいからや」

「願つてもないカエル君の頼みなら引き受けよう」ジェフは嬉しそうにそう言って笑う。でもジェフってひょっとしたらただの酔っ払いではないのかもしれないと思つ。

「本当は会場費もバカにならんのじゃが、カエル君には世話になつたからな。ワシからの条件を飲んでくれればそれは大目に見よう

「なんだよ？ やけにこの世界は条件付だな。もつとシンプルにいかないのか？」

「簡単なことじやよ、カエル君。カエル君がパーティでD&Oをするけど。そして必ずオリジナルの曲を一曲作ること。それが条件じや」

「まあ、そのくらいならいいけど。それにしてもジェフが、まさかなあ、このオーナーなんて」

僕とジェフはそれからビールを飲みながら話をする。突然の再会だつたけど、久しぶりにジェフに会えて楽しく会話することができ。仕事探しのことも、借金のことも、世界のこともすべて忘れて。

そして3週間後の満月の夜にパーティーをすることになる。それまでに僕は曲を作らなくてはいけない。

それからは部屋に引きこもって延々と曲作りに励む。曲を作るのに必要な機材を購入し、朝から晩まで一心に曲作りを始める。でも不思議とそれは苦痛な作業ではない。まるで記憶の奥底に眠っているものを引き出すかのように僕はコードを巧みに操ることができる。ルートとなる音を作りそれにドミナント、サブドミナントを重ねてゆく。そしてルートへと戻る。僕はスケールに合わせて音を配置し、マトリックスのような無限の荒野で自分自身の欠片のようなものを繋ぎ合させてゆく。

何かメロディーの基本となる曲を決めるにこだわる。僕の新しい出発のお祝いとして何かおめでたいものがいいと思う。新しく再生へと導く道しるべとなるようなメロディーだ。散々迷った末に日本の正月によく耳にする「春の海」を選ぶことに決める。琴と尺八の絶妙なバランスを保つこの美しいメロディーを基本にしてそこにさまざまな音を加えてゆく。加えては削り、そしてまた加える。その繰り返しだ。

曲の中にオリジナルの歌詞を入れてみることにする。何かのメッセージのような歌詞を書いてみようと思う。それは誰にも理解されないかもしれない。でもそれはただのメロディーにしか過ぎない。僕はその曲に「武士道・イズ・デッド」という曲名を付ける。

それからクラブで知り合った友達やDJ達に声をかける。パーティーを開くのだけれど良かつたら参加してくれないかと友達に持ちかける。とにかく僕の葬式のようなパーティーなのだ。そこに花を添えるためにも少しでもいいから多くの人に楽しんでもらいたいと思う。このさまざまな人が暮らす広い世界と比較すると僕のためのパーテ

イなんて屁のようなものかもしれない。でも僕の人生のフィナーレとして出来る限り大きなイベントにしてみようと僕は思い立った。

「フルムーン・パーティ！ウエルカム・トゥー・ヨーバース！」と、パーティのタイトルを決め、パーティのチケットをインターネットで流し始めた。でもそれが思つてもみなかつたような大きな騒ぎになつてしまつ。

パーティの打ち合わせのためにジエフのところに行くとジエフはすでにチケットは完売し、映画監督やミュージシャン、生死を問わずすでに世界中がパーティのために動き始めていると言つ。インターネットのホームページを開くとそこにパーティの広告があり、町を歩くとパーティのポスターが至る所に張つてある。あの「ブラック・サン」を作つた天才科学者も現れるという噂まで流れ始めた。一体これは何の騒ぎなのだろうと僕は思う。僕はただの平凡な人生を望んでいるまともな人間なのだ。どうしてこの世界はいつも知らない間に話が進んでしまうのだろう？

僕はジエフと会つてパーティの綿密な打ち合わせをする。図書館に行き、日本の文化について調べてみた。お祭りというものは精霊という風が通り過ぎるときの一種の儀式のようなものであることがわかつた。僕は懐かしい日本のお祭りというものを再現できないかと考え始めた。

みんながこの日ばかりは着物を着て外を歩くことを許された特別な一日のように日常の外に飛び出してくる。子供たちは買つてもらった綿菓子を誇らしそうに舐め、クレープやお好み焼きなんかの屋台がずらつと並んでいる。それぞの屋台には裸電球が灯つていて、そのぼんやりした光はまるで夢の一部のように夜の闇に紛れ込んでいる。辺りには人々が日々の疲れを癒すかのように特別な笑顔を顔

に浮かべ、人が踊っている姿を見ている。そこには僕の求める懐かしい匂いがある。しばらく顔を合わせていなかつた友達なんかにバツタリと出会う。まるで服を一枚ずつ脱いでゆくかのように、僕は僕自身へと戻つてゆく。かつての記憶という向こう側の世界へ。

いよいよパーティ当日、朝日を覚ますとコーヒーを片手にクラブに向かう。クラブの扉を開くと音楽が鳴っていない。それどころかクラブの中は昼間のように太陽の光がさんさんと降り注いでいる。僕が知る限りこのクラブはいつも夜で大音量と共に人々が踊り狂つていた。僕はその静かで大きな空間に驚いてしまう。クラブの中はすでにパーティの準備が整つている。屋台が並び、金魚すくいや射的のゲームなんかの店も見える。ダンスフロアには大型のステージが用意され、何段にも積み重ねられた大きなスピーカーがまるで壁のようにならって立っている。僕が今夜ここでDJをするのかと思うと気が遠くなる。僕はステージの横にジェフが立つているのを見つける。

「おい、ジェフ」と僕は呼びかける。

「なんじゃ、カエル君か？よく眠れたかい？いよいよ今夜じゃな」と相変わらずジェフはビールジョッキを持ったままやう言つ。

「なんだよこれは？こんな馬鹿でかいステージ作りやがつて。どこでどうやつたらこんな話になるんだよ？オレは身内だけのひつそりしたパーティで良かつたんだ」

「まあ、カエル君。でもな、今回のパーティはとても大きなものなんじゃ。このクラブでもかつてない人が集まる。それならそれなり

のステージというものが必要なんじゃ。踊るために命も捧げる。それぐらいの覚悟で今回はワシもがんばつておるからの」

「それは嬉しいんだけどさ。はつきり言って話が大きすぎるんだよ。オレは日本人だぜ。ステージに上つた途端にスナイパーに狙われるかもしないんだぞ。この世界には頭のおかしい奴がいっぱいいるんだ。日本人というだけで恨みを買われるかもしれない」

「それは大丈夫じゃ、カエル君。ワシもこここのオーナーじゃからな。そんなことはここでは起こらない。何があつても絶対にな。ある意味ではこのクラブは特別な場所なんじゃ。誰しもが幸せを求めてこのクラブにやつてくる。ワシとカエル君のコンビなんじゃ。ワシを信頼して、今夜は一発大きな花火を夜空に打ち上げようじゃないか？」

「ああ、マイト。ビンゴの天才と暇の達人のコンビだからな。バツチリ決めようぜ」そう言って僕とジェフは一緒にビールを飲み始める。とにかく今日はパーティなのだ。一生に一度ぐらい一日中酔つ払つていても誰にも文句は言われないだろう、と僕は思う。

僕はケータイのメモリーに入つているパーティのプログラムを再確認する。パーティは夕方から始まり、そして明日の朝に終わる。僕は友達のDとロー・テーションを組み、僕の出演時間を決めておいた。僕は夜中の1-2時にDをすることになつていた。夜中の1-2時というのはシンデレラが会場からいなくなる時間であり、要するに最高潮の盛り上がりの時間帯なのだ。僕はそんな時間に出演したくなかったけど、その時間帯はスケジュール上穴が空いていた。要するに僕の役割は繋ぎをするということなのだ。そんなに神経質になることはない。失敗したつて死ぬわけではないのだ。

やがて太陽の光をゆっくりと月が覆い隠すすくかのよう夕方がやつてくる。美しいオレンジ色の夕日がクラブの中を通り過ぎていった後いよいよ会場がオープンする。会場がオープンすると同時にたくさんの人々がクラブの中にやつてきてあつという間に朝の地下鉄のような雰囲気になる。どこを見ても人しかいない。

それに合わせてDJが音楽を流し始め、クラブの中はパーティ独特の騒がしさに呑み込まれてゆく。人々は踊り始め、そして始めは小さな渦であつたものがだんだんと大きくなつてゆく。そして文字通りパーティーの最高潮という場面で僕のDJの出番がやつてくる。

ダンスフロアはものすごくホットになつていて。はつきり言つてあまりやりやすい状況ではない、と僕は思つ。僕が下手なDJをすれば会場の雰囲気はすべてぶち壊しなのだ。ミスをするとクラブ全体を白けさせてしまうことにもなりかねない。僕はとにかくこのままこのホットな会場を維持して次のDJに繋がなくてはいけない。

僕は自分がナーバスになつていてに気が付く。

でも、と僕は思つ。

ここは世界平和のための逃れられない運命なんだ、と自分に言い聞かせる。僕はランゴーボールのゴクウのみたいに「みんな、オラに力を貸してくれ」とつぶやく。

僕は緊張しながらDJのブースに行き、僕の選んだ曲を会場に流し始める。

ダンスフロアにいる人々は物凄い熱気の渦のなかで踊り狂つてゐる。人々が発するフェロモンのようなものが空中で渦となつてクラブ

ブを取り囲んでいる。その渦が僕をどこかへ吹き飛ばそうとしている。僕がどこに辿り着くのか、それは神のみぞ知るという感じだ。

僕は少しずつ自分の足を動かし始める。リズムに合わせて、足でステップを踏んでゆく。僕の中の何かがそれに合わせてゆっくりと持ち上がるのを僕はどこかに感じ始める。僕は音楽に耳を澄まし、リズムを身体に馴染ませるようにして踊り始める。僕はもうバカなカエルではない、と自分に言い聞かせる。僕は誰だ？ そう自分に聞いてみる。

僕はステージの上で踊り始める。僕はクラブのライトの中で、さまざまな色を網膜に映し出す暗闇の中で踊っていることに気が付く。

そして僕は真剣に踊り始める。

「あ、カエル君踊っているわよ」と女の声がどこから聞こえる。でも僕はそんなこと気にしない。僕には自尊心の欠片も残っていない。僕はそれどころではないのだ。僕はここに一度だけ自分を取り戻すチャンスを作ったのだ。僕は真剣に踊っているのだ。

そして僕は踊り続ける。足を動かし、腕を振り、背筋をピンと張つて。

やがて曲が入れ替わり僕の作った曲「武士道・イズ・デッド」が

会場に流れ始める。

「……だ、ここで踊るんだ、と思ひ。

音楽が鳴り止んだら

一瞬にして世界が沈黙に包まれた鐘の音を聞いたら  
すぐに足を動かすんだ

その鐘の音は

光と闇が一匹の巨大な怪物となつて  
おまえの何かを食いつぶす

メデューサの餌食になるまえに踊りだせ

ダンス ダンス

踊りだしたら

おまえの足はもう止まらない

天国と地獄の境界線を

踊り狂うことになるだろう

天国に足を踏み出せば

お前は地獄に行き

地獄に足を踏み出せば

おまえは天国に行く

DNAの螺旋を上り続けるんだ

ダンス ダンス

君は君の鼓動の音を聞く。そして君の中に流れるその水をその手  
で掬う。

すると自分が砂漠の中で踊っていることに気がつく。君の目には  
地平線の広がる砂漠しかみえない。

そこには失われた世界がある。

僕は誰だ?と僕は思う。

そうだ！

僕は僕じゃないか。

と、僕は僕であることに気が付く。

僕はもうカエルではない、僕は僕なのだ、と僕は思う。

僕は記憶をすべて取り戻したのだ。そして僕は思い出す。「ブラック・サン」を作ったのは僕であったことを。「ここは僕の世界なのだ。

ふと気が付くとクラブの会場では音楽が鳴っていない。

あれ？と僕は思つ。

気が付くとクラブにいる人々は足を止めてみんな僕のことを見ている。どうしたんだろう？と僕は急に心配になる。

耳を打つような沈黙があつたあと、会場にいるみんなは一斉に僕に拍手をしてくれる。まるで大きな花火のようにその拍手の音はクラブ中に鳴り響く。

「カエル君、すごいじゃないか！」とダンサーのトニーが僕のところへやってきて言つ。「今の曲、カエル君が作つたんだろう？」

「ああ、オレが作つたんだけど、何か問題あったか？」

「ない、ない、あるわけないじゃないか。すごくいい曲だったよ。みんなびっくりしている、カエル君にこんな才能があつたなんて。私のダンスもカエル君の曲のおかげで新しいステップを見つけることができたよ。これならカエル君の仕事は決まりだな。新しいアンドゥーブランの誕生だ」

そして次のD-Jが準備できたみたいでクラブの中に音楽が戻つてくる。そして人々は楽しそうに踊り始める。

「カエル君、すぐにクラブの連中と契約させるよ。大丈夫、私も推薦してあげるし、オーナーのジョフの友人もあるし、それにこんなにみんなを驚かせるような音楽を作ったんだからクラブの連中も嫌とは言わないだろ？。もちろんカエル君さえ良ければ、ということがだよ」

「もちろんオレはオーケーだ。このクラブで働くのは大変そうだけどなんとかやってみるよ。それにいい加減オレも借金生活からも抜け出したいし」と僕は答える。

とにかくこれで仕事が決まったのだ、と僕は思う。なんとかこれで人並みの生活ができるようになるだろ？。金持ちはなれないかもしれないけど、借金を抱え込んでいるよりは遥かにましだ。

「じゃあ、正式の契約の話はまた今度会つたときにしよう。カエル君はなんだか疲れているように見えるけど？ちょっと休んだほうがいいんじゃないかな？なんなら仕事も決まつたんだし、働く前にどこかバケーションでも行つてくるといい。働き始めたらここんどいつまともな休みが取れるかわからないからね」

「ああ、そうする。それじゃあ、ありがとう」

そう言つて僕とトリーは別れる。それと入れ違いのよつて「トカ  
がやつてくる。

「ねえ、聞いたわよ。仕事決まつたんだつて? とりあえず、おめで  
とう。カエルの仕事も決まつたことだし、良かつたら一人でお祝い  
でもしない?」

「お、なんだよ、そりや? 悪くない提案だな。まあ、お祝い事はい  
くつあつてもあつすざるとこつことはない」

「ねえ、明日あたりどうかしら?」

「別にいいけど。それよつむびい? であるんだ?」

「明日、夜の8時に私たちの部屋のリビングでビーフ。」

「いいよ、まあ、明日な」

「オー、乾杯だああああああああああああああああああああああ  
あ

と僕は言つ。コトカは部屋のリビングでテーブルの向かい側に座  
つてゐる。

「いやー、長かった、ここまで來るのも大変だつたな? いろいろ喧  
嘩もしたし? まあ、オレが変な冗談たくさん言つたからかな  
な、悪かつたな」と僕は言つ。

「いいわよ、別に。でも本当に最初の頃は大変だったわね。もうダメかと思ったもん」

「え？ なんだ、ダメになるって？ ビリもソリ」と？

「結局あなたはここから出ていかなかつたじゃない？ そしてこいつなつた以上はこれからもここで暮らす予定なんでしょう？」

「うん、まあ、ね・・・・・・」

「何よ？ その曖昧な言い方は？」 ではもう暮らしたくないってこと？」

「そうじやないんだよ。違う、そうじやないんだ。なんて言つがね、ちょっと音楽止めようか？」

「別にいいけど、カエルが音楽止めようなんて聞いたことないわね。雨、とか、豚とか空から降つてこなければいいけど」とコトカは僕に微笑む。どうして今までこんなに優しい顔を見せてくれなかつたのだろう？ とゆうよくな優しい微笑みだ。できれば僕は音楽を止めたくない。僕はコトカの微笑を見ているのが好きなのだ。なぜだかはわからないけど、僕は最近よくそう思つようになった。でもおそらくここで僕は止まるわけにはいかない。僕はそこを乗り越えなくてはいけない、たとえそれがどんなに意味のないことであつても。

「大事な話なんだ」 そう言つて僕は音楽を止める。

「いいわよ、なんだか急に改まつて、変な気はするけど・・・・・・」

「僕は」と僕は話し始める。僕の声は静かな一人だけの部屋に木靈する。それは僕が僕であるということの証明であるかのよつにはつきりと。

「僕はこいつして君と向かい合つたためにとても長い、長い時間を浪費してきた。もう信じられないぐらい長い時間だ。時間のことを考えただけで気が遠くなつてしまつぐらいい長い時間だ。いや、つまりね、でも僕はこうして君の前に戻つてきた。そしてこれだけは言えるんだけど、たとえ何があつても僕は君の元へ戻つてくるよ。どんなに僕自身を失つたとしても、そこには美しい世界がある。それは僕自身であり、そして君自身でもあるんだ。でも太陽が昇り始めた地平線と水平線をみたいにそこにはなんの意味もないかもしれない。どれだけ美しく、そして深く僕の心を捉えようとも、そして僕があまりのその美しさに涙を流してしまつたとしても、そこには何も残されていないのかもしれない」

僕はそう喋りながら、コトカがグラスに注いでくれた水のような液体を飲む。

「鳥が歌と共にその美しい世界を舞い、そして風が、そして太陽が、僕の世界をまた新しいものへと変えてゆく。一日が訪れ、風がそれを翼に変えて僕の見知らぬ世界へと旅立つてゆく。そう、僕はまた旅に出なくてはいけない。でもわかつてほしいんだけど、ある意味では僕はそれを望んでいないんだ。そして僕は君とこうしているのが・・・・・なんていうか、幸せ、なんだ。というよりも、それで僕は満足しているんだよ。でも、それでも、僕はやっぱり旅に出なくてはいけない。どうしてかはわからない、僕はどこまでいってもバカな力エルでしかないのかもしれない。でもそれは、わかりにくいかもしれないけど、変えようのないものなんだよ。まあ、なんだか喋りすぎちゃつてるみたいだけど、とにかく何があつても僕は

『THE ALWAYS HAS TWO SHDES』といふ

僕が話しあえてもしばらくコトカは黙っている。沈黙が耳に届きそうなほど、僕の耳はその深く研ぎ澄まされた音を聞く。

「つていうか、それがカエルの考え方でしょ？」とコトカが

「ああ、今度の運営は、もう二度とやる気はないだよ」

「じゃあ、それでいいんじゃない?」

「そうか？ファンキー・モンキー・ベイベー？バツチリだつたかな？」

「とにかくその呼び方はやめてよね。  
嫌なテシヤフを思い出しそう  
になるから」

「オーレー、じゃあ、DJスター、トたな、オレが今、の気分にあつた  
バツチリ良い音楽を選んでやるぜ」

「カエルは、やつぱりそれでいいのかもね？」そう言ってコトカも笑う。僕は一時停止にしていた音楽を再生する。でも今夜は静かにのんびり話をしようと思ったのであまりつるすべもない穏やかな音楽を選ぶ。

「ねえ、私のケータイ知らない？今のうちに買っておきたい音源が

あるのよね

「テーブルの下にあるじゃないか、那儿、そつ、それだよ。でも珍しいね。コトカが音源を買うなんてさ。何を買うの？」

「えーっとね、二ーナ・シモンの『マイ・マン・ゴーン・ナウ』でしょ、それに『ターン・ミー・オン』でしょ、それとね・・・・・・・・まあ、いいじゃない私が何買つたっていいでしょ？」

「まあ、べつにいいけど、なんだか気になる曲順だな、悪いことにならなければいいけど」

「なるわけ、ないじやあああ、ないかああああ」とコトカが僕の真似をしてそう言つ。

僕とコトカは一人一緒に笑う。僕はなんだかとても幸せな気分になる。

「今日はいつもみたいに怒らないのね？」

コトカはまっすぐに僕を見ている。

「まあ、ね。今日はお祝いだから。そう、そう、それにしてもこの水なんだよ。水じゃないみたいだけど・・・・」

「これはね、日本酒つていうのよ。今日のお祝いのために特別に手に入れたの。日本のお祝い事にはやっぱりお酒はかかせないでしょ？」

「なんだ、これが日本酒つてやつか。前から気になつてはいたんだ

よね。一度ぐらいは飲んでみたいなあ、ってさ。でも、高いからね。うーん、ここは味わって飲まなくては……うん、拙者は満足である。苦しううない、もつと近くへ寄れー！」

「フフフ」とコトカは笑う。僕の冗談にもよりやくついてくれるよになつたみたいだ。それにコトカの笑い方も上品で色気のある笑い方になつたなあ、と僕はつぶづぶ思つ。

「そうだ、実はねー！」と僕は言つ。

「何よ、急に？」

「すういものをオレは用意してたんだ。ジャジャジャジャーン、つてベートーベンじゃないんだけど、実は・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「プレゼントがあるんだ」

「プレゼントがあるのよ」

とコトカも一緒に言つ。

「なんだ？そっちもかよ？オレだけだと思つてびっくりせよつと思つたのに

「なによ、そつちこそ？抜け駆けしきつたつてそつは問屋がああ、おうおねえええええ・・・」

「わかつた、いい加減にオレの真似はやめてくれ」

「私はね、一応、なんだけど、カエルって何も装飾品つけてないじゃない? もしかしたら嫌いなのがなーって思うんだけど、まあ、イヤオウつてことにしておこうね、これ、ブレスレット、はー」

と僕は綺麗なプレゼント用の箱に入ったプレゼントを貰つ。

「オレからはな、まあ、ん、なんていうか、その、今まで、ありがとうってことで、オレのほうもイチオウ、つてことドペンドンとイヤリングのセットだ。オイ、でも、今開けないでくれ。それは一人のときに開けてくれ、それじゃあ、はい、これ」

と喜んで用意しておいたプレゼントを手渡す。

「ありがとう、大事にするね」とコトカは嬉しそうに受け取つてくれる。

「それじゃあ、ボチボチ寝るか?」

「もう? まだいいじゃない? それとも……それって、何かの合図なのかな? しら? ……」

「何言つてんだ!」のヤ……つて違うつて、そういう意味じゃないよ。このところ曲作るので忙しかったから疲れがたまつてこるんだよ。暇の達人でも疲れるときぐらいある

「でも私たち愛し合つているんじゃないの?」

「なんだ! オマエ? いきなり、すつげえ」と喜んで出るなあ

「もうじやないの?」

「まあ、よくわからんけど……………やつやつ見方もこのひり  
…………、世界のどこかでは、それは愛と呼ばれるかもしだ  
い」

「相変わらず、カエルはカエルなのね? ビツボチボチ寝る?」

「オウ」

「一緒に?」

「バ、ババ、バババカ、言つてんじゃねーよ……………  
……………。それは、また今度な。今日はもう酒も飲ん  
だし、仕事も決まつたし、とにかく今日のところオレはこれで満足  
だ、それでいいだろ?」

「じゃあ、また明日ね」

「オウ、ヘイ、ヨウ、セニヨリータ。また明日な」

そういうと僕らは一入でキスをする。僕はそれで十分幸せな気持  
ちになることができる。

「おやすみ」

「おやすみなさい」とコトカが言ひ。

「最近カエルが忙しかったから、全然部屋掃除してなかつたわね。  
まるで豚小屋みたい。あした仲良く一緒に掃除しようね」

「オーケー、わかったからもう寝よつぜ、おやすみ」

「ねえ、カエール」

「なんだよ？まさか一人で眠りたくないといか言つたんじゃないだろうな？」

「ううん、やうじやなーの。私のことちやんと覚えていてくれる？」

「当たり前じゃなーいか！オレのパートナーだぞー。心配しないで安らかに、あ、お眠りくださいませえ。3円3円、耳の口生まれのお姫さま。つて本当にやすみ、また明日な」

「うそ、おやすみ」

うう言つてコトカは部屋に戻つてゆく。僕も汚い食器をそのままにしておぐのはどうかと思つたが、それはまた明日すればいいのだ、と思つ。とにかく僕はなんだか本当に疲れたみたいだ。僕は自分の部屋に戻つてプレゼントの箱を開け、ブレスレットを自分の左手首に着けてみる。なかなか悪くない。でも僕の意識はだんだんとぼんやりとしてくる。

「うーはー車の中よ」と女の声が聞か。

「うーはー、どうだ？」と僕は言つ。

「どうして車に乗つてるんだ？」僕はまだ目もつまく開かないぐらいものすごい眠気を感じてゐる。それにひどく暑い。どうしてこんな

なに世界が燃えているんだ？遠い意識の端っこで記憶が歪んだ音をたてて揺れているような気がする。

「私たちこれからラブ・ホテルに行くの」と女の声が答える。「そして私たちはひとつになるの。世界をひとつに戻すのよ」

「煙草が吸いたいなあ」と僕はつぶやく。

煙草の煙が太陽の光の中で揺らめき、時間に吸い込まれてゆくように消えてゆくのをぼんやりと見つめながら、昨日から繋がっている記憶というものを考える。どこからか吹き込んできた風が女の髪を揺らし、その向こうにある幻のような都市の風景に溶け込んでゆく。この車の外は記憶のない夢の空間のように僕には思える。

到着の汽笛が鳴り、僕がどこかに辿り着いたことを告げる。「ほんのだらうと僕は思う。流れ着いたその先がどこに向かっているのか僕には知る由もない。

いつの田も意味だけが降り積もる。手に取るとゆっくりと溶けてなくなつてゆく意味。恐る恐る後ろを振り返るとそこには膨大な意味だけが積み上げられている。

意味のないものがあるすぎる。

そしていつも意味だけが回り続ける・・・。

「ここのみ、眠りてしまえよ」

女がやつぱりのが聞こえる。

「眠ればいいのよ。あなたの見ている闇が全部溶けてなくなつてしまつまでね」

女が僕の瞼にさつと手を触れるのを感じる。僕の見ている闇は白っぽく歪む。女の手からは不思議な安らぎが感じられる。女の手の指がゆっくりと僕の瞼を撫でるとそれに合わせて僕の見ている闇にはさまざまな色が浮かび上がる。

「いこりよ、すべて忘れて眠りてしまえよ。結局あなたはここに来てくるんだから」

耳を済ませてみても女がどこにいるのか正確な位置が掴めない。それは頭上から聞こえてくるかづな気がするし、あるいは下から聞こえてくるのかもしれない。

「一本の糸を辿ってくればいいの。あなたはきっとここへ帰つてこられるはずよ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4472e/>

---

武士道・is・Dead

2010年10月20日19時07分発行